

始



後藤朝太郎著

文字の研究



東京關書院發行



第一圖

埃及五千年の古石人に見る刻文手拓縮圖

前清、端方より大司大人に贈れる對幅の一、著者珍藏。エジプト、ヒエログリフイックの俗
 侶文字は埃及繪文字として最も莊嚴なるもの。文字の元始狀態がもと繪畫の描寫より出てゐる
 もの多きことは支那、埃及の外に近來またアツシリア、バビロンの前身スメル、アカツドの文
 字の繪畫より出てゐる事實の發見せられたことからも判明して來た。

埃及にありてはその元始形の意匠、複雜多様なりといへども、その鳥の形したものが、後の
 Aの字の源をなし、又口の恰好した圓形がOの字となり、又水波の形がNとなり、ライオン形
 がLとなると云つた調子に、その文字の系統が歴然として後の歐洲文字の源泉をなせるものた
 ることを知る。學者は埃及の十八王朝時代に榮えてゐたこれらの繪文字が地中海に伸び、サイ
 プラスから希臘に傳はりギリシャ文字の古いところを形成し、更にそれがローマに入り今日の
 ローマ字の形態に變遷し來たつた徑路を説いてゐる。そこには議論の餘地がないでもないが、
 その大要、現代歐洲文字の根源をなせるものたることだけは最早や疑のないところがあるとな
 されてゐる。

第一圖

埃及五千年の古石人に見る刻文手拓縮圖

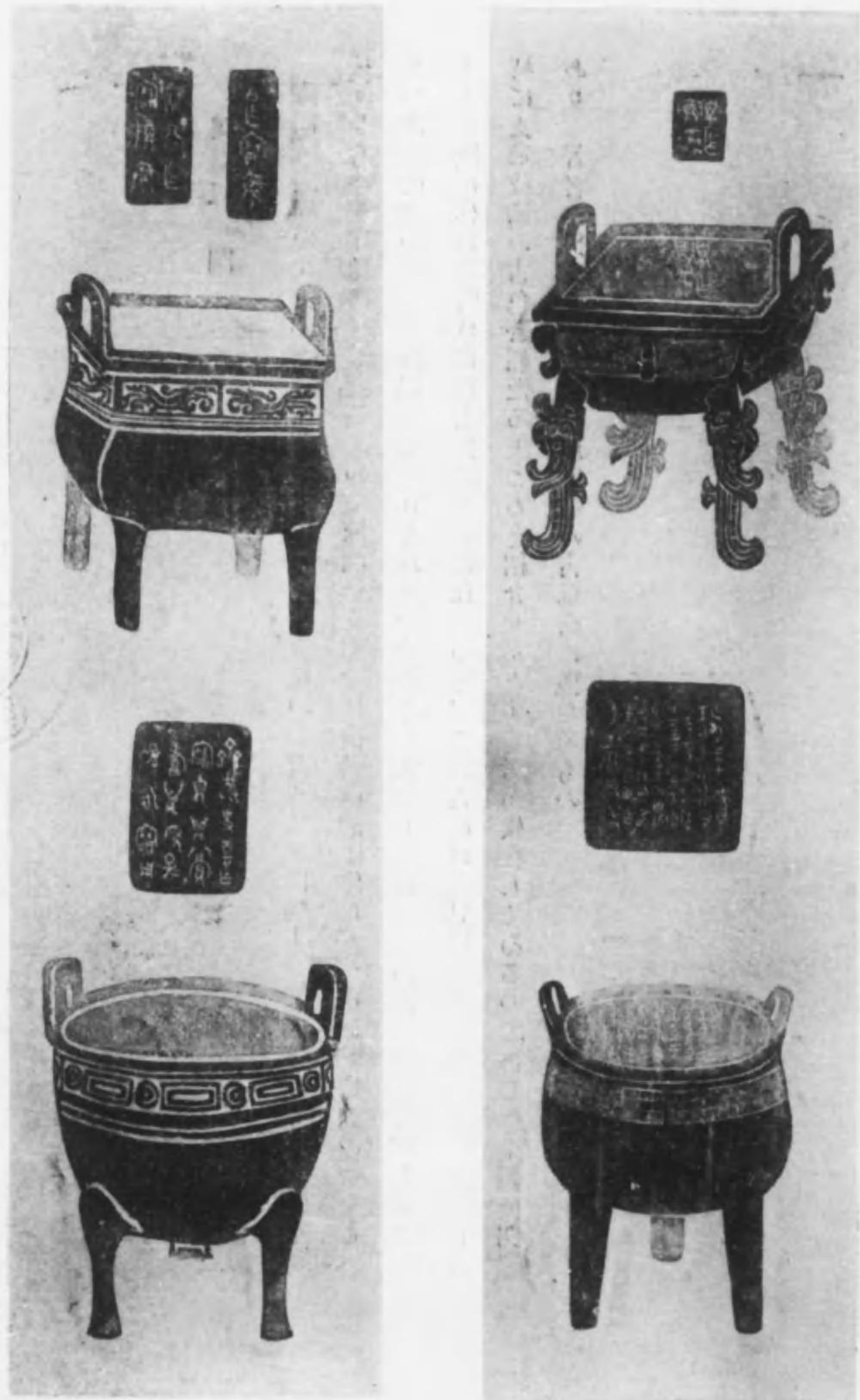


大司大人釣鑑 丁未年花生日 萬壽寺敬題

第二圖

傳に所謂周の文王鼎及び旅鼎の形體を示す。後の二寶鼎又之に類す。圖は鐘鼎彝器の類を手拓せしものを印影に付したるもの、縮圖。支那では掛軸幅額に作らんが爲め特に其の形を並べ且つ之が内側の篆文を抽出してそれぞれその傍に之を現はしてゐるものがある。鮮明なるコロタイプ版に作れる時代に即したるものに比べると、こは古ぼけて見ゆるものもあるも、こゝには特に支那技術の古色蒼然たるところを紹介せんとする考が伏在してゐるのである。全體で四幅あり。著者が民國の始め北平琉璃廠の古玩店に獲たるもの。

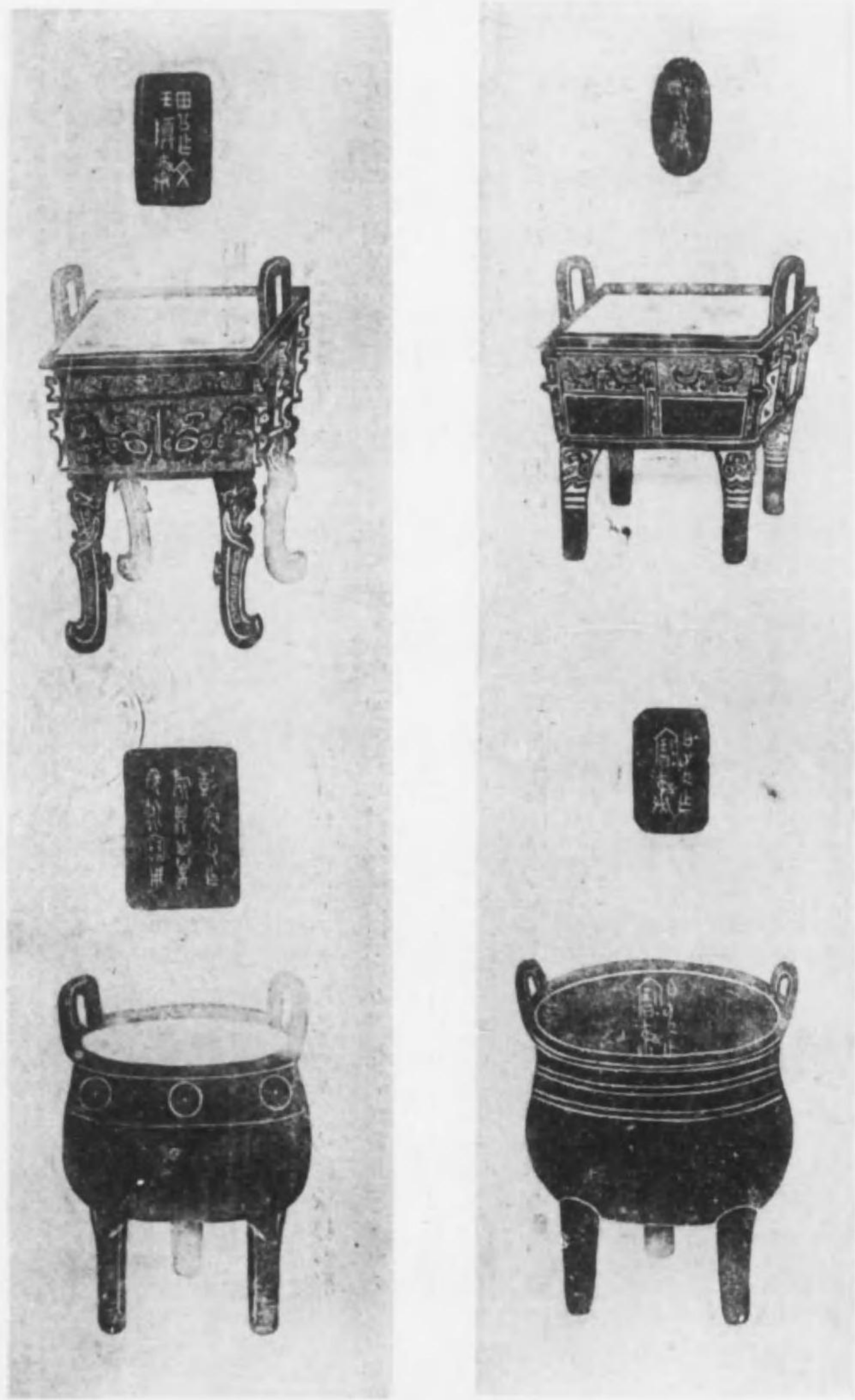
第二圖



第三圖
 周の寶鼎圖象四種

三代の寶鼎はその圓なるあり、方なるあり、その脚曲れるあり、直なるあり、時に象鼻の形せるあり、獸足の形せるあり。またその器の周曲にある紋様は雷紋あり、虺龍紋あり、タウテツ(饗養)紋あり、千態萬様である。時には又龍にして脚の寫生的なるものもあるが、こは廣東地方に現在棲息せる天龍(蛇にして四肢のある爬虫類)を、そのまま圖案化したるものを古銅器にとり入れたるものなること明白である。尙これら祭器に見る銘文は鑄文なることがあり、鑿銘なることもある。その字數に様々のものあることは云ふを待たないのである。

第三圖



第四圖
篆文孝經の卷頭

清内府原本影印四書の公にせられてゐることは、金石文字學者の夙に知るところ。清、光緒年間、吳大澂、說文古籀補を著はし、その大篆の字體を以つて孝經を寫したるものが即ちここに掲ぐる篆文孝經である。孔子壁中の書は今日之を具體的に知ることが出来ないにしても先づこの字體で以つてその一斑が推される。最初の仲尼の二字にしても、また子曰先王有至徳のところにしても、又和睦の二字にしても、その篆文といかに隔りのあるかゞわかるのである。本當の研究はこれが讀めなくては孝經が讀めたと云へない。

第四圖

孝	經	仲	尼	居	曾	子	侍	子	曰	先
王	有	至	德	與	道	以	順	天	下	民
一	甲	用	和	睦	上	下	無	怨	中	女
知	之	乎	曾	子	避	席	曰	參	不	悖
不	悖	何	足	以	知	之	子	曰	不	悖

第五圖

山西省、長城以北、大同府エンカン・シーフウス（雲崗石佛寺）
に見る最大石窟の露佛像觀

こゝには北魏拓跋氏時代の佛教藝術が最高潮に達した時分の特徴を漲らせてゐて、その様式その手法共に豪健、而かも優麗の幽趣が閃めいてゐる。その數から云つても北齊天龍山の石佛どころではない。著者は往年その兩者を探查して見たが、圖に示すこの偉像は斯界の上乗の者としてもよいやうである。座像にしてその高さ七十二尺。耳の字、目の字など、象形文字學上に參考となる點が多い。

第五圖



第六圖

孔夫子の杏壇、門弟七十二人に教を垂れ給ふ圖

山東曲阜聖廟を中心に孔林、孟子林、周公廟少昊金天氏とあの界限には、儒教に縁故深き處がかなりある。馬山途上の鄭零壇は今も尙その遺蹟を留め、懐古の情を唆つてゐる。魯壁孔井を始め曲阜隈幾多の史蹟は夫子の尊影を想起せしめ、見れば見るほど感慨無量なるものがある。聖賢枯木の筆致の間に、人の姿や木の象形資料が數多搜し求めらるるやうな氣がする。

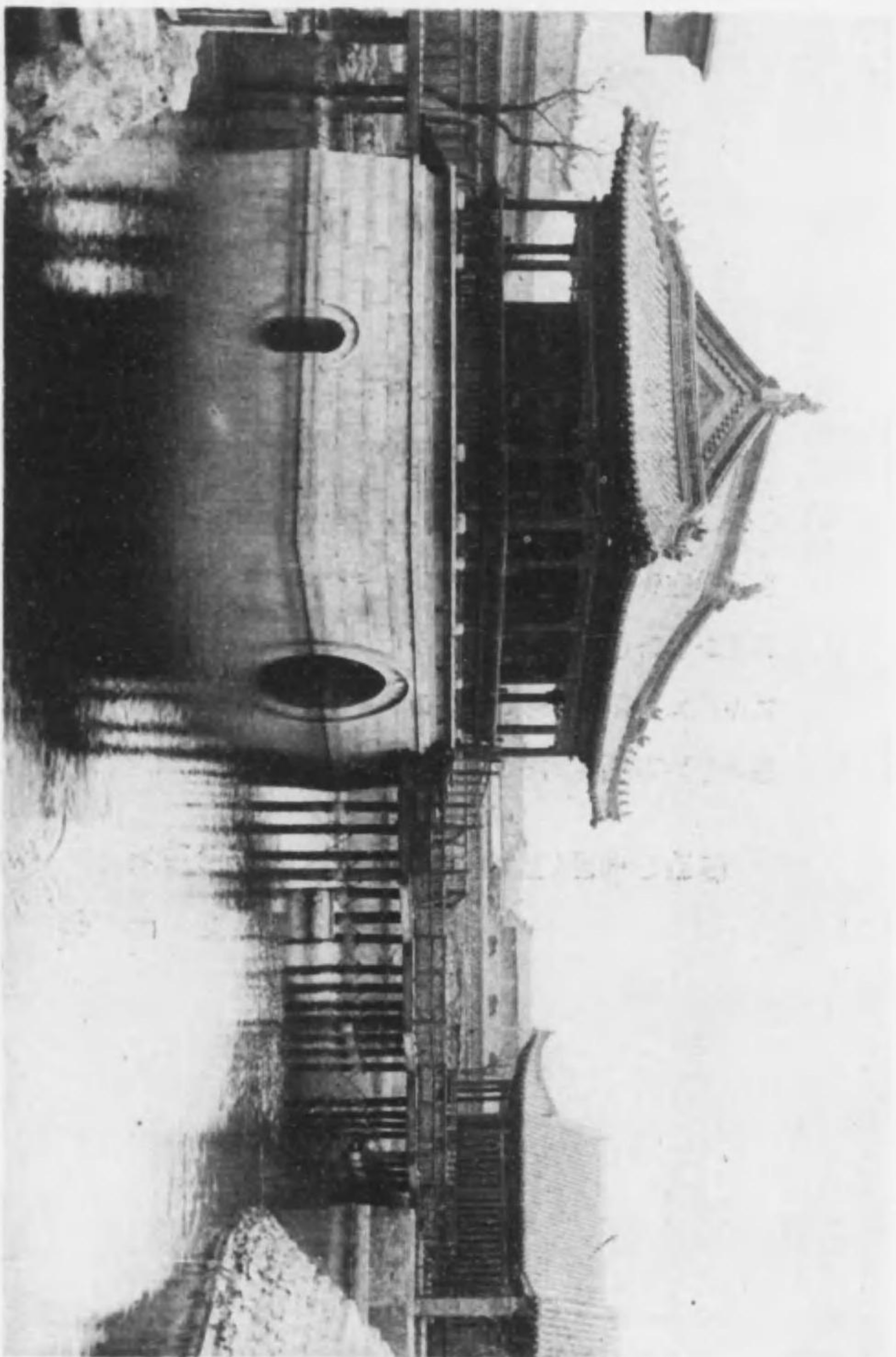
第六圖



支那文字の生ひ立沿革を知るには、支那建築様式の大體を知つておくの必要がある。古代の殿堂樓閣は後世のそれと固より隔絶せるところあるにしても、尙且つ古典古禮に見出さるるものとそつくり一致せる言語や文字が相當にある。李公祠は李鴻章を祀れる天津租界隨一の名勝で、古の祠堂樓閣を想像する上の概念的な参考資料となるものである。支那風物を取扱ふ時はかうした近代的なものでも等閑視してはならぬのである。

天津租界リコンヌ(李公祠)廟宇の清趣

第七圖



第七圖

支那四百餘州に現存せる王者の神苑で、北平のペイハイ(北海)チュンハイ(中海)ナンハイ(南海)と云つたものくらゐその規模の宏大、典雅にして神祕を感ぜざるものはない。その碧空に聳ゆる喇嘛塔下の林苑と云ひ、長廊、瀟灑臺の清秀美と云ひ、又都人士の去來に開放された大理石橋と云ふこれらの綜合藝術に窺はるる妙趣は、萬壽山の舊離宮の神苑と並稱せらるるの價値がある。森の宇の象形の思付きはこゝにも手掛りを見せてゐると云へるであらう。

北平紫禁城内白塔下の景觀

第八圖

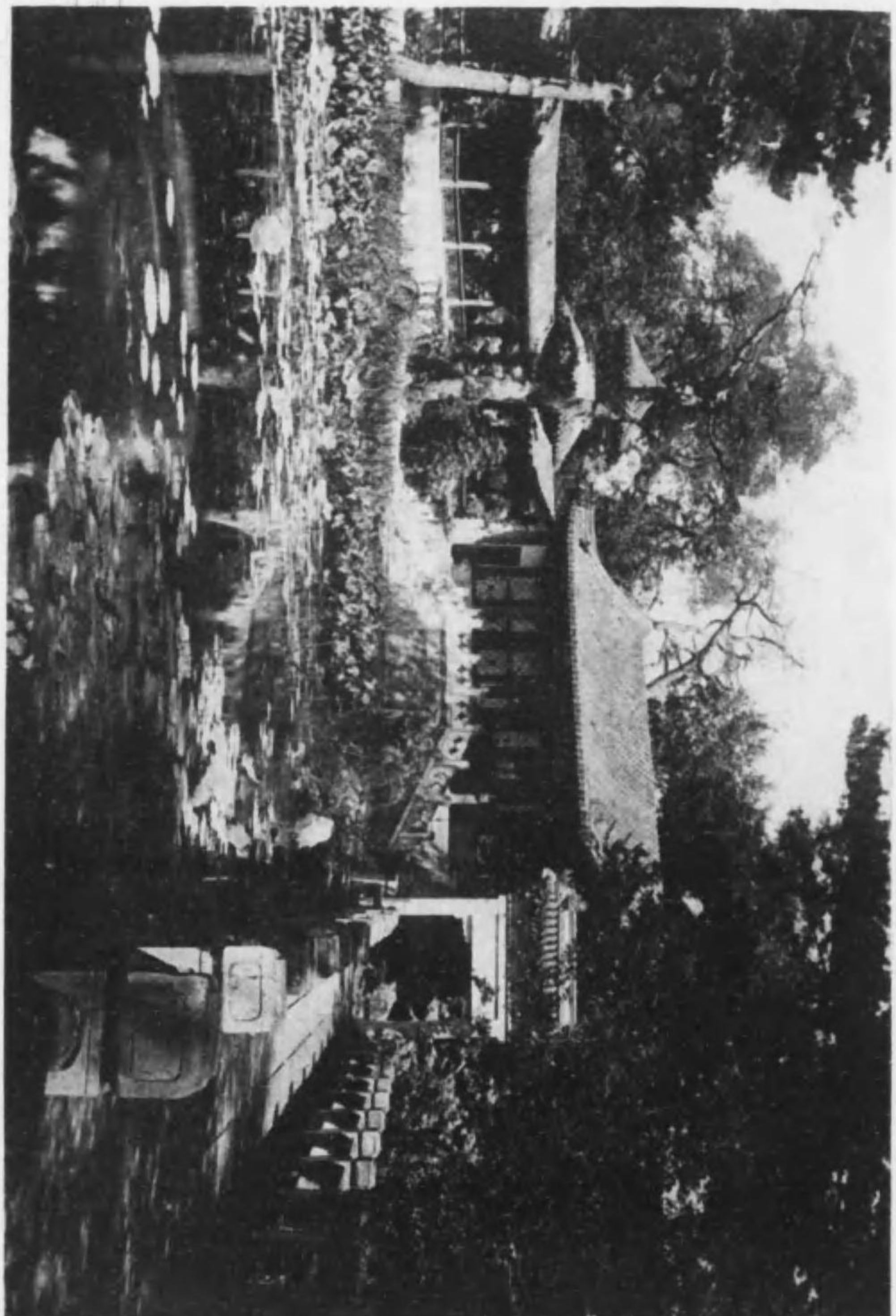


第八圖

萬壽山には仁壽殿、文昌閣、佛香閣など云々金殿玉樓の
 外に、昆明湖畔の石船銅牛、十七空橋、一孔橋など幽邃枯
 淡な點景は數々切れぬ程ある。中にも翠瀾る茂林を背景に、
 古池の睡蓮の靜かに咲き幾ひ、邊り人語の響きなき處が最も
 吟客の心を牽付けてゐると云へる。文字の國の故園、逍遙に
 傾ずる處はこゝばかりではないが、その門の字の象形を思は
 しむる小門の指さるゝあたりの趣は亦妙である。

北平シーサメン(西直門)外、
 萬壽山頤和園の後園幽趣

第九圖



第九圖

北平城外アールチヤ(二閘)の冬景色
 北平)城外には朝陽門外に開ける東蘇廟である
 とか、アールチヤ(二閘)であるとか、相當人を乗付くる名
 勝がある。この二閘の水はもと萬壽山から引いて来た河で
 あることは勿論であるが、冬季リエービシ(流水)にステイ
 ト遊びする者の多く、又圖に示す如き滑りのついた臺に乗
 り曳かせてある紳士淑女もかなりある。河向ふの民家は
 向の字の象形を示し、舟は舟の字に因んでゐる處があると
 見て差支ないのである。

第十圖

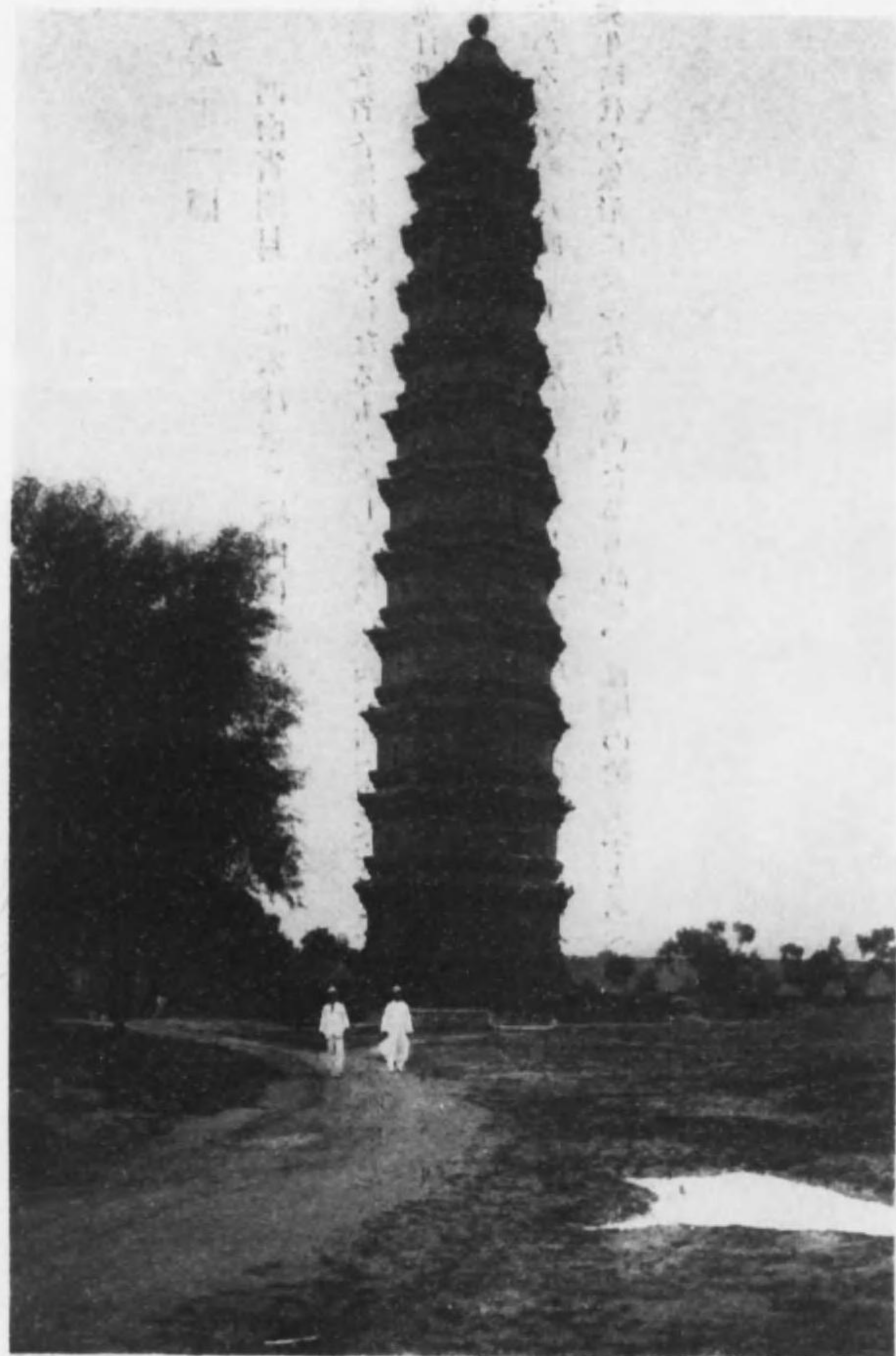


第十圖

第十一圖
河南省開封（北宋汴京）城内に聳ゆる鐵塔

支那各省各地佛塔の偉なるものとしては、陝西、西安（長安）に大雁塔、小雁塔があり、浙江錢塘江畔に六和塔があり。その他枚舉に遑なき程あるのであるが、何れも石造、甌造、陶造、木造であるそれが鐵造なるは少い。恐らく河南のこの鐵塔は、宇内に冠たるものと云つても差支なかるべく、八面、十三層の古塔として建築學史上留意せらるべきものかと考へる。こは文字發生時代の象形に交渉なきものなるも高臺、樓閣の繪文字と考へ併すべきものである。

第十一圖

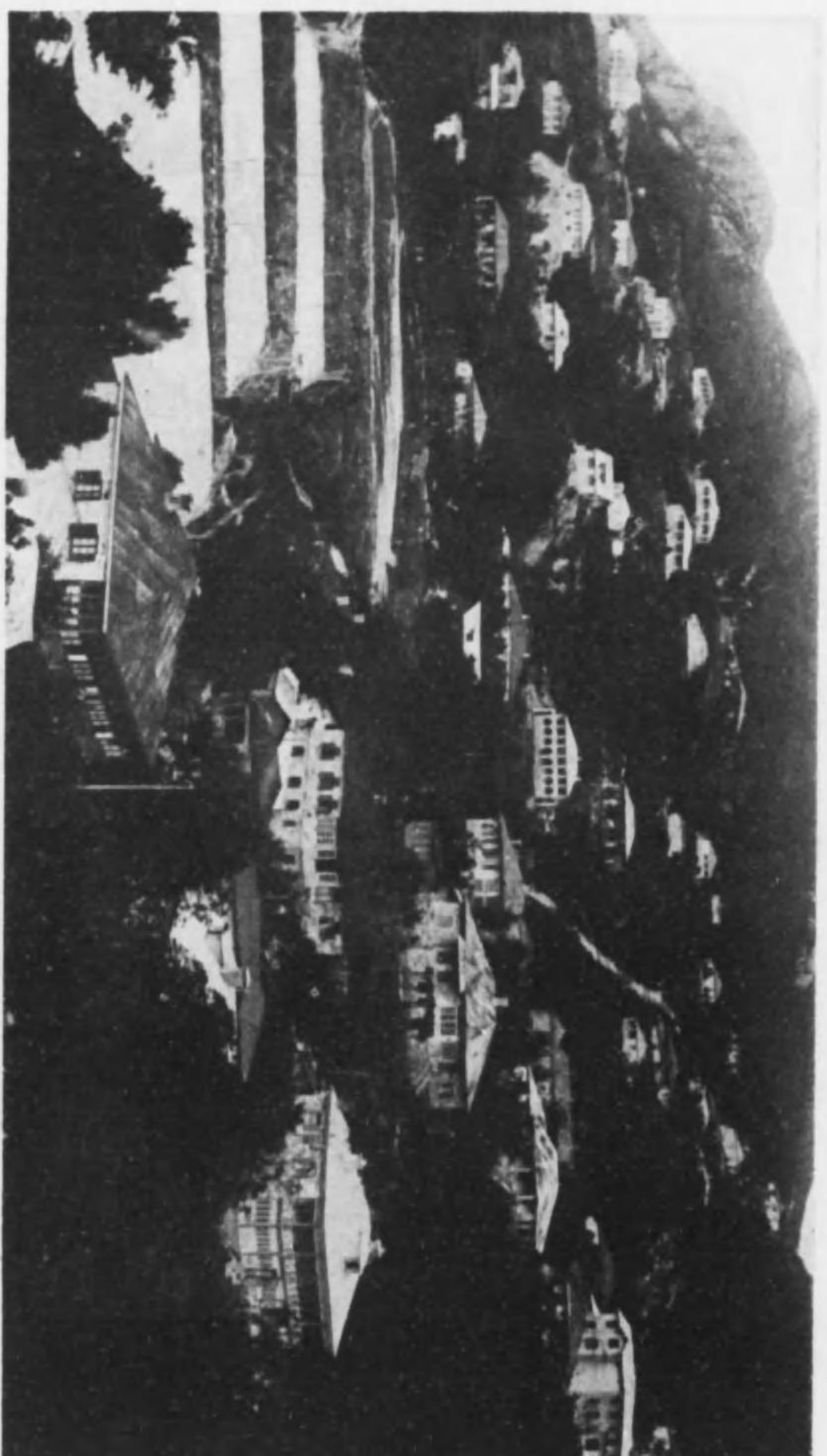


唐の李白、自樂天によつて天下の名山としてその名を恣
 にしたルンヤン(廬山)は今や世界的に國際避暑地として喧
 傳せらるゝに至つた。香爐峰、五老峰、大漢陽峰、金輪峰
 雙劍峰の群峰あり、虎溪三笑の虎溪橋址あり、李白の瀑布
 あり、陶淵明の故宅あり、文人學者の書を赫き筆を玩ぶに
 は絶好の仙境である。頂上の積嶺は外人を乗付け、各グッ
 レーの步道散策は最も大陸情趣を喫つてゐるものであると
 云へる。

廬山クワリン(特嶺)の別荘地

江西省九江に近き

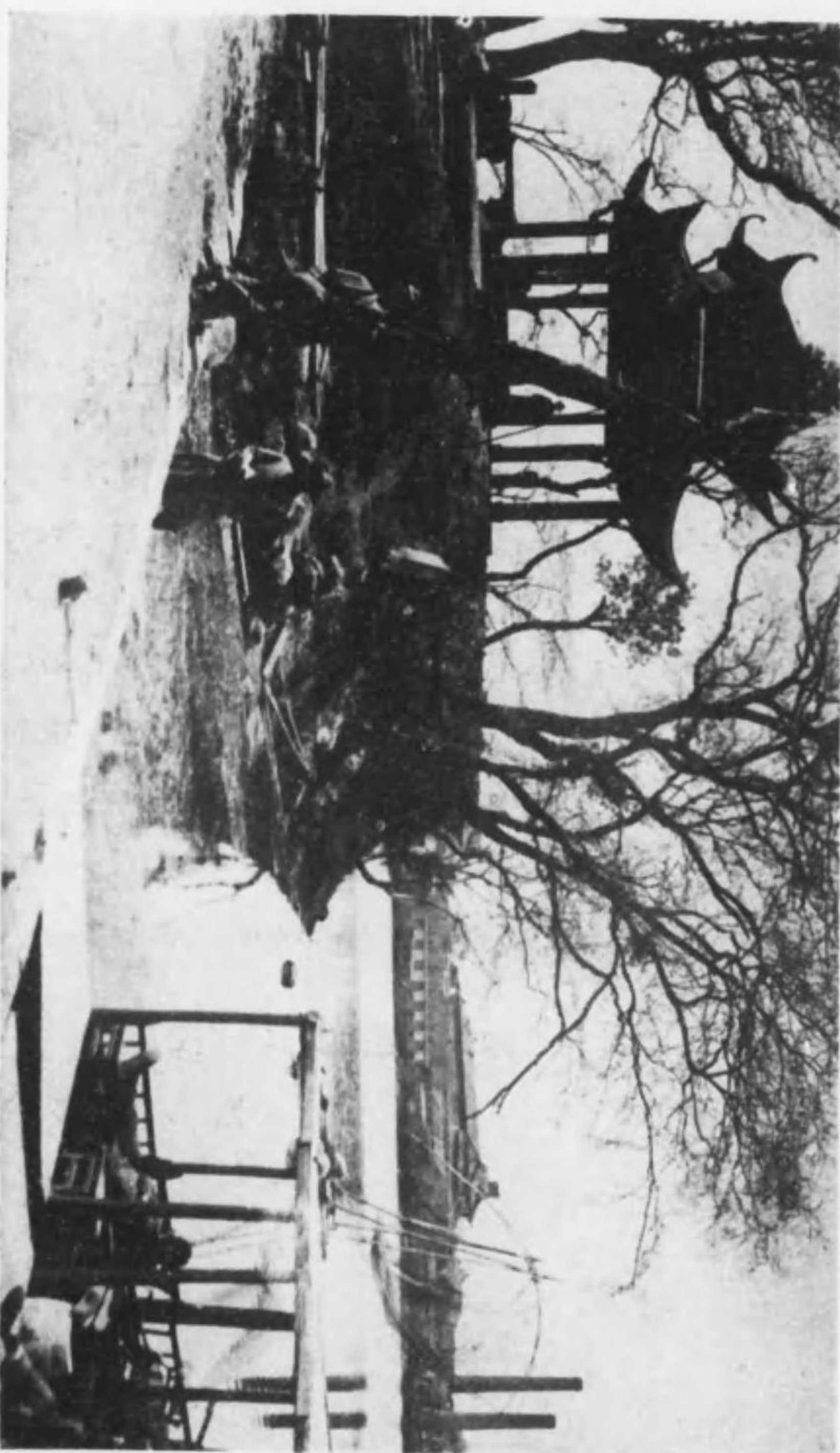
第十二圖



第十二圖

江西省は瑞金を中心とする共匪跳梁の異聞で近年來知られた省であるが、九江、景德鎮、廬山、甘棠湖、鄱陽湖、大姑山、湖口などその名勝地の古來聞こえたものが相當にある。陶淵明の知たりし彭澤縣が江畔山陵にあたり指さるは人のよく知る處である。圖は省城南昌、百花洲の最も風光明媚なところ。飛亭湖面に臨み、游船碼頭に着けられ、四ツ手網に餘念なき老翁、樹下の水上に見ゆ。亭の宇の象形様式、この圖に指さるゝもの如く一目瞭然たるものは滅多にないのである。

第十三圖 江西省南昌百花洲の風景の風致



第十三圖

揚子江邊蘇東坡が四十九歳の秋、客と舟を泛へて赤壁の下に游んだと云ふ故址を傳へんが爲め建立せられたと云ふ東坡寺は、今も游客雅人の心象を刺戟することが少なくない。こは九江潯陽江頭の琵琶亭と好一對の名勝として數へられてゐる。訪ぬる人の影も見えず淋しい環境に、一木一石東坡を聯想せしめてゐるその力は偉大なるものがある。高樓を示せる圖象には建築文字に因める者が多いから特に留意を要する所である。

第十四圖
湖北省黃州城外東坡寺の景趣



第十四圖



第十五圖

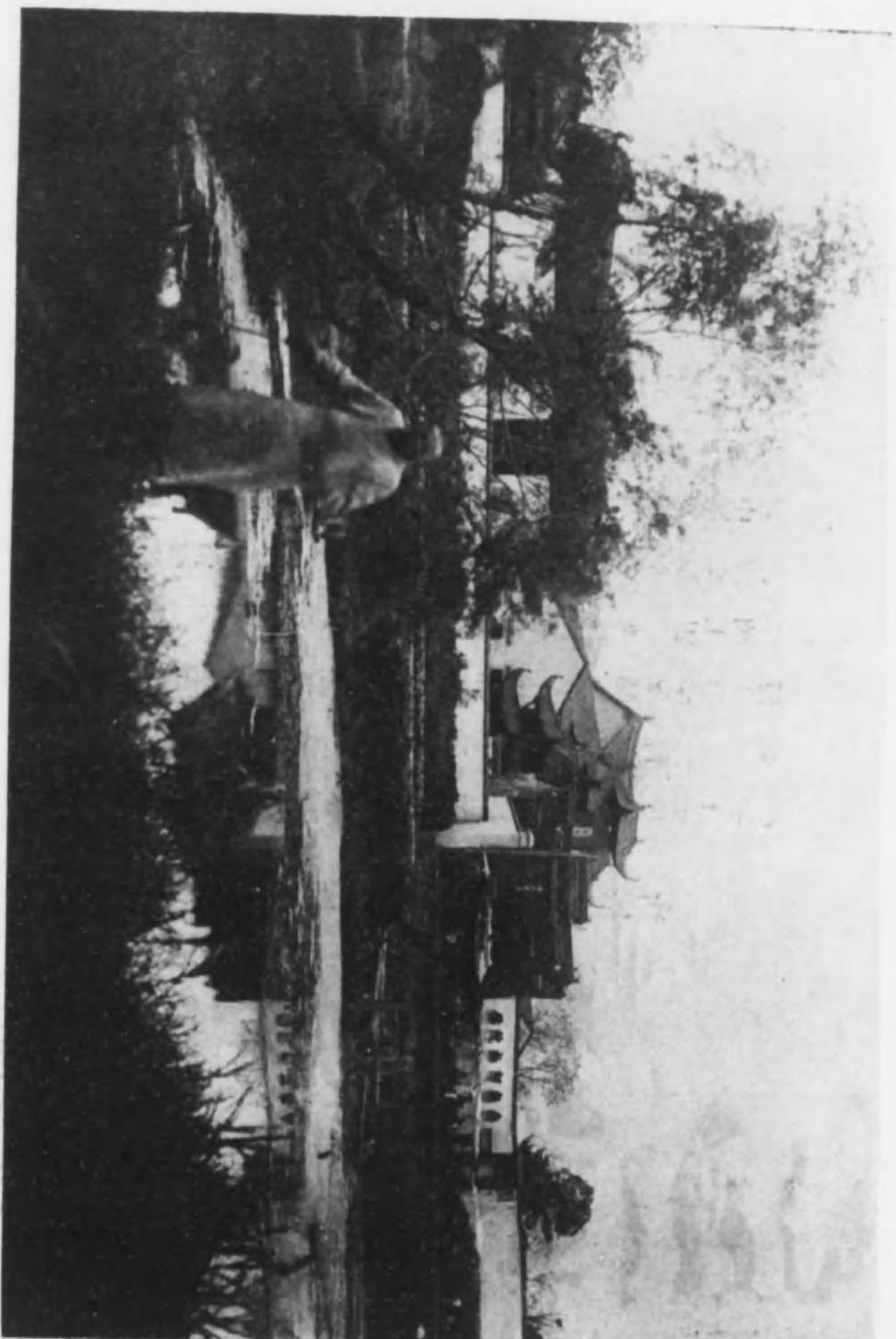
第十五圖

湖北省黃州、東坡寺境内に見る建築美の一角

支那建築史上に見る飛檐、草椽、柱楹、句欄から壇壁、瓦甃、阼階、通路、鋪石に至るまで
古代文化の後世に傳はれるものを自ら實地に検討してみると、周、秦、兩漢、三國、六朝と脈
絡相通するものあるに氣がつく。瓦一枚取つて見ても又壁間の孔の開け方一つ見ても、千古の
史的意匠の溢るゝものがあるを覺ゆる。その局部局部が古代文字に因める所ありやなしやを親
しく吟味せられて欲しいのである。

湖北省、漢陽、歸元禪寺門前の清境
第十六圖

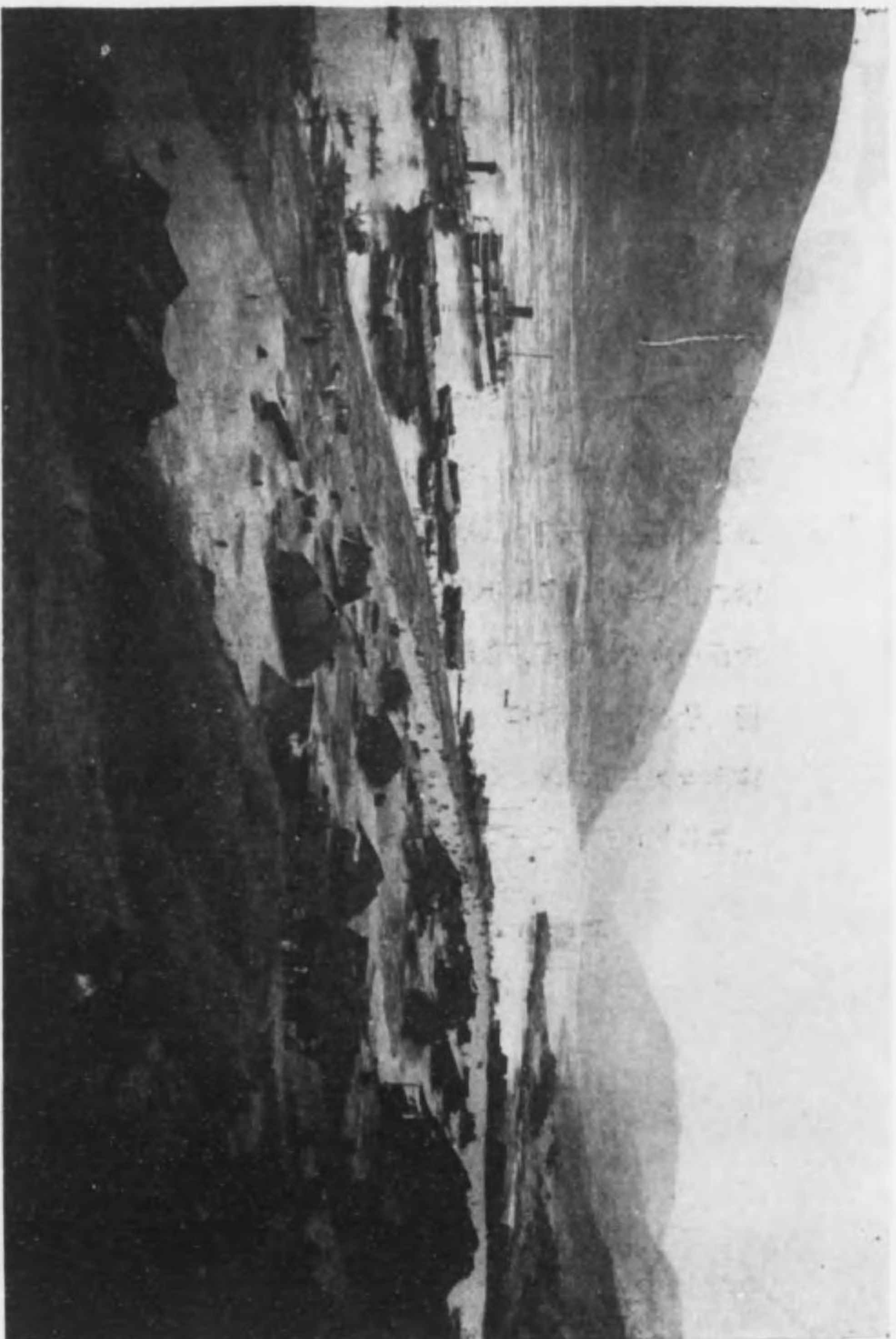
武漢三鎮の稱を得たる漢口、漢陽、武昌はそれぞれその風致風物に於て特徴を異にしてゐるが、右に武昌、左に漢口と、江を挟んで翼都を控へ、大別山上の大觀を恣にし得るものは、漢陽である。これには古琴臺があり、禹王廟があり、製鐵場があると云ふ風に見るべきもの多々あるが、中にも歸元禪寺は、ルコ・キロの羅漢像を五百の群像中に蔵し、香客四時絶ゆる間がない清境である。壁畫された南無阿彌陀佛の筆蹟は珍と云ふわけでないが、云ひ知れぬ剛健さを見せてゐる。



第十六圖

巴蜀の天地は人口五千萬、面積約日本の二倍と云はれ、鹽鐵を始め自然の寶庫に恵まれてゐる。著者四川入り前後二回。つばさに沿岸の風物を觀察して見たのであるが、圖中江上の輪船は我が日清汽船。江邊の伏屋は鹽を焚く處を示せるもの。夏季の増水期には江底となれる處も秋から冬にかけては一面に鹽を吹き出して鹽田と化す。鹽鼻頭の名を得たる所以もこゝにある。六の字、向の字、家の字又鹽の字などの象形の思ひ出さる建物の指さるは興が深い。

第十七圖
四川省奉節縣クイン(鹽府)の
江畔に散點する鹽屋



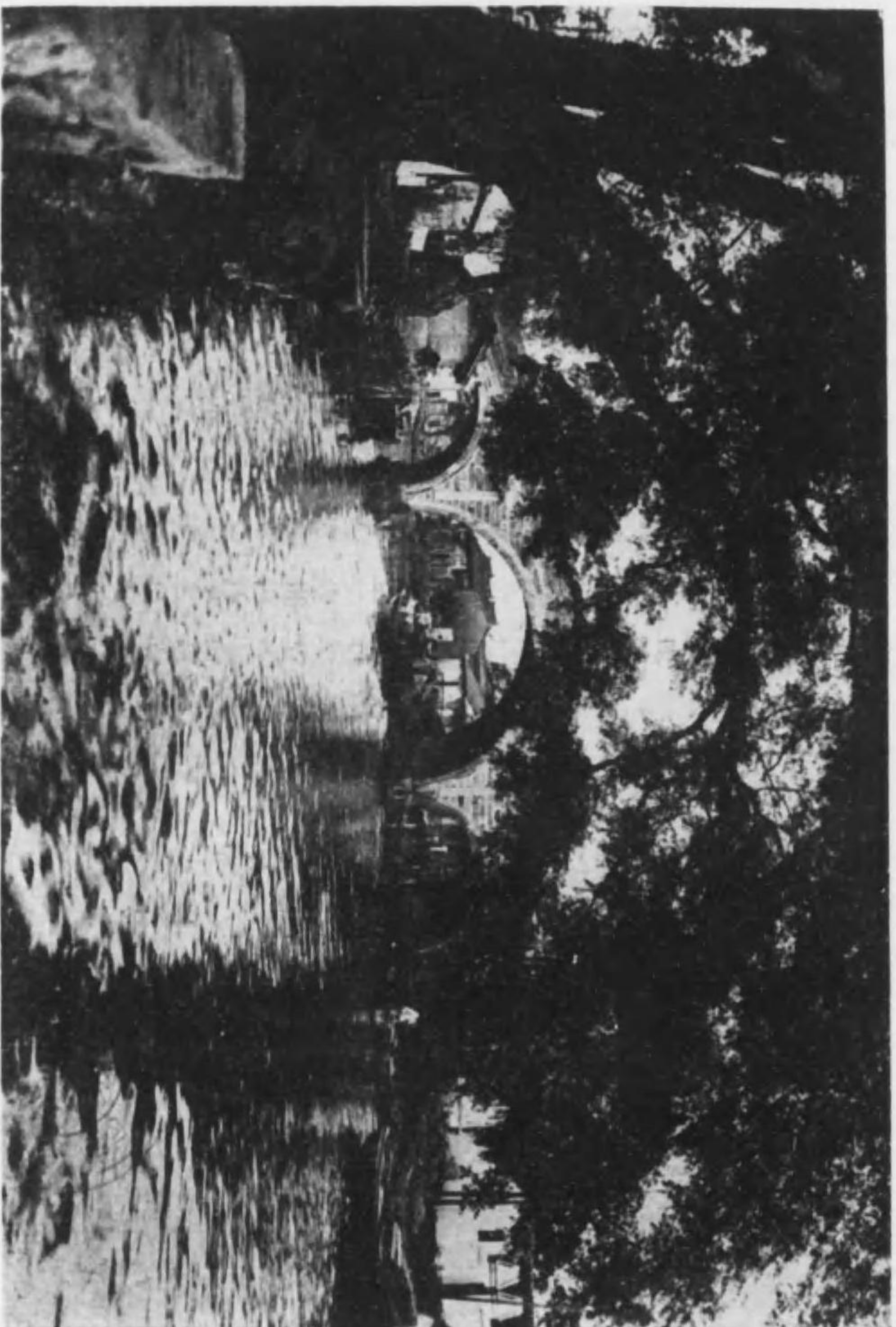
第十七圖



世界の水都とし云へば、いつも伊太利ヴェニス町がその名を悉にしてゐるが、支那は江南地方を踏破して見るといくらでも民屋飛亭の水に泛んでゐる水景が見出される。浙江の江蘇の水郷は悉くこれ皆水景。蘇州、崑山、常熟、無錫、吳江、湖州、松江、嘉興、杭州、紹興、寧波、一つとして水都ならざるはない。水の字、江湖の象形がこれらの水の動きから出てゐることは、古人もよく考へつゝいた罪を思はせてゐるものである。

江苏省蘇州ウーメンチヤオ(吳門橋)
附近の江南式水景

第十八圖

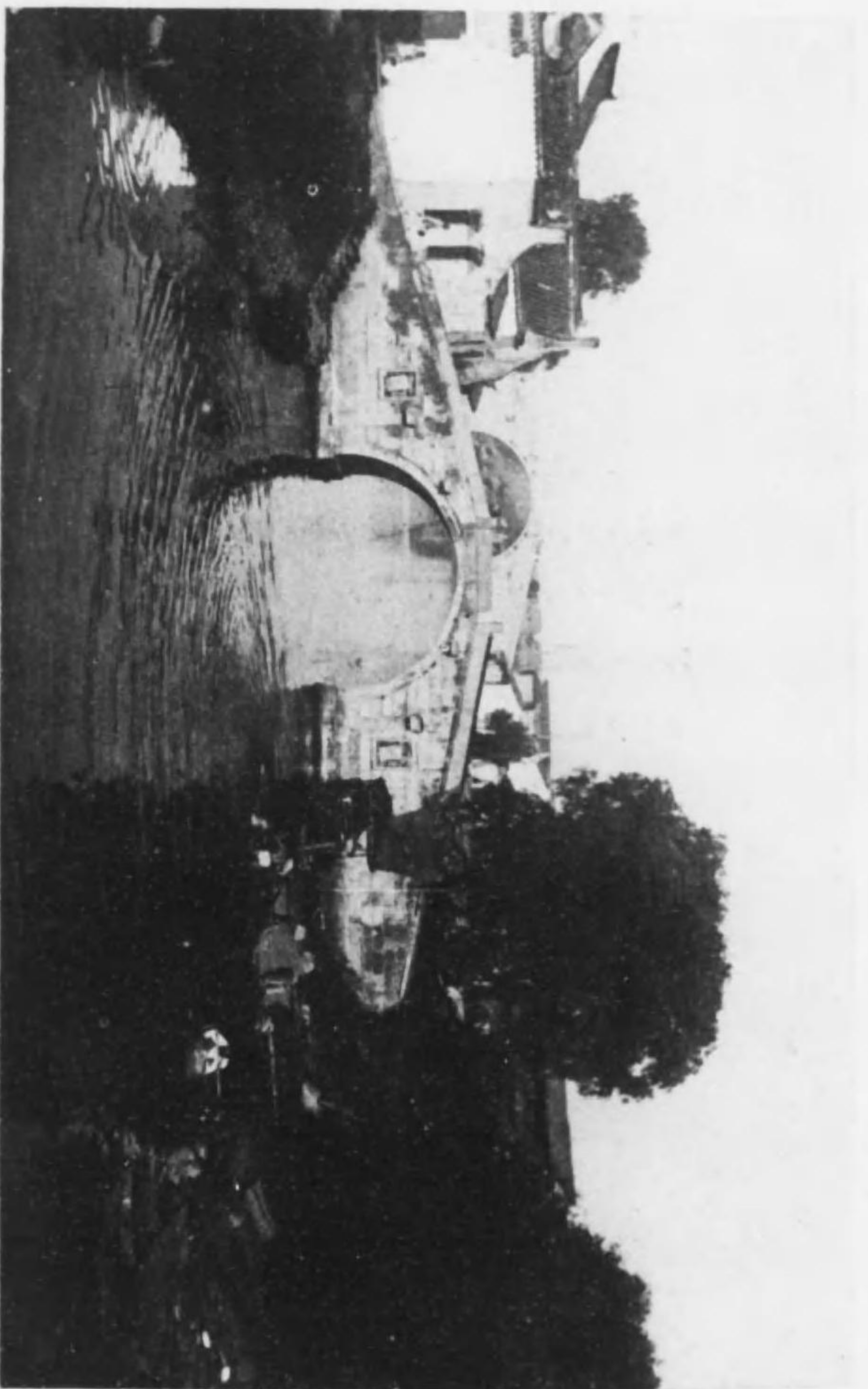


第十八圖

浙江沿海の水面と浙江内地の運河の水面とは殆んど水の
 落差が認められぬとまで云はれてゐる。従つてこのあたり
 の水郷の水は運河と云ふ運河、いつこを見ても、流るゝが
 如く流れざるが如く、如何にも静かである。綠蔭橋下の淀
 みに岸の草を啄む白鳥の二三。又對岸に水遊びする子供の
 二三が靜かに波紋を作つゝゐる處は懐かし、益古代人の水
 の象形を工夫したときの苦心が思ひやらののである。

蘇州城内、南門橋界隈の水郷情趣

第十九圖



第十九圖

第二十圖

浙江省カーシン(嘉興)城内水邊住宅の情趣

江蘇浙江の天地は運河網の組織が完備し、史上有名な隋の煬帝の大運河ばかりでなく、大小無数の水路が江南田野の間に開けてゐる。河邊見る所の民屋、商家住宅は日本建築と似通ふ處の多く、また障子窓に貝の應用せられたるは珍とするに足りる。文字行脚に江南の水郷を行くは、兩岸の風物を象形の材料と見做し得らるゝもの多く、その間趣味津津として盡くる處を知らないのである。

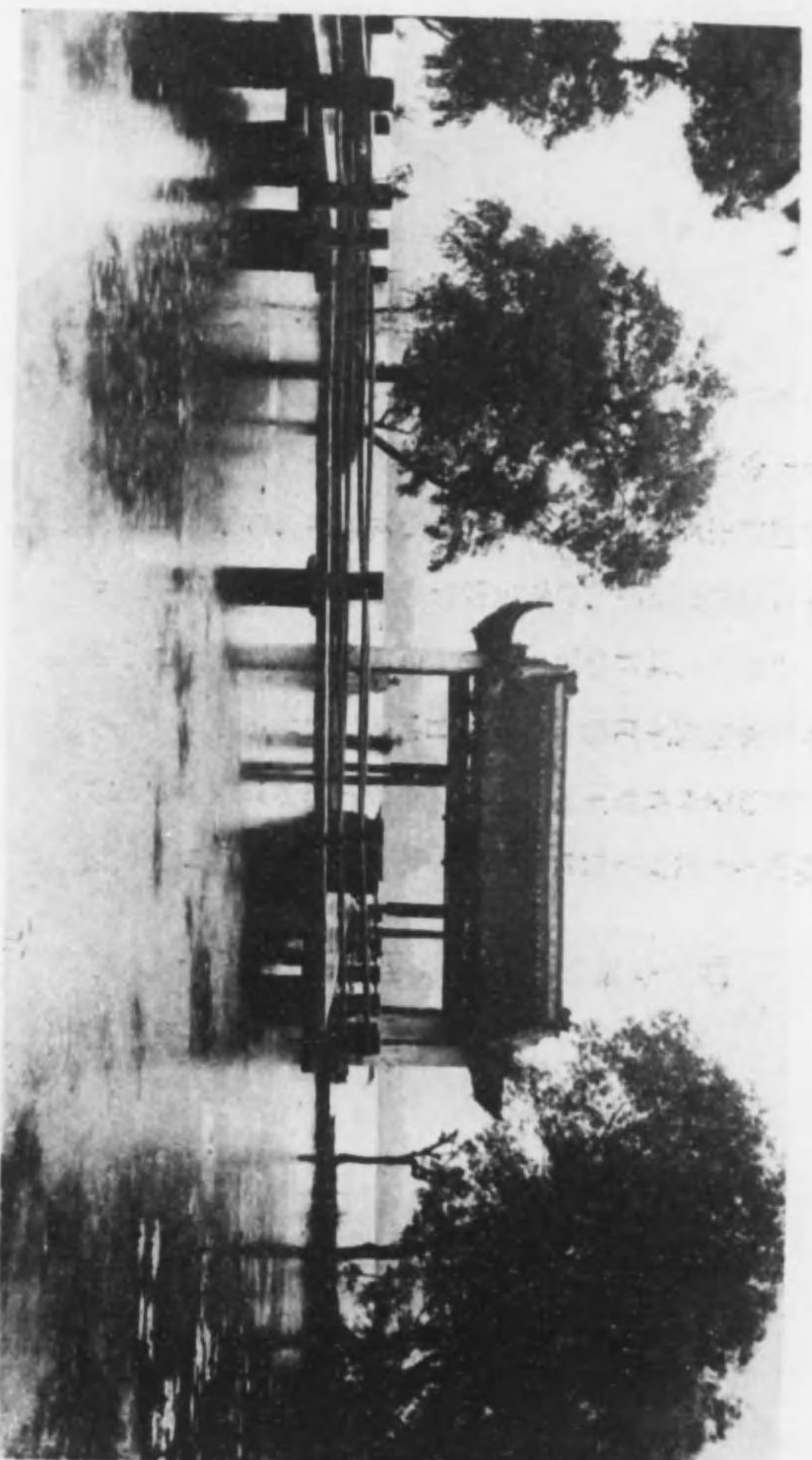
第二十圖



支那四百餘州の庭園風致として世に最も八益しく囑傳せられてゐる者は西湖である。中にも湖上春夏秋冬の景趣闊朗を深へてゐる者を三潭印月となす。彭氏先賢祠堂より十三曲の石橋傳ひに進み行き、飛亭を訪ねれば、尺語の響きあり。今は亡き雷峯塔のことなど思ひ、その遺址の方角を指し風月を談じ、又東坡の古を偲ぶ。自分は文字行脚の迹次必ず舟を泛べて此に遊ぶのであるが、圖中その亭下二人並ぶの形は正にこれ从(従の古字)の象形起源をなせるものとして見らるゝのである。

浙江省杭州西湖三潭印月の飛亭入語

第二十一圖

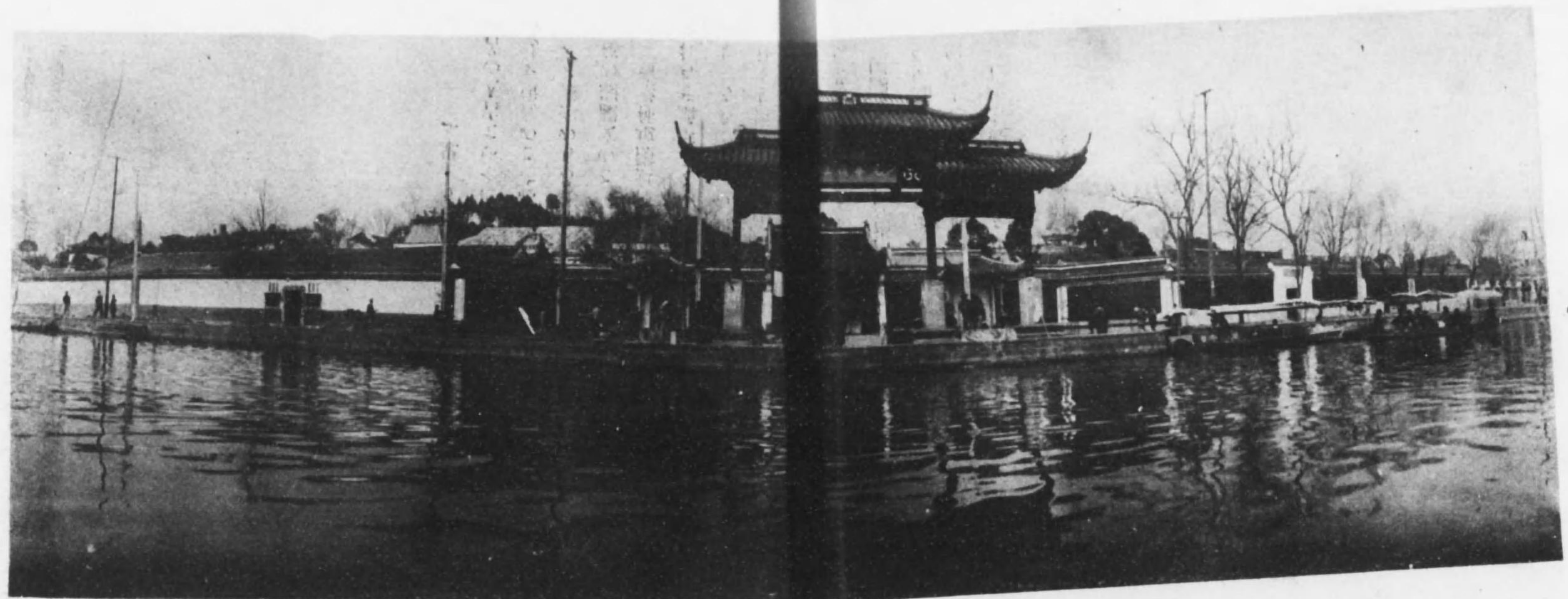


第二十一圖

第二十二圖

浙江省杭州西湖平湖秋月之牌樓水景

湖心平眺の詩韻ゆたかな仙境は孤山を以つて最となし、こゝに放鶴亭、西泠印社、樓外樓、哈同の別業などと隨處に遊び場を見出し得らるゝ。しかし平湖秋月の碼頭邊りくらの名勝のかたまつてゐる處はない。浙江圖書館、文瀾閣、公園、光華復旦の牌樓、石獅と随分集められるだけ集められてゐる。西泠印社の小門も程近い處にある。湖天一色、石治業の聯句を見ると、平湖平長似鏡、四時月好最宜秋とある。入つては閣中四庫の大冊を見、出でゝは湖上扁舟に乗り出し、秋月に金波銀波の碎くるを賞するは、齊しく日支文人學者の連中に體驗せしめたき清興の一つである。しかしこの頃、胡來潮の聯句を見ると、次の文字が誦ぜられる。四季笙歌尙有窮民悲夜月。六橋花柳渾無墮地種桑麻。新興滿洲國の四庫刊行事業のことを思ひ、この文瀾閣の秘庫大冊の運命に想到するは轉た感慨無量なるものがある。文字研究者にして平湖秋月に遊ぶ雅客は必ずこの秘庫を訪ねて乾隆四庫全書の寫本大冊の豪華振りについて古人の苦心のある處を味つて見る必要があるだらうと思ふ。



第二十二圖

1911

第二十三圖

支那文字遊歷途上の著者の支那服姿

支那の文字金石學者や文人墨客老農禪僧を巡訪するには和服は適せず。又洋服姿はきこちなく、環境にも調和しない。鐘鼎瓦甗、古拓典籍から桃花流水に就いての清談にはかうしたシーコワビマオ(西瓜皮帽)とマーコワル(馬褂兒)に限る。似合ふ、似合はぬは問題でなく、目的遂行の上から云つてピッタリ来るし、又なごやかに行くもする。象形の衣の字の源流に思ひを致すときは一段身肌から之か放したくなくなるのである。

第二十三圖



316-142

文字の研究序

日本人相互の住所姓名は、時にたゞ口で發音して見ただけでは判りにくく、文字に書いて見せるなり、名刺を出すなりして始めてそれが判然するところがある。ゴトウ(五島)と云ふ人が會て後藤先生と書かれた座席札の處へ案内せられても、それが自分の席だとは思はれぬ。詔勅を拜しても證書を頂いても間違つてないちやんとした字で記されてなくては有りがた味が出ない。戸籍謄本にしたつて之が漢字できちんと書かれてなければそこに明確さが保持されない。かやうな譯で因襲の久しき習ひ性となつてゐる爲め、今日相互の使つてゐる漢字は日本國民性の中に既に採入れられ融合しあつて立派に血となり肉となり、日本精神文化の奥底を流るゝ源流となつて了つた。され

序

一

ば日本人の感情智識の表現は漢語交りで書かれてこそ始めて急所に觸れ肺腑を突くの名文となる事が事實多い。理論上色々の反對は出てても現實の問題としては誰れが何と云つても漢字の範圍から脱せられなくなつてゐる。

漢字の問題は、今から三四十年前朝野に囂々の議論が起り、一時は心の迷つた人氣の違つた人も随分出たやうであつた。がしかし漢字の源流に培はれてゐる日本の精神文化は續々社會の奥底から生み出さるゝ緊縮、軍縮、聯盟、赤字公債、匡救など云ふ漢字活字の滔々たる進出振りに大勢上黙認を與へない譯に行かなくなつた。否漢字の活字なくしては、日本の一新聞も議會の速記録も出されないと云ふ實情になつた。日滿議定書の如き重大な劃期的の文書も亦この漢字がなかつたとしたら困つ

たであらう。かう云つた風で一時漢字に對して迷うてゐた不安の念は取り去られ今や全く一掃せられたと云つてよい。否それどころでなく一步進んで之が存在の意氣を深め、利用厚生之道をも攷究し、從來の國語擁護の精神と同じ主義態度で以つて一段擁護して行かなくてはならぬ位になつた。と云ふのは、その因襲の久しいと云ふか、詔勅がどうと云ふか、又議定書がそれで書かれてゐる云々とかいふ事實ばかりから云ふのではない。これが東洋幾千年の民族文化に牢乎として抜くべからざる根柢を有してゐる事實のあるからである。こゝに至つて漢字の愛護尊重の念は一段の鞏固を加ふるに至つたのである。

日本の精神文化は云ふまでもなく、東洋のより大なる民族文化によつて育まれ、今や地球全人口の三分一の人々が使ふ漢字を我が國字として使つてゐる。ランカシアに於ける綿絲綿布

問題と同様に東洋から漢字文化の利用厚生を白人に普からしむることも一案であるかも知れぬ。現にスカンヂネビアのベルナード・カルグレン教授 (Prof. Bernard Karlgren) の如きは毎々漢字交りの便りを寄越したり、研究論文を寄せて來たりしてゐる。歐米東洋學者の漢字交り文の書翰など別に珍らしくもないが、今や日本人として殊に學徒の文化方面に従事する者は、漢字の徳を頌する計りでなく、之に對する再検討を試むるの必要が生じて來た。漢字が日滿支三國を打つて一丸とした同文同種の立前上、國交に資する所大なるべきは云ふを待たず、漢字文化の研究こそその宣揚によつて如何に東亞文化史上に貢獻する所大なるべきかを思ふものである。最近日本の精神思想界は、書道の流行と佛典宣傳のインフレーションに會つてゐる觀があるが、之によつて精神的に一般が何物かを掴まんここにあ

せつてゐる心持のある處は推測せられる。

文字の研究が、民族文化研究の根幹に寄與する使命を有してゐることは云ふまでもないが、之によつて唯單なる古代文化が闡明せられたとか、今日見る地方字音の分布が掴めたとか云ふ物識りになる事を以つて満足するものでない。その研究の目標は勿論微に入り、細を穿ち、究理の方に進むことを怠つてはならぬが、その研究の窮極が、たゞ物識りと云ふことのみに墮してはならぬ。むしろその幾千幾萬の文字を萌芽せしめ、之を發達せしめた過去の社會心理をしかと掴む處まで行かなくてはならぬのである。支那文字の源泉地である隣邦大陸にありては、太古には太古ながらの天地があり、中古には又中古ながらの天地がある。而かもそのそれ〴〵社會生命の延びて行く爲めに

はその文字を如何やうにこも自由に整理し、又之をいかやうにこも分岐せしめ、常にこなして取扱へる跡が讀めてゐる。單なる刀筆の吏、單なる學者の規矩準繩で縛らせることはなかつた。今日の日本にも是非一つ千古を貫くだけの識見と經綸のある者が立つて欲しい。徒らに字句の校勘研究のみに執し、遠く眼を大局に注ぐことを忘れ、文字發達途上の生きた天地に悠悠自適することなく、況んや又何等の信念理解を抱くこともなくして眼前の蝸牛角上の工匠裡に了る如きは光輝ある文字將來のために採らざる處である。朝夕一點一畫の議論にばかり囚はれ更に重大な社會心理の大局面に心を游ばしむるの風懷だになきは、折角の文字を見殺にしたやり方と云はなくてはならぬ。

されば文字研究は工匠の仕事に任せおくべきでなく、士君子

の風懷を以つて成さるべきものである。元來云ふと、文字は大陸の産物であり、大陸の社會風物萬般のものを遺憾なく反映し、又各時代相をも自由に表現してゐるものである。一方字源の點畫に苟しくもしない處のあると同時に、又他方には常用文字の社會標準を示すべきなど類推の原則が許容されてゐる。今日我が國では史的研究の方面の結果から明、有、朝、朋、朕、藤、胃、青などの有する月の字の部分がいくら研究上から識別せられたからとて教育上にまでもその書き分けが強ひられてゐるのは如何なものであらう。書道や佛典のインフレーションと共にこれは結構な現象のやうにも見えるが却つて大勢の心理から離反せしむるの結果を誘致することになりはしないであらうか。

文字の研究はその形音義の部分的方面に深入りして古賢の

苦心した跡を辿り、群書拓本の異同を比べ漁るごすれば際限なくなすべき事もある。象形の起源沿革、音韻の變遷分布、意義の分派系統などその針で突いた程の事項でも所謂科學的に取扱つて來るならきりのない話である。それがごかく古書の尊重ご尙古思想の一方にのみ執し、典籍涉獵のための涉獵に傾いてしまつた。然らばご、に今その具體的な象形の元始状態はごうであるかごか、古音の綴音ごしての價值はごうか。シラブルで之を發音して見ろなごご開き直つて突込むご云ふご判然ごした明答が出來ぬ。現場へ手で摺んで來て明確にこの通りだごご表現し切れないやうな曖昧な研究になる弊がある。その癖楊枝で啄くやうな細かい議論ばかりはするが結局線の太い力強い具體案をねらひつかむご云ふ心掛が乏しい。折角、古聖賢の遺された典籍から金石龜甲の貴重品は今日山ご積まれ、時

代の要求する研究の目標、研究の分野も自然明にされて來、又支那に滿洲國に日本にごその道の眞面目な研究もそろそろ出て來た。殊に又昭代の有りがた味は遠く埃及やアツシリア、パピロンの文字研究で發表せらるゝものが色々あり、又西人學者のごごつた研究法や研究報告で日本に來てゐるものも少なくな

いのである。

かやうな機運に際會してゐる東亞文字の研究は我れ等學徒の面子からしても之を忽諸に附してはならぬ。支那では金石小學ごしてこの方面はおのづから別の部門ごして立てられてゐる。日本には帝大に支那哲史文の區分は立てられてゐるが未だ文字學の設けは全然ない。その哲史文ご唇齒輔車の間柄にあるこの文字がその科の中に入れられてゐないのはをかし

本書の内容は曩に自分が帝大言語學(文科)を出た(明治四十年)關係上舊來とられてゐた研究振りから違つた見方で文字の分野を辿つた處を本にしてまごめたもの。當時はまだ二十五六の青年で生ま若い鎌を始めてその畑に打込んだ形であつた。端なくもそれが本書の前身「文字の研究」にまごめられたものである。獨書、英書など、在學中はさかく蕃書を多く涉獵してゐた處から自然バタ臭い見方も交じつたのであつた。爾來三十年近く老いの將に至るも知らず霜鬢摧く身を以つて南北支那に遊ぶこと前後三十六回。大陸文化より生え出た文字の研究なるものは今になつて熟々考へて見るこゝろ、そこに人間學の織込まれたものでなくては本格的でないこゝろが悟られて來た。従つてその後逐年獲た幽玄な見解文字感、は本書の卷頭卷尾に多少加へておいた。燕山楚水、跋涉中に得た草ぐさの文字資料や

それから釋くこゝろの出來た文字の謎は多岐多様に互つてゐる。しかし、こゝろは本書と切り離し別の機會に之を公刊することにした。本書は上にも云ふ通り自分の若い時の論文を骨子に取り纏めたものだけに今の時勢に棹し該研究のバイオニアたらんごする學徒には聊か津筏になるこゝろもあらうかと思ふのである。

今や書道の奨励、文字の運用、文字の教授問題など八釜しくなり、漢字廢止論まで擡頭して來た。關書院主は慨然こゝろに時勢の動きを看破し、世に文字研究書の寥々たるを見てこゝろ頃者院主自身より熱意溢るゝばかりの刊行慾憑のこゝろあり、遂にその熱意に動かされ自分は欣然起つて原刊本の増補刪訂に取りかゝつた。枯木も山の賑ひさかや。之によつて震災前久しい間絶版となり大方の要求に對し心ならず應じかねてゐた本書再

刊の念願がやつと達せられた譯である。もし此度の刊行により時勢の生む研究者が一人でも現はれ來ることならば、それは全く助産役たる院主の君の賜物である。同時に自分としては出來ればその學徒の研究助成の意味にて尙悠悠文字行脚に精進し案内役をも勤めて見たいと云ふ氣もちがしてゐる。日滿支三國の讀者に呼びかけこゝに有りのまゝの風懷を述べ、特にこの序文によつて學徒の印象を深めておきたいと考へる次第である。

昭和甲戌九年十一月十一日我が五十四歳の秋

日本東京小石川小日向臺

石 農 後 藤 朝 太 郎

しるす

文字の研究凡例八則

一、文字の研究範圍は字形、字音、字義の外、書道や、言語、詩文の關係もあり、頗る廣汎に亘つてゐる。本書の内容は限りある頁數の中に努めて言語、字音の方面に主力を注いだ。字音關係で出した拙著としては現代支那語學(明治四十一年二月博文館刊帝國百科全書中にあり)と本書があるのみである。これも言語學出身と云ふ自分の立脚地から生れた産物である。

二、字音研究の要は、雜然たる漢字の音變化の現象におのづから整然たる條理の伏在せるものあるを見出すにある。本書には之を一々言語の音韻變化の原則に照し、歴史的と地理的の兩方面から證明する研究法を採つた。字音の事と云へば從來は韻鏡(磨光韻鏡)の研究以上に餘り出でなかつた先人の取

扱ひ振りに慊らず自分は之を支那各地方言の現代音に照らし比較制定することに努めた。その點に特に苦心をしたところが多いがこの研究法については大學言語學出の先輩小川尙義氏編日臺大辭典の中に見えてゐる意見と同じうするところが少なくない。後の研究者の參照を望むこと切なるものがある。

三、字音の方言中に散在する訛音の聞きこり方並にその記述方法と云ふは難事中の難事に屬するが三十有餘回にわたり各地の水村山郭を普く行脚中之に留意し又努めて採集することにした。例へば山にセの音があり船にゼの音、飯にフエの音が見えてゐて少しもンの語尾をこらぬ江蘇浙江方言音の存する如きは著しい例である。又善にシヤイの音、浙江嘉善があり、又善にスイの音、江蘇靈巖山下善人橋の存する如きも

異例と見られる。

四、又日本の字音假名遣に見る長音に一定の法則のあり、又ワ行音のキこかエごか云ふものにも一定の法則のあることは支那字音を明かにする者の了解せることである。ケイ(京)セイ(正)テイ(丁)がそれぞれキヤウ、シヤウ、チヤウのア列の假名遣をこる如く一貫した法則に支配せられてゐることは見易きの理である。又クワン(桓)完の音からキン(院)ごかエン(垣)ごかが生じたりしてゐることや又ワン(腕)からエン(怨)の聯想せらるゝことなどもたやすく推論せらるゝ所である。

五、字形の研究については近來發見された河南彰徳の龜甲文があり之が學界に提供せられたるは空前の快事と云へる。既にこれは歐米諸大學にもかなり流布してゐる。今日文字を云々する學者で之に言及しないものは時代おくれの觀さへあ

る。本書の字形研究にも徹底して之を使はんことを考へてゐたが、かくしては頁數に限りある處から僅かにその片鱗を示す程度に止むるに至つたのは不本意の限りであつた。讀者幸に諒せられよ。

六、字形方面の根本研究は何と云つても、三代の鐘鼎彝器を始め殷代出土の龜甲獸骨など實物についてなるべく多く手づから検討すべきことである。日本では兵庫縣住吉、住友吉左衛門男寶藏の古銅器中に世界的のもの多く、その印影は既に三回到り巨り泉屋清賞の書名で國際的の豪華版が公になつてゐる。又帝室博物館にも相當なのが陳列されてゐる。龜甲獸骨は古銅器以上に近來偽物が多く傳はり、かなり眉唾ではあるが東西兩大學考古學教室に多少あり、自分も數百點珍藏してゐる。その小片のもの程刻字は鮮明に現はれてゐる。

七、文字研究が趣味と實際の方面へ應用せらるゝ場合を見ることは、それは篆刻、扁額、對聯、並に書幅に見る篆隸以下楷行草の筆畫なごであらうが、時として名流高貴の筆蹟にして存外誤字、噓字の行列を見せつけらるゝことさへ少なくない。又廣く普及力ある新聞雜誌乃至は學校用教科書の文字は特に細心の注意が要る。さもないと云ふと、ひごく害毒を流し恐ろしい結果を生ずる。本書は極力この方面にも觸れておいた。

八、文字の研究に従事してゐて、讀者や一般世人から誤解せられ易い點は著者は文字に就いて、頑固なあたまの持主であり、全く化石してゐる人であらうと見らるゝことこれである。それは三千年五千年の昔の文字の結構を金科玉條と守り頑強に後世生れた俗字慣用形は認めてくれないであらうと見られてゐるからである。自分は文字の發達を認め、又その力を信

じ俗字の延び行く生命については特に力説してゐる。研究と教育との咬み分けはいつの時代にも必要なものであることは隨處に觸れ論及しておいたのである。

文字の研究目次

第一編 文字の部

第一章	文字研究の態度	一
第二章	支那文字研究の二方面	八
第三章	辰巳寅の字源考	一五
一	辰	一五
二	巳	二二
三	寅	二六
第四章	戎狄蠻夷	二八
一	夷—東方	三〇
二	戎—西方	三四
三	蠻—南方	三七
四	狄—北方	四一
五	結論	四四
目次		一

X 第五章 支那文字に現れた類推作用

- 一 形の上の類推作用……………五〇
- 二 意義の上の類推作用……………五七
- 三 音の上の類推作用……………六二
- 四 結 論……………六四

第六章 漢字新研究の一端

- 一 漢字は如何にして觀察すべきか……………六七
- 二 支那文字の構成要素……………七〇
- 三 字音の變化……………七五
- 四 漢字の音符……………八〇
- 五 漢字音の歴史的觀察……………八四
- 六 漢字の形態……………八九
- 七 字體の變遷……………九五

X 第七章 文字上の傳説

- 一 緒 言……………一〇四
- 二 船の字……………一〇五
- 三 笑の字……………一〇七
- 四 佛の字……………一〇八

- 五 穴の字……………一〇九
- 六 鳴の字……………一一〇
- 七 吉の字……………一一一
- 八 蚊の字……………一二〇

第八章 支那文字の發達史上から觀たる漢字問題

- 一 過去に於ける支那文字の發達……………一一八
- 二 現在に於ける漢字の状態……………一二二
- 三 將來に於ける漢字の問題……………一二七

第九章 今日の漢字は如何に觀察す可きか

- 一 緒 言……………一三〇
- 二 應用の側より觀たる漢字……………一三四
- 三 教授法案……………一三九

第十章 漢字問題の前途

- 一 將來の漢字は如何にある可きか……………一六〇
- 二 實際と學理……………一六六
- 三 漢字に系統の存すること……………一六八
- イ 音の系統……………一六九

文字の研究

四

口 形の系統……………一七一
 ハ 意義の系統……………一七二
 四 俗字と略字との許容……………一七三
 五 新文字發生の氣運……………一七六
 六 結 論……………一七七

第十一章 文字のしるべ

一七九

一 婦人の婦の字……………一七九
 二 夫妻の妻の字……………一八〇
 三 稼娶の娶の字……………一八一
 四 婚禮の婚の字……………一八二
 五 子供の子の字……………一八二

第十二章 漢字談叢

一八五

一 協會の協の字に就いて……………一八五
 二 協會の會の字に就いて……………一九一
 三 會頭の頭の字……………一九五
 四 字源上より觀たる西太后……………一九八
 五 漢代に於ける簡略文字の一つ……………二〇〇
 六 黃河流域の地質一面觀……………二〇四

七 滿洲の洲の字及び其の他……………二〇七

八 文字と植物……………二一〇

一 華の字……………二一〇

二 栗の字……………二二二

三 果の字……………二二三

四 樹の字……………二二四

五 齊の字……………二二五

九 農の字の趣味……………二二六

十 米の字に就いて……………二二九

十一 稻の字の趣味……………二三三

十二 自然主義の文字觀……………二二七

十三 異字印刷の困難……………二三〇

第十三章 文字學の建設……………二三三

一 緒 言……………二三三

二 文字學建設の要件……………二三七

三 文字學建設の材料に就いて……………二四五

四 文字研究の方面……………二四六

第十四章 説文より入りて説文を超脱すべし……………二四八

目 次

二五

第十五章 古代の文字と人物畫……………二五三

第十六章 漢文教授の改良案……………二六〇

第十七章 ローマ字の研究すべき點……………二七〇

一 漢語を軟化しようとするの點……………二七一

二 莊嚴簡潔な語の發達を妨ぐる弊……………二七六

三 餘 論……………二八〇

附 ローマ字發展論……………二八二

第十八章 書の研究と談書……………二八四

第十九章 文部省と標準字典……………二九一

第二十章 新字制定に就いての注意……………二九六

第二十一章 義務教育上の文字選定……………三〇一

一 初等教育と文字……………三〇二

二 漢字一千六百五十字案……………三〇六

三 増補三百七十字案……………三一四

第二十二章 現行の俗字百二十箇……………三一六

第二十三章 看板文字に對する希望……………三二三

第一編 音韻の部

第一章 支那文字と音韻との關係……………三三一

一 序 論……………三三一

二 支那文字の構造……………三三三

三 諧聲文字……………三三九

四 音韻の變化……………三四二

五 結 論……………三四八

第二章 音韻研究の參考資料に就いて……………三五一

第三章 漢字音の研究法……………三六二

一 緒 論……………三六二

二 北平官話に於ける現代の字音の研究……………三六六

三 各時代の記録に現れた字音の研究……………三六七

四 支那各方言に於ける字音の比較研究……………三七〇

五 隣國に於ける字音の研究……………三七二

イ 安南音……………三七三

文字の研究

朝鮮音……………三七四
 ハ 日本音……………三七五
 六 支那文字に現れた音韻現象の比較研究……………三七六
 七 結 論……………三八一

第四章 支那文字に現れた音韻の現象

一 支那文字の音韻一般……………三八七
 イ 表音的文字……………三九〇
 ロ 字音の轉換……………三九九
 ハ K音とL音との關係……………四一九
 ニ 文字相互間に現れた言語上の關係……………四三一
 一 酷烈の義と kok, kak 等の音……………四三五
 二 切斷の義と kat, ket の音……………四三六
 三 集合の義と lui, lei の音……………四三七
 四 兼併の義と tsang の音……………四三八
 五 蟲類と man, mong の音……………四三九
 六 高大の義と tai の音……………四四二
 七 不又は没の義と put, nut の音……………四四九
 八 君王の意義と kun, kung, kuang の音……………四五六
 二 字音の歴史的沿革……………四六五

第五章 支那古韻ハ, T, P の沿革と由來(文科大學卒業論文)

一 研究法及參考書……………五一八
 二 沿革の部……………五二八
 第一 K音攷……………五二八
 G音攷……………五八六
 第二 T音攷……………六〇一
 D音攷……………六四八
 第三 P音攷……………六六〇
 目 次……………九

B 音攷……………六八七

第四 入聲音攷……………七〇五

附 分布地圖……………七二一

三 由來の部……………七六一

第五 有史時代以前 (Archaic Period) に於ける K, T, P に就ての攷……………七六一

四 結論の部……………七七六

一 印歐語の音韻の研究と支那語の音韻……………七七七

二 北平官話……………七九〇

三 古音の地理學的分布……………七九三

四 支那文獻上に現れた古韻の沿革……………七九九

五 音聲學上より觀た漢字……………八〇九

六 支那語の根本起源と發達に就いての考……………八二三

第六 字音轉換の法則十一則……………八三一

一 結 言……………八三一

二 語頭音轉換の法則……………八三二

第一 K S Y の法則……………八三二

第二 T S Y の法則……………八三四

第三 R S の法則……………八三六

第四 M S の法則……………八三七

第五 清濁の法則……………八三八

第六 R 對 K T H M の法則……………八四一

第七 K M の法則……………八四五

第八 K T の法則……………八四五

三 語尾音轉換の法則……………八四六

第九 入聲音消滅の法則……………八四七

第十 語尾音消滅の法則……………八五一

第十一 母音轉換の法則……………八五三

第七 音の側より觀たる漢字誤謬の發見……………八五九

第八章 坪井文學博士よりの音韻に關する文書六通……………八七一

第九章 坪井博士の「忽」音攷に就いて……………八八六

一 『忽』の語頭音 (Anlaut) の場合……………八八八

二 『忽』の語尾音 (Auslaut) の場合……………八九二

第十章 説文に現れた音韻の現象……………八九三

一 『ㄨ』の字の古音 Tak 又は Tok……………八九四

二 『害』の字の古音 Kat……………九一〇

餘論 北方民族の影響……………九二四

目 次……………一一

附 山路愛山氏評……………九二六

三 筆の字の古音假定説—Plat, Klat. ……九二六

イ 本論 其の一……………九二七

ロ 本論 其の二……………九五〇

ハ 結論……………九五八

附 記……………九六一

四 『佳』の字の古音……………九六五

五 『塔』の字の古音—Top, Tup, (Thūpo) ……九七六

一 印度に於ける塔の一般的名稱……………九九五

二 印度に於ける Stūpa の形……………九九九

六 『易』の字の古音—Tak, Tek……………一〇〇六

一 同類文字の音韻比較研究……………一〇〇八

二 言語學上より觀たる『易』なる語の意義の變遷……………一〇一四

三 『易』の字の元始的狀態……………一〇二〇

四 結論……………一〇二七

七 結論之部……………一〇三三

一 支那古音の研究上より觀たる説文の價值……………一〇四一

二 字形に變化はなくとも字音には歴史的變遷の存せること……………一〇四六

三 支那の説文音韻學者の研究概略……………一〇五〇

四 説文に關する音韻新研究の規範……………一〇五〇

第十一章 帝の字の古音 Tak

一 語源上の研究……………一〇六一

二 歴史的の研究……………一〇七一

三 文字上の比較研究……………一〇七五

四 支那外部種族の言語との比較……………一〇八二

五 結論……………一〇八五

第十二章 支那の地名に現れた音韻に就いて……………一〇九〇

第十三章 入聲音フの同化及規則……………一〇九五

第十四章 漢字教授上の參考……………一一〇二

一 緒 言……………一一〇二

二 カ行音の系統に屬する漢字……………一一〇六

三 タ行音の系統に屬する漢字……………一一一一

第十五章 字音の長短……………一一一五

第十六章 字音假名遣の類推法……………一一一九

第十七章 『漢字音の系統』に就いて……………一一三〇

第三編 言語の部

第一章 支那古代の根本的研究に就いて……………一三九

第二章 人種と言語……………一四四

第三章 亞細亞に於ける言語の分布……………一四七

一 ウラル、アルタイ語系統……………一四八

二 印度支那語系統……………一五一

三 インド、ゲルマン語系統……………一五二

四 セミティック語系統……………一五三

第四章 亞細亞遊牧民族の言語に就いて……………一五八

第五章 支那主權者の蒙むる言語上の運命……………一六三

第六章 支那語に對する僻見……………一六七

第七章 支那語の學術的研究に就いて……………一七〇

第八章 支那語研究の方法に就いて……………一七〇

第九章 言語上より觀たる支那本部……………一七五

第十章 現代支那語の趨勢……………一七九

- 一 支那國內に行はる、言語の種類……………一八〇
- 二 古代支那語と現代支那語……………一八四
- 三 西人の支那語觀……………一八七
- 四 支那語の言語發達上に於ける位置……………一九二

第十一章 支那年號に現れた思想……………一九四

第十二章 支那語族に於ける狗……………二〇〇

第十三章 支那音譯外國地名考……………二〇五

第十四章 『府』の語源に就いて……………二一〇

第十五章 豆トウ云ふ言葉……………二一五

第十六章 文字上の植物名……………二二〇

- 一 苗木又は小苗をタケ(Take)と云ふこと……………二二三
- 二 朮(ジュツ)の原義が五穀のみのるの義なること……………二二七
- 三 菊をキクと呼ぶ所以……………二二八

第十七章 支那上代の熱帯動物に就いて……………一三三

第十八章 暹羅、支那兩國語の單語の比較……………一三三

一 比較の表……………一三四

二 單語の組み立て……………一三五

三 單語表……………一六一

四 音韻の表……………一八一

第十九章 田舎にちなめる言葉と文字……………一八五

一 土の字と生の字……………一八五

二 田の字に縁故ある文字……………一八九

其の一 藪の字……………一九二

其の二 疆の字……………一九四

其の三 男の字……………一九八

三 禾の字より出でたる文字……………一九八

其の一 種 of 字……………二〇〇

其の二 年の字……………二〇一

其の三 乘の字……………二〇一

其の四 兼の字……………二〇三

文字の研究の結論……………一〇七

一 研究上の指針……………一〇七

二 文字研究の幽玄味……………一〇〇

三 文字教育の指針……………一〇三

四 教育上の漢字問題……………一〇六

附 録

支那の文字音韻言語に関する参考資料……………一三七

一 資料の蒐集……………一三七

二 参考文字資料の書目……………一三六

三 文字の参考書目……………一三七

四 音韻の参考書目……………一三五〇

五 言語の参考書目……………一三六四

六 文字音韻言語に関する西人の著述……………一三八三

發音假名索引 一四〇九

ローマ字索引 一四三五

暹羅單語索引 一四三七

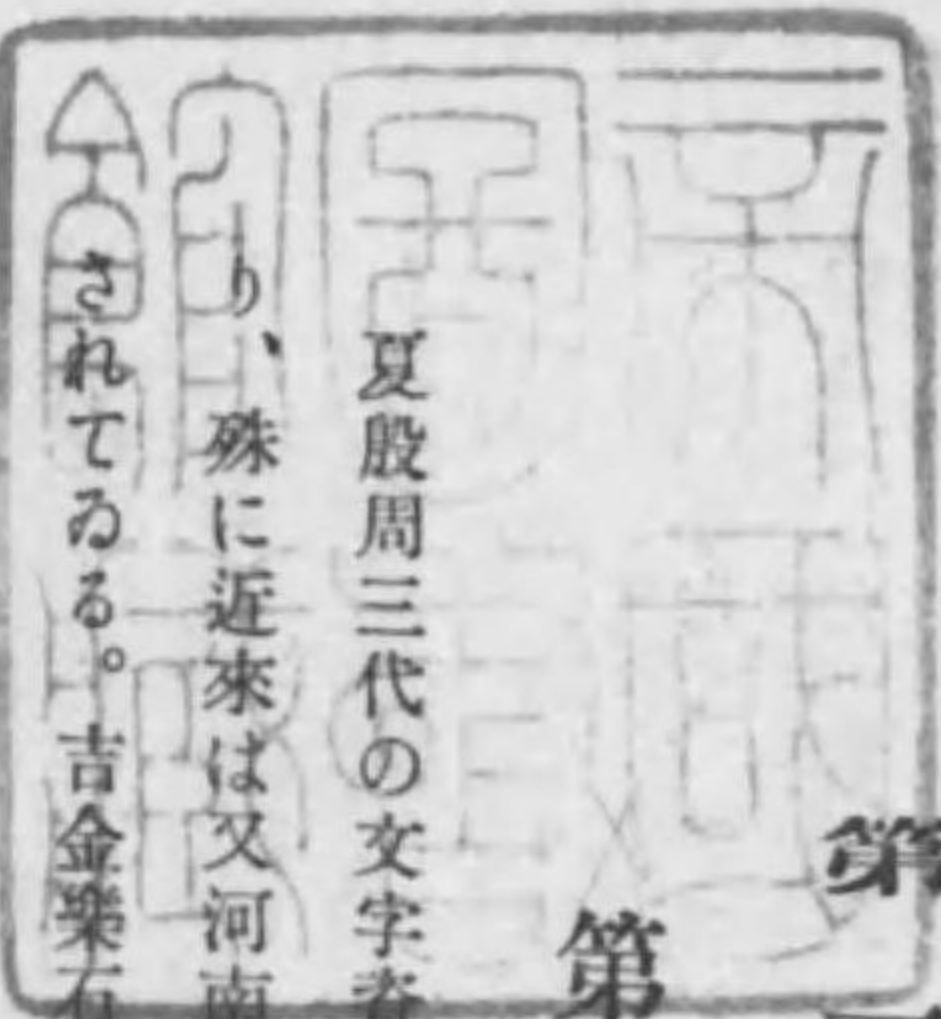
文字の研究目次終

文字の研究

後藤朝太郎著

第一編 文字の部

第一章 文字研究の態度



夏殷周三代の文字資料は龜甲獸骨、鐘鼎彝器から先秦の石刻（石鼓）と汗牛充棟も管ならぬ者があり、殊に近來は又河南洛陽ものと稱して從來見られなかつた様式裝飾のある古銅器が續々出土し公にされてゐる。吉金樂石の限りなき材料は愈出で、愈妙と云ふところに來てゐる。

清朝光緒の末葉劉鐵雲が河南彰德小屯出土の殷代文字藏龜藏陶を公にして以來龜卜文字の資料は、羅振玉王國維諸翁の大車輪的努力によつて陸續學界に提供せられ、その間には又龜甲獸骨の偽刻、怪しげなる出土品なども交つてゐることも防げないやうであるが、兎も角、流石は世界文字國の本場だけにその實物と、それに關する文獻、拓本、コロタイプ版などの出ることとは盛なこととなつたと云へ

る。かつて清朝の學風は文字の考證學が擡頭したのを一つの特徴となしてゐたのであつたが、それと同様、今日の中華民國はその文字の根本資料たる龜甲、鐘鼎石刻の提供、公刊の全盛時代であるとも云へるであらう。

想ふに經學古文獻を表現してゐる支那文字は、これら上代の原始的形態に還元し再検討を試みて見るの必要が生じてゐる。論語にしても、之を單なる楷書の木版本で足れりとせず、それに據る以上に更に古き篆書論語にまで遡つて考覈するの妥當なるを覺ゆる次第である。易、詩、書を誦するにしても又然りと云ひたい。これはさながら、希臘の原文を味ひかみしめようとするには、英、佛の翻譯ものでは靴を隔て、痒を搔くの類になるからである。埃及の刻文は矢張り埃及の原石に、又その拓本によるの外なく、アッシリア文はアッシリアの原物につきて検討するの外ないのと同じ譯である。之を周の贗寫にしたり書き取つたり、又翻譯したりしたものは本當の味の出ないのは當然である。之を周の盤銘について見ると、例へば虢季子伯の四文字で云つて見ると、之が如何に原物としての篆書の眞面目を躍動せしめてゐるかよくわかる。少なくとも今、孔夫子の言行を研究検討せんとするには孔夫子時代の思想、政治状態の理解を先づ以つて必要とすると同じ位に、その當時埃及の古代文字資料(口輪)の文字くらゐは判つてゐなくてはいかぬ。その頃字體がどんな風に書かれてゐたかを確認してゐなくては始まらぬ。虢の字にせよ、孔の字にせよ、その後世の形と著しく隔つてゐる書體であること位は目のあたり判つきりとわからなくてはならないのである。

支那古代文化に屬する方面の研究は、出来るだけその上古なら上古の文獻に據り、又その當時の文字の原形を本としてそれを基礎になされるのが原則となるべきではあるまいかと思ふ。さもなくしては次に示すやうに、

- 一、夏殷周の先秦文化の雰圍氣が出て來ないこととなる。
- 二、篆書に含まれた特殊の持ち味と史實とが無視せられてしまふこととなる。
- 三、先秦文化の風味に伴ふ各種の聯想が切捨てられてしまふこととなる。
- 四、篆書、象形文字を中心とした上代文化が、經史文の諸研究から切り離され、埒外に置かれる結果を生ずることとなる。

云ふまでもなく東亞文運の進歩と、日支交通の利便に浴せらるゝに至つたことから、その文字資料の供給が豊かになつた今日、依然としてこれらの支那古代文化經史文の研究が、楷書の文獻以上に尙進み得ないでゐると云ふは甚だ情けない話である。双方、文字の方と經史文の方とが歩み寄り持ち寄り、検討しあふと云ふ處まで來なくては嘘だと思ふ。

固より研究は研究であるから、それぞれその定められた分野に於いて専門の歩を進むるはよい事に違ひない。けれども又時に之を應用して、出来るだけ多く双方接觸せしめ、亂の字と嗣の字の別くら

るは之を明かにし、亂臣の亂の字の再検討を必要とする如きその一例である。いつも研究と云へば六朝以後の楷書の木版本を本にし、而かも誤寫、魯魚の謬の多く、たとひその誤りなきにせよ、その古い大篆から來る持ち味のゆたかにあるものを全然考慮に入れず、唯楷書の文獻、後世の原刊物だけに據ることとなし、之を以つて金科玉條視してゐるやうな態度は如何なものか。こゝに一本まゐられても致し方があるまいと思ふ。日進月歩の東洋文化の研究に、この事のみが尙舊態の殻を脱しないのであるのはあまりにも時代おくれであり、頗る遺憾に堪へない所が多いのである。

由來支那では、自國が文字の本場たることを強く自覺してゐる學者もあり、又ゐないらしい學者も相當にある。そこはそれぞれその向ふ處の専門の異なる處によるのであるから仕方がない。餘りとやかくは云へぬ。しかし中には頭腦明哲にして眼光の紙背どころではなく、石刻古銅器の背面にまでも及んで徹する者がある。日本人以上に涉獵蒐集に苦心し、考覈闡明に努力してゐるものもあるのである。けれどもまた中には吉金樂石を前に、存外無頓着振りを發揮し、相當な立派な漢代の銅器あたりを書齋の一隅におき、屑籠代用に使つてゐるやうな文人も見受ける。その邊は洒脫、恬淡、風懷味ゆたかな趣を見せてゐる人だと云へる。

元來云ふと支那は大陸であり、文物風土のすべてが優暢に出來てゐて、日本人の見てゐるやうに神經質的でない。その龜甲金石の事にひどく八釜しく云つてゐるかと思ふと反面に、光風霽月の幽趣を見せ自ら禪僧の如く物にこだはらず、シャーシャーした先生もゐたりする。その人間ばなれにしてゐる巨木であるのか、巨巖であるのか、それとも哲人でもあるかわからない。つまり何の事もない老子が莊子の今日再來でもしたものであるかと思はせるやうなのがある。支那の山僧には特にかう云つた風の風格の持主が多い。

一方に繊細緻密な文字を有史以前から發達せしめ、幾千年の間漢族文化の核心として今日まで之が生命を持續させて來てゐるに、他方には全く之を超越してゐてあたまになく、殆んど無關心なやうな態度に出てるものもある。さすが支那は大國で、この矛盾を平氣で同時に包有してゐられる。いくらでも無頓着のやうにきめ込んでゐる。しかし又、王朝が幾十回變らうと政治的變動、革命が幾回起らうと、それはたゞ水の上の波動くらゐにしか見てゐない。文字ばかりはその書體こそちがへ、終始一貫、聯綿として續いて來てゐる。

こはひとり文字形體の方面ばかりでなく、音韻の方にしても聯綿として續いてゐるものがあり、その比較的古い音の姿を留めてゐるものは安南に、廣東に、福建にと南方僻陬の地に現存してゐるのを見る。字義の方面にしたつてこれ亦同じわけで、古今を通じて一貫したものが存在してゐる。こゝに支那文化の偉大な處があると云へる。又支那文字の偉大性が實にこゝに潜在してゐる。史を案ずるに支那民族としては、一時唐の則天武后が新字を制定したりしたことがあり、道經の道藏には一と風變つ

た勿體なさを加へた文字の用ひられたことがあつたり、又契丹女眞のときは漢字系統の別の新字が出來て見たり、又元や清のときには蒙古文字、又滿洲文字の這入つたこともあつたりした。けれども漢族自體の文字の本流は一丝も亂れてゐない。搖いでゐない。のみならず、朝鮮半島へも日本の大八洲へも入れてゐる。今では地球の上に五億五千萬からの住民の用を足してゐるわけである。だから之に對する研究の態度など云ふものも單なる一刀兩斷式の直截主義で行けるものでない。支那の住民の之に對するそれは色々になり、矛盾のやうな處のあるのも故ありと云ふべきである。

日本人の研究心とその態度は、すべてあらゆる點にカツチリ行くことを好む。又猪突的に前進することを好む。味をかみしめたり風韻を楽しんだり、悠々自適、晴耕雨讀の雅遊に生きんとするものは少ない。その一旦研究法を研究し之が樹立を見た以上は、その規則の教ふる處によつて一目散に前進し、裁決し、論述し、そしてともかくも結論に到達すべきことを豫定する。又それが學徒の當然踏むべきレールであるべきものだと考へてゐる。ところが支那の方はわりに大陸的である。材料の蒐集と云へば大袈裟に集められもするし、研究の方法、歩武亦大陸的と云はんか、支那式である。そこに翰墨氣分を背景としたところの蘭香馥郁たる風韻を常に漾はせてゐる。こゝを又その見どころとなしてゐる。

支那文字はあの通り大陸風土を背景に、古來幾千年と培はれて來たものであるだけに、文字そのもの

のにいつも形、音、義共に大陸情趣の幽玄なものが伴ひ、いつもその香が發散してゐる。之をスピード的に忙はしく又規則づくめに型の如く取扱つて行くと云ふ人々には、折角の風味も風韻も味はれるわけがない。支那の學者は自分の見るところでは、一面に文人であり墨客であり風人としての風格を多分に備へてゐる。従つて堂内に一匹の秋の蟲を飼ふにしても、野邊に一頭の馱馬を馴らせるにしても、大陸自然の背景とその幽趣は忘れないやうにしてゐる。その間人爲の規則に拘泥をするやうなことはしない。規則などむしろ超越することは平氣であり、時には矛盾も辭しない。承知の上で洞着した事を云つたりもする。つまりゆつくりと悠揚迫らず、文字の幽玄なところから自ら入り、その境界に身心を打ちこみ心物一體となりてその芬香までをも存分味つて行かうとする。

研究上の規則方法などは之を八釜しく立て、見たところで、どうせ人間の作つた工作物であると云ふ風に見てゐるらしくも考へられる。規則を立つるとその規則面だけの事は拾ひ得られる。又取扱ひ得らるゝであらう。けれども東洋幾千年の間につちかはれた貴い芬香と云ふものは、翰墨氣分の用意あるものにして初めて採入れられる。さう云ふ風格の人にして泰然自若たるものがあるやうである。その研究者にしてそれほどの風格もなく、又その風土風物の内容と、又その文字の風韻を理解せんとする情趣を有することなく、そして一に歐洲二にアメリカと泰西の研究法でなくては夜が明けぬやうに考へてゐる學徒では覺束ない。支那文字の研究はそれだけではむつかしい對象物となりはしないか

と考へる次第である。

第二章 支那文字研究の二方面

支那文字には象形としての特異性があり、その古代文化の描寫法を通じて上代文化の半面が窺はれ引いては又上代生活の種々相までもが明かにせらるゝ。これは文字の性質上から考へて當然得らるゝ副産物的な收穫物であると考へらるゝ。早い話がこは衣の字なり、向の字なり、又商の字なり、皿の字なりを見ると一見してすぐその間の消息が判るのである。

次には家の字、塞の字乃至は饗の字、俎の字あたりの複合せられた文字の會意せられたものから、その各要素の示す意味以外に第三の意味の新たに求めらるゝ方法がある。こは上に云つた文字の要素一個で出来てゐるものに比べると、二個又は二個以上の要素を合せ會意したもので出来てゐるのであるから、やゝ複雑である。その要素と要素の結合組織の上に、一種特別の新意義を生み出すことを眼目としてゐる。こゝに建物の描寫を示し、之に豚を配合したとすれば、そこに始めてイへ（家）と云ふ意味が表現せらるゝことになる。或は又料理を盛つた食器に持つて行つて、之にさし向ひに坐してゐる人の姿を配合したとすれば、そこに新しい文字の饗（古くは郷又は卿に該當する）の字を生み出すことになると云つたやうな事實を見る。この種の會意文字は支那古來の象形的組織に成るものゝうちでもかなり大分の數を占め、同時にこれが又かなり象形文字の特異性として重要な點と認められてゐる。

それから今一步進んで考へて見ると、その又必ずしも象形と象形の配合組織になつてゐるわけではないが、單なる別のしるしを利用し加へることによつて、從來既に出来てゐる象形文字の上に更に第三の新しい意義を生み出させると云ふ方法のとられることがあるのである。これは女の字があるのと之に對して例へばその乳房の黒くなれるところへ點點のしるしを加へる。それでその女がハハ（母）となるのである。又刀の字があるとその刀の字に對して、その切れる方の側にハ（刃）のついてゐることを示す爲めそこに一點を加へる。すると刃の字となるのである。又、皿の字に對してその中にチ（血）の盛られてゐることを示さうとするときは、その中へ一寸一點を打つ。これが後に血の字となつて認められて來たのである。かやうにして既成文字に、ホンの僅かのしるしを附けることによつてそれぞれ第三の意味を指示することが出来ると云ふ方法である。これは普通に一を本にし、之を點を加へ上の字とか下の字とか云ふものが出来ると云ふことを云ひ、上下の二字についてのみ云はれてゐた例であるが、古代文字の研究の上には、この式のものはかなりたくさん類例を見出し得るのである。之を文字學の方では指事と稱してゐる。

こゝに示した象形、會意、指事の三者は、文字の象形的性質を基礎に造字工作を進める上に最も巧みに、又大衆的に一般世相に合はせ萬民に理解の出来るやう苦心せられたものである。何も別に太古、倉頡とか何とか云ふ一人の傑物がゐて、神意を受けて造つたものと云ふわけではなく、又皇帝の命によつて一人の人が拵へたわけのものでもない。倉頡と云ふ傳説も古書には見えてゐるが、これは創契の時代、文字の搖籃期と云ふくらゐに見ておけばよろしからう。こはつまりさながら燧人氏は火食を覺えた初期であり、神農氏は耕農の事を覺えた時代であると云つた風に見ておいて丁度よろしからう。又有巢氏なども上古特別のものが鳥の形して實在し、巢くうてゐたものだと云ふ風にきめてかゝらなくともよろしからう。併し何れにしても文字の創造時代、既にこれらの象形系統の文字が澤山出來てゐるその上に、巧みに誰れ云ふともなく便利なものを作り上げてしまつたものであらう。つまり社會のすべての人々が誰れが作るともなく拵へてしまつたものである。この點は言語の生ひ立も、文字の生ひ立も似たやうなものである。

こゝには六義の説明を試むるのが目的ではないから、他の諧聲や轉注假借の事には及ばないでおくが、かうした象形文字の要素と、その又合體の複合文字は遂に支那文字なる偉大な存在を形成してしまつた。わけてもその象形、會意、指事あたりの資料によつて古代文化の状態を遡つて考へて見ると、普通の歴史や考古學の到達し得られぬ、更にもつと古い上代へまでも遡つてその頃の文化の一斑が推

定し得らるゝやうになつた。そこになると實にこは貴い手掛りとなつてゐる。衣の字一字、門の字一字とつて考へて見ると、始めそこに何も手掛りのなかつた處へ無より有を生じ、何ぼか膝げながらもそこにヒントを得させてくれたわけなのであるから有りがたいものである。而かもこの結果が或は歴史風俗に、又人生地理に考古資料にと役立つてゐることは云ふまでもない。こは文化史全體の上に貴重な材料を提供してくれてゐることになる。

しかし上に述べた事は、文字研究から來る大事な部門をなす分野であることはあるが、文字そのものの本質を穿鑿する上から云ふと、いくらかわきに應用せられた方面の問題となる。これはこれとして立派な値打はあるのであるが、その特異性を利用して文化研究上の大なる手掛りとなしたと云ふに過ぎぬ。次には文字自體の研究のことであるが、支那文字の研究に手を染めんとするものは、この方面が又別にあることを忘れてはならぬのである。

文字自體の研究は上に述べたものが横の關係のしらべであると言ひ得るならば、これは縦の關係のしらべとも云へる。こはその本質的のことのみをどこまでも穿鑿する。これには比較研究は無論博引傍證をも必要とするのであるが、原則としては文字そのものの自體の研究をするのである。

例へば家の字、室の字、富の字について云ふと、その建物と厠の字、庫の字、府の字などのおよむ建物が、もともとどう違つてゐたか。どうしてその形にそのやうな差があるのか。又古代の家の字の

中に入れられてゐるその動物は果して豚であるのか。何であるか。豚の描寫として古代にはどうしてかくの如き形が書かれてゐたか。又門はどうしてかやうに描くか。高の字は一體何を示したものであるか。どうしてかやうに描くのであるか。皿はどうしてかやうに書かれてゐるのか。これらにつき一々その文字の歴史に遡り、又その描寫法やら刀法にまでも遡り、その窮極の處をつきとめるのである。そして家は家として庫は庫としての本當の形に本づく起源を明かにし、系統を正してその分派なり分出字なりを整へるのである。

次に道の字などは初め行の字の示す四つ辻に、人間の首のしるしが描かれたものであつた。或はこは人の姿であつたかも知れぬ。ともかく行の字がそこにあつて、その字の中央に首が描かれてゐた。その首のあることは今も變らないのであるけれども、その行の字は今の道の字に見る如く變つてしまつた。こは行と走（イと止の合字）の絡脈相通するものがあるによるのであるが、さう云ふことも豫めその字源と字義とを明かにしてゐないことには呑み込めないのである。又皿の字などにしても今書く皿は少しもサテの形をしてゐない。ところが古い處に遡ると立派に高い高杯なりの姿をしてゐる。而かも之に血の入れられたものは、そのしるしがちやんとつけられてゐる。さうして出来たものは血の字であるから、之に明の字を加へて、明と血……盟（實は血を含む）となしてゐることがわかるのである。今更その楷書に見る盟の下半が血の形をしてゐないからと云つても、史的調査をして見れば

すぐその血なることは明白になる。活字に見えたまゝの字であるとか、一般大衆の書いてゐる字であるとかには随分よい加減のものがある。近頃よく見る例にも

養……………一
 泰……………二
 券……………三
 卷……………四

が、一様に券、卷の冠に類推せられて書かれてゐる。

養泰の冠の誤りは殊に多い。こはそれぞれその因縁來歴をしらべて見たら、さう無雜作に間違へらるべきものではないのである。

かう云つたことはその一字一字を系統的に、又その要素の根元について調べあぐべきである。この邊の研究にありては文字の文化關係の方面に眼を觸れず、唯その養なら養をとり、そして差、美、義、善などのあたみに検討を試み、嚴密にその元始形をつきとむるのである。迂かりしてゐると、その差の字の冠と美の字の冠とを混同し同一視して考へるやうなことになる。皿にしる、羊にしる、行にしる、家にしるその研究すべき字形、字體の分野は實にひろく無限である。

若しそれ之を更に字音に就いて歴史的に入り、又方言に渡り縦横に研究することせんか。これ又大變な廣汎な範圍になる。之には音韻學と云ふものが支那では小學の中に別に立てられ、おのづからその分野が出来てゐる。けれども文字の形は音を離れて存在の出来ぬものであるから、この點も含んで

ゐなくてはならぬ。そこへさして又意義の研究がある。その義には變化があり、分出があり、結合がある。その分出にも第二次的、第三次的と云ふ風に枝に枝がさいてゐる。これらを完全にとり入れ形、音、義の三者を兼ね合せてそれぞれの特異性を研究するのである。つまりかうして文字の形、音、義が総合的に調べられ、こゝに文字自體の完全な研究方面が完成せられる。又文字と言語とのつながりもこゝに生ずる。元來文字は言語の符牒であり、言語に着物を着せたものが文字である以上、言語にいつも結付けて文字の形、音、義を考へて見るやうにしないで嘘である。文字學研究の母體はこゝに在るとしてはならぬ。之を主にして文字そのものの本質を組織的にしらべ、その文字學の研究の結果が他に如何なる方面に應用せらるゝことあるやなどのことはしばらく問はないのである。

以上、大要ながら支那文字研究についての二大方面を叙べて來た。ところで本書に於いて主として述べてゐる文字の研究は、然らばどちらを採つてゐるのであるか。双方ともに採り入れてゐるのであるかと云ふと、本書は主として第二の文字そのものゝ研究の方に重きをおいてゐる。勿論その純理の分解解剖を行ふ一方のみに限つてしまふわけにはまゐらぬ。がなるべく文字そのものゝ本體を主眼とすることに努めたのである。若しそれ文化研究の應用の方に眼目をおくとすると、考古歴史その他地理風物とあらゆる古代文化に觸れる研究となるのである。

思ふに支那文字の特異性はどちらかと云ふと、その文化各般にふれてゐるものであつて、又さう云ふ場合の方に興味が多いのである。たゞ本書は打あけたところ明治四十二、三年の自分の研究を本とし、なるべく根本的には手を入れぬ程度で再版し公にすることにしたものである。自分の文字研究の興味はその後文化各般に亘り、支那各地で實地に見た風物を取扱つて見たいのであるが、こゝには本書元來の内容を動かすことなく、之を主眼として述べる程度に止めて置く。尙別の機會に於てその文字の文化方面のことは公にするつもりである。現に「文字行脚」なる別著は執筆中であるから、本書と前後して公にされる事と考へる次第である。

第三章 辰巳寅の字源考

一 辰

三千年・五千年と云ふ昔のことは、何だつてよくは判らぬ。埃及や、アッシリア・バビロン、乃至はスメルやアカツドの刻文からする當時の文化は、大分判つたと云はれてゐる。又その時代に相當する支那の文化も、四書五經を信する學者から見れば、これまた明になつてゐる如く考へられてゐる。けれどもドグマは暫く避けて、冷靜に考へて來るときは、その當時出來た鐘鼎彝器の古銅器ブロンズ類には、最近支那よりも日本で兵庫縣住吉の住友男爵家から立派な泉屋清賞の續篇の公にされてゐるも

のがあるが、かう云つた吉金文字によつて、當時の文化を楷書などに翻譯することをせず、もとのまゝで調べることが出来れば、それで何よりたしかな結果が得られるわけである。本當に三千年前のテキストを眼前におき、手で觸つてしらべられると云ふのであるから、これほど確かなことはない。但し偽物や眉唾ものは別として考へなくてはならぬことは云ふ迄もない。

それから尙一つは、龜甲文字と云つて河南省は彰徳方面から、あの通りたくさん出てゐた龜卜用の龜甲断片であるが、之には三千年、以上もつと古い時代の文字と思はるゝ繪文字そつくりのものが數多見出され、そしてそれが大半今日では金石文字と比較研究をやつたので、いくらでも讀めるやうになり、牽いては支那有史以前の古代文化の一斑を推することも出来るやうになつた。實に有りがたい材料が出たものである。殷の時代の都の墟と云ふから、それであるとしておいて差支ないが、ともかくもすべて元始形式の文字のみである。象にしても、虎にしても、家屋にしても、食器にしても、實際繪そのまゝのものである。かゝる材料を取扱つてゐると、浮世離れのした心持ちになる。のみならず、古代のことを研究するのに、千五百年も二千年も後の字形で推して行くやうなことをするがらゝる危ぶないことはないと云ふことも判つて来る。のみならず、第一後世の字形ではさつぱり物が判りもせず見當もつかぬのである。

速い話が十二支辰年の辰の字に就いて考へて見ても、どう云ふわけでも此の辰の字がかゝる構造組織を取らぬに至つたのであるか。もとは何の形に始まつて出来たものであるか。そこらは少しも楷書では判らぬ。篆隸楷行草何れにしてもよくは判らぬ。ところがそこになると例の龜甲文字である。龜甲文によるとそれが初め動物から出てゐたところがわかる。と云ふのは、その初めの形は次のやうに書かれてゐる。

辰

辰の字の最古の形

これがいかなる動物であるか判らぬが、他の多くの文字から推して考へると、動物たること丈は明である。けれども曉天に兩手で捕へるとの意味に出来てゐる文字を捜して見ると、それは即ち辰の字で、こは臼（兩手）と辰とから成立つてゐるのである。つまりその元始形式の本來のところは次の通りである。

辰

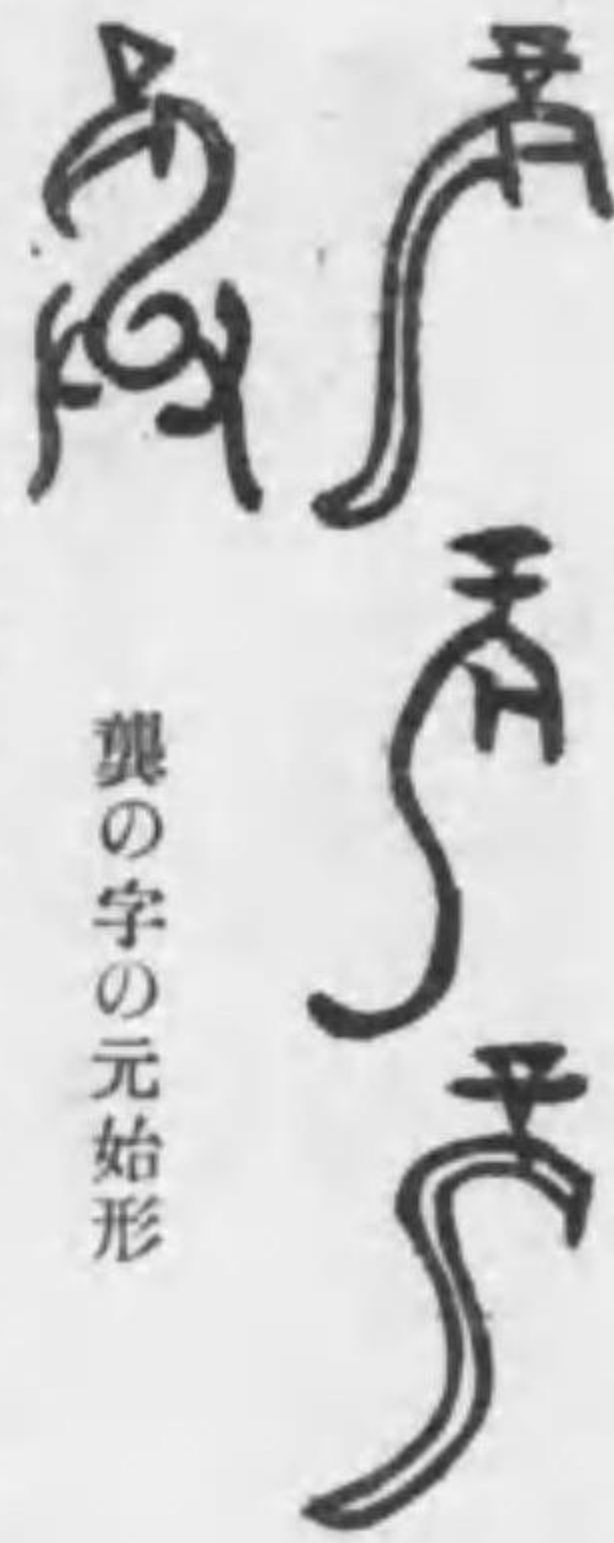
辰の字の古形

説文には辰は農の時なりとあるが、早朝この動物を捕へるとか、せわをするとか、兎も角之に關係のあることをすることから、辰と云ふ字が出来たものらしい。しかし之に田獵の田（畝）の字を加へて、田と兩手と辰とで以つて農の字の古形をなしてゐるに思ひ比べて見るときは、矢張りこは狩獵を

のものを此の農の字で表現してゐるやうにも考へられる。果して然りとせば、今日の農字の如きも、そのもとは矢張り動物を狩りするとの義から出来てゐたのが抑も本來の構造であつたのを、後に改めて耕農の方の意味に變へたものと見られる。元來ならば動物に因んで出来てゐる字であるから、これは狩の方に用ふべきものであるに、いつしか、アグリカルチャーの方の意義になつてしまつた。これは一般社會が變へて行くのだから訴へて行く處もない。丁度かねて税を納むる時代になつて來てゐる今日、矢張り昔、禾稻を納めてゐた時代の文字の如くに、租の字税の字などを用ひ、又貝そのものは之をみつぎとして納める場合に用ひられてゐなくつても、矢張り貢ぎには貢の字を用ひてゐる。この租だの税だの貢だのと云ふのは、文字上から理窟を云へば、随分變なものと云へる。もつと變なのを求め出して見るとすると、先づ第一に花嫁花婿の婚の字を擧げねばならぬ。

婚は女に非ず、男子である。男子であるに女扁を取ることになつてゐる。これと云ふのも元來は士(サムラヒ)と胥の二字の合體であつたのであるが、いつしか花嫁の嫁に引かされ、男の士が女性化してしまつたのである。實に女装した男みたやうなわけであるが、これも致方がない。社會の方にかやうに變化させる丈の力を有してゐたが爲め、個人としてよし頑張つて見ても仕方がないのである。さて辰に因みて今龍の方の字形に就いて見るに、これは元來辰に關係があるかと云ふと殆どない。龍は龍である。龍の本體がいかなるものであるか、本當のところは判らぬのである。けれど

ももとはこれ亦動物らしく考へられるのである。南方廣東方面にゐる蛇の一種の天龍と云ふものが即ちこの龍のもとをなしてゐるやうに思はれる。實物の生きたものを現場に行つて見ると、その胴體の形と云ひ、又その動く様子と云ひ、丸で蛇である。たゞ四肢を有してゐる昔の畫に見る龍と少しも變らぬ形をし、蛇にして足があるのである。蛇足と云ふと餘計なものと云ふの意味に考へられてゐるが、事實なくともよい足だと思はれる位、細いかよわい形をしてゐる。つまり蜥蜴と蛇との中間をなすものとしてのカタゴリを立てておけばよろしからう。それにしてもその龍と云へる文字そのものは、どうしてかゝるむつかしい形を取つてゐるのであるか。その龍の字の元始形式と廣東の天龍との間には判つきりした脈絡があるとは思はれない。しからば龍の字の古形はどうかと云ふと、太古の形は河南出土の龜甲文や古銅器の吉金文共に單簡なものである。龜甲文の上では特にこの龍の字は度々出て來るのである。即ち、



龔の字の元始形

龜甲文に見えた龍の字の元始形

多くはかうして口を開いてゐる形に見えるのであるが、時には口を開かないものもある。龍の字を

む隤の字なども、殷代の文字中にはよく見出すのであるが、その龍の字の形のところは同じことである。鐘鼎文の方で之を見ると、



古銅器に見る龍の字の元始形

頭上には或るしるしを有し、首と胴體は細長く出来てゐる。この點はいくつ集めて見ても、何れも同じことである。そして説文には之を蟲類なりとなし、説明して曰く、「こは鱗蟲之長なり、能く幽に、能く明に、能く細に、能く巨に、能く短に、能く長に、春分にして天に登り、秋分にして淵に潜む、云々」とあり、そして首上のしるしは童の字の省きであると云つてゐるからして、つまり龍の字の音符として、意味に關係なく唯符牒としてついたもの、その Jung と tung とは別音にちがひはないが、その古語の方から云つて Jung も隆る、tung も登る、と云ふ義になり、隆・登共によくその龍と云へる動物の特性を示したものと見られる。それ故同一語として之を見てよろしいわけである。現に龍の字に於ける龍は、最も有力にその tung の音たることを證明してゐるのである。

龍は支那古來の民俗の上に、又歴史・文學の上に最も重きをなせる靈的動物であるとせられてをる。こは靈鹿や神羊以上に考へられてゐるらしく、又周易の易（トカゲ、蜥蜴）以上にも見られてゐるやうである。之が圖案化せられては天子の十二章の一つに用ひられ、又歷朝常にその雲龍の出現を以つて

瑞祥の極致とされてゐるのを以て見ても、その氣分はよく判るのである。干支の辰年の辰は、之が動物であるにしても、そのえたいがよく知れぬ。がしかし龍の方は比較的よく判つて來たやうな氣持がするのである。尙これ以上少しく北支那に逗留してゐて、ならば北京あたりの龍燈、その他龍に因んだ催しものに就いても、出來るだけ注意を拂ひ、龍の文化と支那民族の趣味嗜好と云つた方面のことを面白くしらべて見たいと思つてゐる。

顧てみると民國五年（辰年）のことである。自分は拓川加藤恆忠翁と北平に暫く客となつてゐた。時宛も袁世凱が北平の空に龍の雲の現はれ、又湖北宜昌の峽中洞窟内に大きな龍骨の現はれたと云ふので大騒ぎとなつた。たしかに瑞祥と言へば即ち瑞祥を得たわけである。袁大人はそこで洪憲の年號に改めんとして之を假定したり、同時に自ら皇帝たらんとすつかりお目出度くなり、その準備にとて即位式を擧ぐる爲めの高御座だの、即位の衣冠東帶だのと云ふものを滞りなく萬端拵へたのであつたが、列國から承認を拒んで來たので、すつかり當てが外れ、おぢやんになつてしまつたのもその時分であつた。そしてその年の五月であつたか六月であつたか、孟夏の頃、光緒帝の大喪に西太后の喪と、それにつづいて袁大人も他界してしまつたと云ふ幕になつたのであつた。今春王正月を北平で迎へると云ふに當たり、こゝに古都に似合はしい龍のことを聊か述べ、併せて支那文化の研究に興味を持たらし、各方面の士君子にかくの如き超政治問題と云つた呑ん氣なところに、無限の分野の残さ

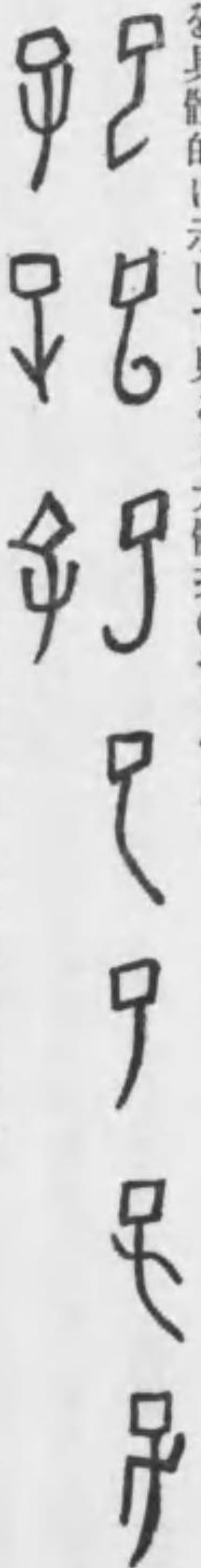
れてゐることを注意したのである。

二 巳

十二支に關係のある文字は何れもその字源が説きにくいのであるが、わけても巳歳の巳の字は勿論そのヘビ(蛇)の字にしてもかなり困難なところがある。と云ふのは單なる楷書の

巳の字と蛇の字

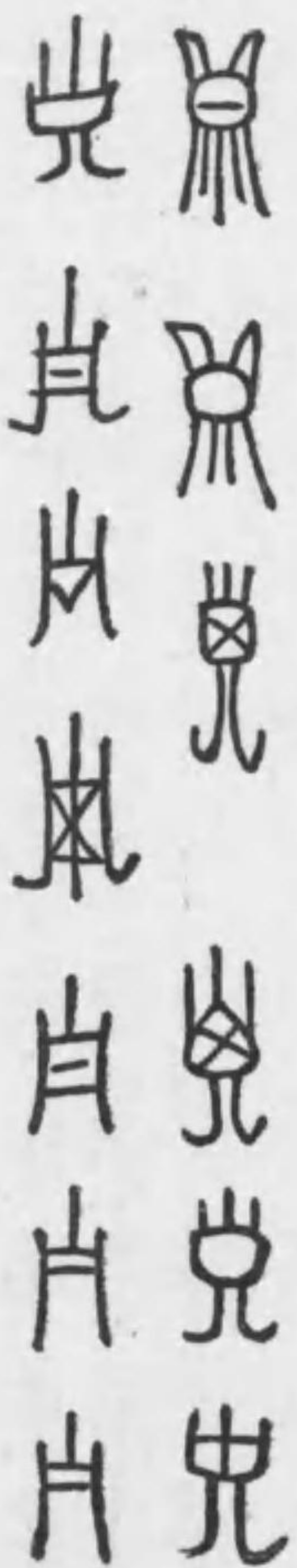
をにらんで見るときは、その字義は在來の云ひ習はせだけの處は判るが、更に根本に遡つてその起源を攻撃することになると容易のわざではないのである。先づその巳の字の由來に就いて古い材料から之を蒐集して見ると、こは本來巳の形の系統から出てゐる子の字となれるものが多いのである。河南省彰徳出土の龜甲獸骨に見る龜卜文字は即ちこれを證するものであつて、これは鐘鼎などの古銅器銘に見るべからざる新材料であるから、文字研究の上には最も留意すべきものであるやうに思はれる。今その形を具體的に示して見ると大體次のやうである。



龜板文實物並に殷虛書契、鐵雲藏龜などの資料による。

之を説文や鐘鼎古文に見る巳の字の古形とに比較して見ると明かにその系統を引いてゐることが察せらるるのである。そしてこは數多の材料からかうした字形の比較を試みて見ると、大抵かうした形は幼少なる人間の象形であると思はるのである。首と胴と手足を示してゐるつもりであるが、時に手を略せるものもある。そして主に首部を誇張して必ず表現してゐるものと見らるのである。

かやうに見ると最初の子丑寅卯と云ふときの子の字はどう現はされてゐるかと思ふのが誰れしも疑問になるであらう。ところが不思議に今の子丑寅の子の字は殷代の龜甲文には子の字では表現せられず、全然別字で以つて示されてゐる。而かも何等子の字の恰好と似ても似つかぬ形をなしてゐるのである。かなり複雑な構造をしてゐるが大體左の如きものが多いのである。



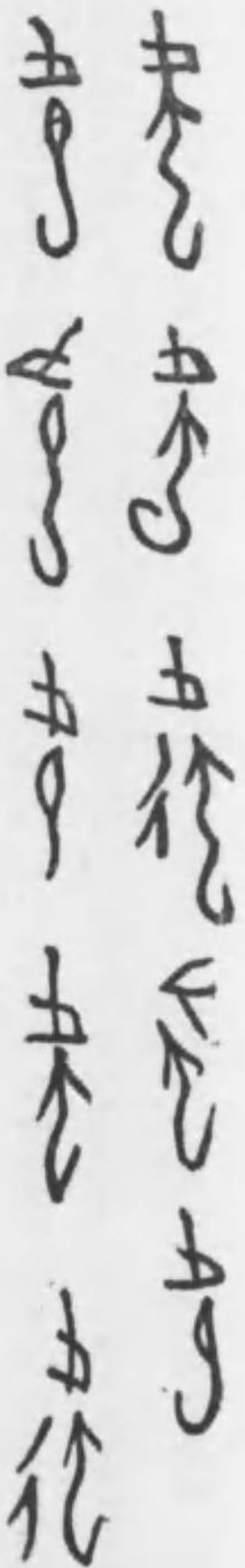
説文のうちに右文又は籀文として示せるものにやゝ幾分之に近きものと稱せらるべきものがないでもないが、金文の方には絶えてかゝる子の字を見ることはないのである。而かもかうした異様の形せる龜甲文字が如何なる意味を示せる象形なるかは薩張り判らないのである。冠の如くにも見えるし、

祭器のやうにも見えるし、香爐か何か有脚のものらしくも想像せらるゝのである。しかしこれが何であると断定するわけにはいかぬ。支那にも日本にも之が何であると云ふことを示してゐるものは誰れもないのである。全く判じもののやうなものである。

普通世間の人々は子だの巳だのと云つたら譯のない文字と見てゐるかも知れぬが、専門の立場から考へると云ふと見當さへもつかぬのである。ところで然らばこゝに述べんとする巳歳にちなめるへび(蛇)の字はどう云ふわけでこの形をとれるものであるか、その邊のことはどうであるかを遡つて見よう。

蛇が巳の字の意味に持つて行かれてゐるのは別に歴史的関係があるのであつて、直接巳が蛇の義を有してゐるのではないことだけは豫め承知してゐてもらひたいのである。蛇は今では虫と它の二字から出来てゐる複合文字であるが古はその虫偏はなかつたのである。單なる它の字だけで以つてへびたることが示されてゐた。しかしづつと古い殷代又はそれ以前の元始形式を遡つてしらべて居ると云ふと必ずしも單獨のそれではなくして、大抵止の字や彳の字を傍に有してゐる。こは恐らく運動を示せるものであつて行つたり止まつたりする進行状態を現してゐるものと見てもよろしいのである。左にその元始形の幾種類かを示して見よう。

蛇の字の古形(虫に因めるもの)



龜甲獸骨文並に殷虛書契、後編等參照。

その字形を通覽して、そのうちから止の字や彳の字を差引いて考へるときはその残りが即ち蛇形そのものとなることは云ふまでもないのである。その筆畫には正形があり、略形があり、色々であるが何れにしても之が説文に見ゆる小篆の蛇



に關係のあることは察せらるゝのである。龜板文を見ても説文の小篆を見てもそのへびの形に脚を有せざるは勿論であるがこゝが有脚の蛇を現はせる龍(辰)と異なる顯著なる點であるとなすのである。蛇に就いては尙述ぶべきものあれども干支に因みたる範圍内にて今こゝに簡單にその字の起りを示すだけに止めておくこととしよう。

三 寅

寅歳の寅の字について説文流の解釋を試みてみると説文は千八百年前の文字に關する唯一の書であるがよい説もあり怪しい説もある。寅の字について曰く、正月は陽氣動き、黄泉を去り上出せんと欲す。陰尙強也云々とあつて寅を物の演出する義にとる釋名などと同じ見方に解いてゐる。しかしなぜそれが寅の字の構造をとつたかは判明しないのである。けれどもその形は説文以前の古い時代のものから集めて來ると

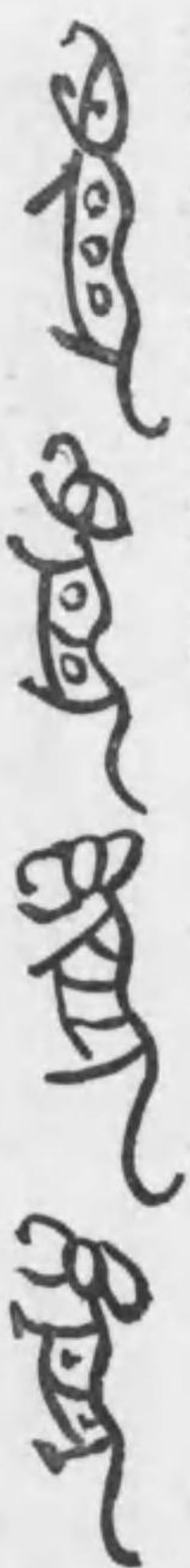


寅の字の
古い書體

など色々ある。初めのは殷代の龜卜に用ひられ龜板文の寅の字でその他の三代の古銅器鐘鼎彝器の類にある金文又石鼓文などである。今日の寅の字の形をとる迄に随分と様々に變つた體のある事がこれでも判る。後世の楷書の形になる前に篆文では似ても似つかぬ構造をしてゐたことを見るのである。十干十二支の文字は古代に之を組合せて日を示すに用ひ、又十干のみにて之を示すこともあり、十二支は十二ヶ月の月を示すに用ひてゐる。何れもその言葉の音をかりて來て寫せるものであつて字形、字の構造に關係はないのである。それに無理に關係があるやうに牽強附會せんとすればたわいもない

ことになる。せぬがよろしい。ところで今一方の寅にちなみたる虎と云へる字になるとこれは最も明白な構造を有しその動物としての雄姿がどこ迄も明白に現はされてゐる。これも後世の楷書では虎だか何だか専門家であつても楷書だけではよく判らぬ。どうしても初めからの繪文字象形のところから説明してその當時の字形を示して來なくてはならぬ。

殷代の龜甲文字に見えた虎の字

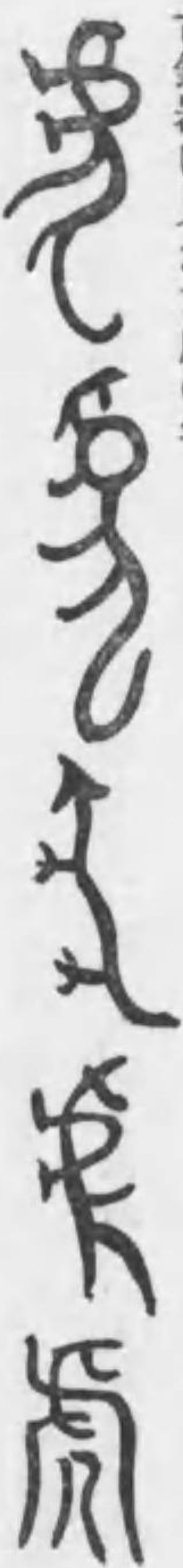


虎の字の
古い書體

かうした字形の文字は随分ある。支那の河南省彰徳府の小屯から出土した龜甲のうち此の類のものが澤山見出される。又殷虚書契にも殷虚文字類篇にも蒐録されてある。自分の手控へにもどつきり集めてゐる。この中には斑點のあるのは豹の字のつもりかも知れぬ。古代河南省黄河の北岸あたり大森林で虎や豹の出でゐたことは珍らしくなかつたであらう。それを狩獵の目的物としてゐたことも考へられる。ともかくかうした虎に關する文字が繪文字として貴重な材料から見出されるのは文字の研究上注目すべきことである。

降つて龜甲の次に鐘鼎の類の古銅器の方の文字ではどうかと云ふと、これにも虎の字は中々たくさんある。

古銅器に見えた虎の字



實に千變萬化でそのまだ一定の形になる以前齊魯の地方、豫の地方、吳の地方とそれぞれローカルカラーが著しく見えてゐた。しかしそれが秦の始皇帝の頃となると、大分統一せられ自ら一定の標準に近づいて來たのが採用せられるやうなつたのである。そしてそれが説文に採録せられることになつた。楷書の以前に見る虎の字は象形に近い形をしてゐたのである。

第四章 戎狄蠻夷

東洋に於いても、亦西洋に於いても凡そ一國の民が初めて、外人に接すると、普通に、劣等視してかゝると云ふことは、是れ人情の常。殊に交通の十分に開けなかつた古代に於いて最も其の好適例を見出すのである。吾人は今、歴史上古代に於ける支那人が外人に對して如何なる感想を抱いて居たか。此の點に就いて文字及び言葉の方面から少しく觀察して見たいと思ふ。

先づ異人種なるアーリアン(Aryan)民族の上代に就いて見るに、古代希臘人の如きは外人を呼ぶに Aglossoi (譚語の徒) と綽名し、ポーランド人(Poles)は隣族を目するに啞者の名を以つてし、又古代ゲルマン族の異名は Nénéstion (露西亞語の njenez プルガリア語の némecc にあたり啞者の義なり) として知られたること印歐言語學の泰斗ポット(Pott)の書(Indo-Germ. Sp. s. 258)にも見えて居る通りである。そのゲルマン族も亦外人を呼ぶに尙 walth (啞者)の語を以つて言ひ返して居たと云ふことである。今日の英國のウェールズ(wales)なる地名も素を云へばアングロ、サクソン語の wealth (啞者)と云ふ言葉で綽名されて居たものが、後世此の固有名詞となつたものである。尙古代のサンスクリット(Sanskrit)でアフガニスタン方面の部族に與へて居た稱呼 mlekka なる言葉も亦之に似た義であつて、わからぬ蠻語をしやべくる人の義であると云ふことである。

印度歐羅巴語族に於ける對外人思想は大概此の呼び方に依つて察することが出来る。民族史を全然異にして居る東洋殊に支那に於いては其の國民の尊大主義(若し主義と云ひ得くんば)からして特に顯著に其の現象が見える。支那は其の國家内部に於いて帝王と國民との關係が嚴重ならず。帝王の權勢すら眞に對絶的となることの萬々不可能なるは歴史の證明するところ敢へて不肖の贅言を俟たざる可し。然るに君民打つて一國となりし支那國人は其の意氣頗る高く、匹夫と雖も自尊、中華(Chong hua)一くに又中國(Chong kou)の名を以つて高くとまり、而して外人に對してはアーリアン族が外人に對する啞者式のそれよりも更らに甚しきひどい呼び方を以つてして居るのである。『鳩舌』など呼

ばんは尙其の程度偶然にも西洋のそれに似たれども『東夷』『西戎』『南蠻』『北狄』なる語に至つては支那中國人の自尊亦以つて察するに難からざるものあり。吾人は今日の時勢の日に月に國事多端、唯國際的友誼を厚うす可きを知ると雖も、聊か研究上の立脚地より、古代に於ける中國人の外人觀を陳述し、以つて其の字義を明かにして置きたいと思ふのである。先づ邊裔のうち中國を中心として東西南北の順序で觀察を進めて行かう。

一 夷—東方

夷の字は九夷、四夷、荒夷、遐夷（*Kui*の音譯）裔夷、蠻夷などと熟語を作つて、孰れも外人、野蠻人、遊牧人（*in nomad life*）なる如き意に用ひて居る。夷は既に『九夷八蠻』などと稱して書經にも見えて居る位であるから、蠻苗などと同じく上代の支那人に早くから知られて居たやうである。支那北方外民族は古來馬に乗つて其の武を誇り。騎は北狄の特色。馬なくんば北狄の北狄たる所以は失はれる位である。實に北人の慍悍は騎に在るのであるが東人の夷は比較的やさしい種族として知られて居る。固より普通の意味よりすれば『夷』の字は坦夷などと稱して平坦の義を有して居る。併しそれは後世の第二次的意義であつて、素とは矢張り武を以つて特色として居た人々であつたことが想像せられる。思ふに北人の騎に對して東人の方は、射をよくせしものなるか、弓を以つて唯一の武器として居たらしい。その弓人即ち夷族なるものを平定するの義より一般の亂賊外敵を平定するをも矢張り「夷」と云ひ遂には「翦夷」「掃夷」の語をさへ生ずるに至つたのである。

夷の種族が變幻出沒、猖獗を極め居たる事實は之を歴史に徴する迄もなく、其の語の解を見るもその一斑を推すことが出来る。

漢の張輯の廣雅（後世の博雅）に、夷は變、奪、駁也

漢の許叔重の説文に、夷は平也東方之人也

と明かに見えて居る。尙文獻の上の記録をはなれて單に文字上のみよりするも、『夷』の字は實に『弓大』の二字より構成せられて居る文字である。併しその『大』の字は大小の大的義に非ずして、全く『人』の義であることは金石文字の研究に依つて直ちに證明することを得可く、又上古の考で、天皇、地皇、に對して人皇を加へて三皇と云ふ、其の人皇は一つに又大皇（太皇）とも云ふ、是れ即ち『大』の字が文字學上『人』の義なりしことの證左である。左に『夷』の字及び『大』の字の古形を掲げて見よう。



夷の字の篆書
弓と大の字、



大の字の象形文字
古文（周の大祝禽鼎）

「大」の字が人體の象形であるばかりでなく、「人」の字も亦素とは人體を示したものである。但し「人」の字の方は「大」の字と違つて側面の姿を寫して居る文字である。孰れにしても、その人にかたどつた繪文字なることは一點の疑問を挟む餘地もないと思ふ。即ち、人の字の古形は次ぎの通りである。



人の字の篆書
(後世の形)



人の字の象形文字
古文(散氏盤)

此の古文の比較によりて「弓大」の二字は即ち「弓人」と解して決して不都合はあるまいと考へる。果して然るならば夷の字は即ち弓人の義で構成せられる文字であつて定めし上古外民族(今の滿洲遼東以東及び以北日本海に近き方面までをも含む)が支那漢民族を敵として抗し闘ふ時には弓を以つて武器の一つとせしことが察せられる。こは支那人が東方の外人を敵視して「夷」の字を作り之に當つたものであらう。併しながら支那最古の記録の書經詩經などに見え初めた頃の夷の字は既に平安治の義に用ひられて居る。白鳥博士によれば東方族に夷の名を與ふるは五行説に歸因して居るのである。併しその東夷に對して呼んで居た稱呼の音はいかゞでありしか。果して今日の夷の字の音の如く「大」又は「人」の音で呼び居たりしか頗る疑はしい。案するに古音はタイ(Tai)の音更に古くはテツ(Tet)「鍔鐵等に殘る大」の音であつたかと思ふ。少くとも夷は台と同じく古音はタイでなかつたか。

夷のことを殷末周初あたりの頃には何と云つて居たか、少なくとも周代に於ける夷の音は何と發音して居たか。吾人は詩經の文面より察するに夷の字が台の字と普通に用ひられた例を見出す。加之、その文字の講造上と支那音韻の沿革史上より推論する時は夷の古音は少くとも「Tai」又は「Dai」の音ではなかつたかと臆測せられる。外にも「恚」の字の古音が「kai」であり、其の「kai」の古音より漸次變じて今の「kai」となつた如き又「唯」の字の古音が「kai」でありそれが轉々遂に「kai」となりし如き類例からすると、夷の字の周代の音も亦古音「kai」でありしかの如くに考へられる。吾人は、先秦又は秦以後の東夷の名稱について高句麗、濊、貊、倭、室韋、勿吉等色々搜して見たけれども未だ之を確かめ得る如き好都合の例には搜しあたらぬ。依つて暫く之を假定説として掲げて置くに止めて置く。決してそれを斷言して主張するのではない。



大の諧聲文字
古の泰の字

以上の假定にして若し認めらるゝならば吾人は學者が總べて「夷」の字を以つて會意文字として居るのをば、改めて諧聲の文字と呼ばんと欲するものである。而して大の字を音符として字の音を出せるものは他に泰の字のそれの如く可成りたくさんある。夷の字の如きも亦其の類ではあるまいか。併しながら夷の古音を「Tai」としても「Tai」の音が直ちに變じて「vi」となつたのではない、自ら其の間には順序の存在するものがあるのである。其の徑路の大體を支那の音韻史上

から愚考を述べれば次ぎの如きものである。

夷の音韻變遷 Tai→Tei→Ti→Shi→hi→yi X²i

要するに「夷」の字の組み立て、意義及び音は大略以上の如くである。併しながら茲に注意すべきは夷の字の出来た時代は其の字の現はす言葉の出来た時代とは決して同一でないと云ふ點である。即ち文字以前に既に其の語は存して居たと見なければならぬ。言葉の古さは文字の古さよりも更らに遙かに古いものと見なければならぬ。理屈は確かにさうである。けれども吾人の茲に観察した點は言語時代と云ふよりも文字時代に入らうとする時の其の當時の漢民族の東夷に對する思想が如何にありしかを窺つたのである、因みに云ふ東夷の地理上の範圍は今の河北省及び山東の地全體と朝鮮、日本等をすべて含めて云ふのである。

二 戎—西方

戎の字は古來、元戎（兵庫）御戎（兵士）伏戎（伏兵）致戎（開戦）などと云つて軍事戰爭に關した語として用ひられて居る。戎の字は其の構造上よりすれば、此くの如く軍事に關したものと見られる。然れども一步を進めて其の字形を離れ其の言葉の方から云ふ時は戎とは即ち「大」なるの義を有する語である。詩經などに「此の大功」と云ふことを「茲戎功」とある如きは其の一例であつて、

戎の字の本義に叶つたものである。周を経て春秋戰國の末秦の初に及んでも尙ほ此の語は方言として支那の一地方には残つて居た形跡がある。

漢の揚雄の方言にも、凡物之大貌宋魯陳衛之間謂之蝦或曰戎。

とある。又以つて傍證の一つとなすに足ると思ふ。而して戎の字の今日の北平音は下平の jung² の音であるが愚案に依れば戎の根本古音は kung の音である。kung の音は多く廣大、又は隆盛、の義を有する言葉に多く、而して又西北外民族の言語に少なからず見出される言葉である。然るに支那で kung の音は多く變遷して Sung 又は jung の音となる傾向がある。戎の音は此種の系統に屬するものではあるまいか。

戎の語源にかくの如く「廣大」の義があつたとしても其の文字の出来た頃の當時の義は又自ら變遷を受けざる得ない。吾人は支那の古記録に於いて例へば易、詩經、禮記等の文面を見るも多くは戎は軍事の義に轉じて用ひてある。多くは兵器の義である。是れ此の文字の構造上より來たる直接の義理であつて、最も廣く用ひられる所以である。固より詩に「戎狄」などと外族の意で用ひられて居るところもないではないが、其れは此の文字の二次的意義であつて、戎なる字の初めの意味は武器、兵器の義であらねばならぬ。

説文にも、戎は兵也從戈從甲。

とある。今日の楷書で書く戎の字は戈と十の字を書く、此の「十」は決して數字の十ではない。甲冑の甲の字の古形の倂である。數字の十の字に見るのは俗解である。左に「戎」の字の篆書並びに古文（繪文字）を摘寫して見よう。



戎の字の篆書
戈と甲の字



戎の字の繪文字
古文（毛伯彝）

此れに依つて見ると戎の字は「戈」と「甲」から成立し「ほこ」と「よろひ」とが組み合されて出来た文字である。甲の字が古く鎧の義に用ひられしことは、既に易に甲冑の語が見え、左傳に兵甲の語の見えるに居るにて明かである。併し甲の字其のもの起りは鎧の形に象つたものでなく、素とは、艸木初生の形で、小苗の頭、又人に擬しては人頭の形にも譬へて云ふのである故に、甲の字の古文を見ると、次ぎの如き形に古鼎に見えて居るのである。



甲午簋
甲の字



大夫始鼎
甲の字

けれども此れは甲の字の根本を云ふのであつて、最早や「戎」の字の構成せられた當時に於いては

具足の方の義で、以つて戈の字と配せられたものである。かくの如くにして、戎は兵器の義を本來有することとなつた。西方及び西北の方面より來たる外敵は古來頗る多く、中には羌人（西藏種族）の如く素と牧羊に従事せしものと思はるゝものもあれば、甘肅方面に隱然勢力を養つて、中原に入るに及んで、農業に従事した如きものもある。併し中には古來鐵劍を製するを以つて名高き蒙古種族の如きものもある。戎は周の先祖と云ふ説もある位で、最初陝西省あたりを根據地とせし有力なる種族である。

白鳥博士の文科大學に於ての講義に據れば中世記に於けるフンネン (Hunnen) 其他古代の戎狄は從來西人の唱へしが如き土耳其民族には非ずして蒙古種族のもの多しとのことなり。果して然るならば支那人が以つて戎と呼びしものうちにも亦少なからぬ蒙古の血の混ざる種族を含めるなるべしと思はれる。而してその戎は兵器を擁して既に周の頃屢侵入し來たりし形跡もあるが如し。而かも當時の戎狄荆蠻は今日の臺灣生蕃の比に非ざりしなるべし。然れども吾人は茲に戎とは何種族なりとの比定をなすに非ず。唯戎とは頗る其の兵器に工にして其の勢は中々盛なりし種類なりしならんかとのことを其の語及び其の字面によりて觀察したるのみ。

三 蠻—南方

蠻の字は羣蠻、南蠻、荆蠻、烏蠻、畚蠻などの語に用ひられ、すべて南方外族の呼び方に使はれて居る。以前に述べた『夷』及び『戎』は共に武器に關した文字であるが、此の『蠻』の字は虫に従つて構成せられて居る文字であつて、全く其の趣きを異にして居る。

博雅に據ると、蠻は慢邊とあり。

説文には、蠻は南蠻蛇種從虫縹聲とある。

蠻の字の示す虫は之に依つて見ると、長蟲の種類らしく、閩と音近く、語源も亦左迄遠からざるべきものと思惟せらる。後世の蠻の字は下に虫の字を書けども、古くは虫の字なくして而かも蠻の意に用ひられて居た。即ち虫の字の加はりしは秦後漢代前に於いて見られる。



蠻の字の篆書
縹と虫の字



蠻夷邑
篆金索



虢季子白
盤(古文)

縹は素とマン (man) ともラン (lan) とも讀まれて居た文字であつて、其の意は絲の如く長く續いて不絶の義である。説文には亂也とも見えて居る。玆に云ふ、蠻の字の先驅をなして居る縹の字は其の長蟲の義で蠻意で既に用ひられてたものである。造字の少なかりし當時はかくの如く假借の行はれしも、秦後『蠻』の字の作られて以來此の字『蠻』を書くに至つたものと思はれる。

蠻の字の沿革は大略以上の如くである。併し支那人が古く周代の頃から之を南方異族に此の名稱を與へて居たのは如何なる譯であらうか。書經堯典に既に、三苗の語あり。苗は音 miao にして蠻 (man) とは違ふ。併し吾人は南方異族に此の語の附せらるゝに至りし所以は別に根據がある、決して偶然のことではないと思ふ。と云ふは、今日南支地方及び安南暹羅方面を見るに、其の地名又は部族の名稱に Min (Bin) 又は Mon なる呼びかたがある。Min は支那文字で閩と書き福建省地方を云つて居る語である。Mon とは安南あたりに居る部族の名で人種學上 San, Tai, Laos などと類似の部族として目せられて居るものである。

吾人は此の閩 (Bin, Min) 及び Mon の人種學上並びに土俗學、神話、言語、其の他一般文獻學上の調査は未だ十分に遂げてゐないから兩者の關係に就いて斷言することは固より出来ないが、支那上に代に蠻と呼ばれし最初の種族中には或は此れ等の部族の先祖の含まれては居なかつたか。少なくともその蠻なる名稱を取るに至つたのは此の Min, Mon 族の一部が漢民族に接近して居たからではあるまいか。荆蠻などの熟語の存せるより考ふる時は今の湖南省邊りを蠻の本源地として上代には盛に此のあたりに擴つて居たものかと考へる。即ち此の蠻は後の所謂楚人である。楚人は Mon, Min, であると推定する。

傳説に據れば今の客家（一つに客人 Hak lang）と呼ばれるもの及び Tai 種族の如きもの素とは支那の中部又は中部以北に住み居たりしもので、それが次第に南漸せしものであると云ふことは此れ等土人の間に語り傳へられて居るところである。

南蠻の種族は西戎のその如く、世人の普通に想像する程に蠻的なるものではない。一般に文雅の心を有し、可なりの文化を發達させて居らぬものは殆んどない位である。烏居氏の調査にかゝる今日の苗族に徴して見ても此れは明かである。けれども支那人の文化に比すればその劣れること固よりである。且つ支那人の尊大主義よりして之を蟲けら同様に呼び之を蠻 (Man) と叫び而して此の文字を普通に適用するに至りしものに非ざるか。閩の字は蠻の字程に廣くは用ひられざるも尙其の蟲に譬へて呼べる文字なることは何等の疑ひがない。

支那人はかやうに南方異種族を拉へて蠻と呼び又南蠻と稱せしのみならず、印度洋を経て支那南海に航し來たりし西人すらをも同じ類推法によりて又之を南蠻と云ひ、南蠻缺舌などの語を作つて居る。尙隋唐時代に至れば同じ南蠻中にも林邑扶南等種々のもの見えたり。されど其の最初のところは此の Mon, Min などの族を呼びし名稱に起因し之に蟲の義を有する蠻の字を聯絡させて記るすに至つたものである。しかるに此の南蠻人の稱呼が東夷西戎と異なり、兵器に因める文字を以つては決して書かれず、必ず輕蔑的に動物の蟲の字を以つて書き添へられて居ると云ふことは注意すべき現象なりとす、

四 狄—北方

狄の字は古來北狄、戎狄、羣狄などの熟語に於いて普通に知られて居るが、實は朔方の朔 (Sak) の字も亦音韻上 T, S の轉換の差はあれ、語としては別段大なる差のある語ではあるまいと思はれる。

さて此の狄なる語の素とは一説には Turk 族の Turk を音譯した言葉に始まり、其れを狄 (Tek) と云ふのであると云ふが、それは未だ十分に信じられては居ない。坪井博士に據るとは今、中央亞細亞方面に残つて居るテケ (Teke) 種族の先祖と見る可きものであるとのこと、果していかゞ。又、

廣雅に、 狄は尊敬也

とあるは其の本義から出た第二の意義ではあるまいか、委しくは尙今後の研究にゆづつて置く。併し大體狄は直ちに支那語と見る可きか又、後世の突厥 (Turk) などと同じ部族にして即ち種族の名をそのまゝ取つて音譯したものであるか其の二者のうち孰れか一つに決定せらる可きものである。

次ぎには其の文字の構造上からするに、今日の楷書體及び漢代頃の篆隸體では、犬の字の偏に火の字が見えて居る。併しながら此れは決して眞の古形に叶へるものとは云へない。素とは火の字でなく『亦』の字の古形を旁とせるものである。而して偏の方は矢張り素とから犬の字である。今その篆書及び古文の一例を示さうならば次の如きものがある。

狄

狄の字の篆書
火と犬の字

狄

狄の字の古文
曾伯鸞簠

「狄」の字の旁が火に非ずして「亦」の字の古文なることは金石文に徴して明かであるが、さてその「亦」の字は今昔エキ (Yek) 古音セキ (Shek) 更らに古くはテキ (Tek) の音である。亦の古音がテキであること云ふ點より云へば Take なる種族の名稱を寫すに用ひられたと見られないでもない。これは蠻が Mon 族の音譯にあてられて居ると同じ理屈である。然らば次ぎに其の偏の獸偏 (犭) は何かと云ふに前にも云へる如く犬の字の字形である。

説文にも、狄は、赤狄本犬種狄之爲言淫辟也從犬亦省聲

と見えて居る。依つて狄の字が犬の種類を現はせることは明かである。

𤝵

犬の字の古文
なるか未詳
陳逆簠積古

而して犬偏に用ひられたる犬の字は犬の字の古文の縦にとつた形である。

犬の意義を有する文字を以つて北狄に適用せる事實は一見少しく受け取れざる感がするが、併し支

那人の思想として外民族を畜生同様に視ることは敢へて異とするに足りない現象である。支那上代に於ける北狄の最も顯著なるは周代の獯豨、漢代の匈奴である。普通の學說にては匈奴は獯豨の後なりと。(獯豨は獯鬻のことなり。) 然れども人種學上又言語學上よりその然る所以を説明すること能はず、歴史上の事實とても、未だ之を積極的に證明することは出来ないのである。目下の假説説たるに過ぎず。言葉の音の方面より見るも、周代の獯鬻が一たびその迹を滅して以來再び同族と見らる可き名稱は見ない。匈奴の匈奴の字は古音クン (Khung) にして獯の古音クン (Kun) と音相近し。然れども猶とは如何に解すべきか未だ其の道を得ざるなり。坪井文學博士も匈奴と獯豨の音韻上の推定はなされたけれ共未だ十分にその然る所以を明かにする道はないやうであるとの事である。

獯鬻の歴史上並びに人種學上の不明なる、大體かくの如しであるけれども、若しかりに坪井博士の想像せらるゝ如く匈奴は獯鬻の後裔にして而してその匈奴は白鳥博士の上述の學說の如くに果して之れが蒙古種族であるとしたならば、結局のところ獯鬻そのものまでが又蒙古人の先で即ちその歴史上に於ける先住民 (Aborigine) と云ふことになる理屈である。而してそれが當時初めて狄 (Tek) と名指されて居たものなるか、どうか。今日の中央亞細亞方面に残つて居るテケ (Tek) 種族とその當時の北狄とは如何なる程度まで似寄りを有せしものなるか。これは殆んど研究するに手懸りのない事であるが若し人類學上からの萬一の手懸りもあるまいか。暫く記して後の學者の開拓をまつ次第である。

尙北狄の科學的研究には後世のカルマツク (kalmuck) 即ち西部蒙古方面に離散せるエレット種族及びブリアート (Burial) 即ち北部蒙古よりバイガル地方に擴がれる種族に就いて研究するところがなくてはならぬ。以前のコサツク兵の如き慍悍、騎馬武者も多くは此のブリアート種より起りたるものである。兎に角北方蒙古族の研究は元朝の起源の調査に相聯關するものであつて、北狄の闡明には頗る重要な部分であると思ふ。其の北狄の勢力と云ふものは時の古今を論ぜず絶えず常に支那中原の鹿を遂ふ武斷の大偉人を出だせるに依つても明かであるが、併し支那人は尙之に向つて、輕蔑的に而かも犬種同様に呼んでゐたのである。今の蒙古人も自分に其の蒙古の二字の冠せらるゝを頗る屑しとしないと云ふことであるが、併し漢民族の方ではこんなこと位は平氣であらう、寧ろ得意で居るであらうと思はれる。

結 論

以上の如く東夷、西戎、南蠻、北狄と四方に配して説明して見れば大略かやうに觀られる。けれども其の實此の名稱は必ずしも常にかやうに區別して用ひられて居るのではない。九夷と云へば多くの外國の意となり、四夷と云へば四方の外國の意となる。同様に、戎も蠻も狄も、それぞれ他の方角に向つて矢張り自由に適用せらるゝのである。又戎狄と併稱したる語を一つに又犬戎とか赤戎とかとも

云ふ。決して狄と云へば必ず嚴重に北方のみを指せると云ふ譯ではないのである。それ故上述の説明は唯その根本的の説明に過ぎぬ。普通は臨機應變に解して見なければならぬのである。

併しながら戎狄蠻夷は總じて孰れも支那人の蔑視せる如きかやうな野蠻な種族ではない。唯比較的文化的程度が中華のそれに劣ると云ふ迄であつて、大體は似たものである。中國は此れ等の蠻風殊に北人の文化とは自ら調和を保つて行かなければならぬ歴史的の關係を有してゐる。中國が中國の特質を此の三千年間保持し來たつた所以は全く此の周圍の外民族の特質をよく取入れ之を支那化したと云ふ點に存するのである。それ故若し中國が全然周圍の風俗習慣を加味しなかつたとするならば支那の今日あることは許されなかつたのである。唯支那の中華國としてえらい點は全く周圍の特質をよく取り入れて之を同化して行くことにあるのである。歷朝支那主權者が大抵初めは雷神の如き勢を以つて北方から侵入して來る。前王朝を覆へして新王朝を立てる。而かもその言語に於いて又風俗に於いて、習慣制度に於いては常に中國のそれに屈從せざるを得ざるに早晚至つて居る。是れ一方から云へば全く中國のえらいところである。此れが中國の特質なのである。併し此の爲めに中國の文化といふものはあまり崇高の位置にまでは進まないものである。進み得ないのである。絶えず周圍から水を混ぜられてゐる。之を要するに中國は文化の點に於いては周圍の種族よりもすぐれて居るが、併し自尊の念の餘りに強き點よりして圍りの外人をあまりに見さげ、或は蟲けら同様に見たり、又犬種と同

一視したりなどして居る。併し東方と西方のものは之を武を以つて長ぜるものとなし、東人を弓人、西人を戈人となせしことは其の文字上に明かに現はれて居る。けれども何ぞ知らん實際支那中國の強敵たるものは、多くは北方の狄人で即ち犬種族（蒙古人）である。犬種に非ざれば東夷の弓人ツングース族（滿洲人）であつたのである。

吾人が文字上並びに言語上より觀たる戎狄蠻夷の過去に於ける歴史的研究は大略以上の如きものである。

X 第五章 支那文字に現れた類推作用

心理現象に基く類推作用は普通日常の言語の上又は文字の上に最も著しく現れて來る。言語上の類推作用は言語感 (Sprachgefühl) に依つて新語形を拵へ出し、文字上の場合では文字感に依つて一般大勢にきめられる文字即ち新俗字が出來て來る。しかし新俗字の出來て來るのは單に心理作用丈けに支配されてゐるのではない。宛かも言語の場合に新語形が類推作用以外に發音機關の状態如何に依つても出來てくるやうに、新俗字の生れる場合に於ても亦類推作用の外に他の作用例へば點劃の省略又は運筆上の便否などに依つても影響せられると云ふことも大いに與つて力あることと思はれる。けれ

ども茲にはあとの場合に就いては云はず、唯類推の方面に就いてのみ觀察をするのである。

從來文字の類推問題に就いての攷究はどうかと云ふに、殆んど全く注意せられずに葬むられて居つた。自分の管見ではたゞ極端な復古主義の觀かたがあつたきりであると思ふ。其の方の觀方では少しも研究的態度でなく、唯頑固に標準の字劃を信仰して其れに一點一劃でも抜き差しのある文字があることを誤字として酷く擯斥した。勿論それにもひと理屈はある。けれども世間一般が其の誤字を誤字と思はないで通用させて居るやうに至つた場合にでも、尙之を非難しようと思ひのみである。そして何故所謂誤字が一般に通用出來る生命を有するに至つたかに就いては攷ふる勞さへ取らなかつた。此れは平安朝以前の雅言が絶対に正しくて後世の口語が一概に卑俚であると信仰して居た感情説と同様で別に確かな根據があるのではない。文字は言語と同様に或る程度迄は時代に從ふ變遷發達を認めなければならぬのであつて、復古主義の方に根據として居るやうな標準の字劃とても更に層一層古い字形を標準として觀察する時は存外多くの抜き差しのあつた状態を経て、出來あがつたものの多いことを發見するのである。否それのみでなく近くは現状を見ても種々の簡易な文字が素とのむづかしい形から脱化して出來つゝあることは誰れしも疑ふことの出來ない事實である。それ故更に一步を進めて云へばこれから後も從來の字劃に優つて更に一層簡便な新脱化文字が拵へ出される必要もある位である。文字に就いての大勢はかくの如くに向つて來た。かるが故に吾人は先づ過去に遡つて文字の

沿革發達の迹を研究する必要が十分あると思ふ。

要するに文字の沿革史全體の上から云つて古今一般に使用されて居る俗字は茲に誤字とは見ず、寧ろ發達した文字として研究するのである。印度歐羅巴の方面ではその文字の性質上別段此の側の研究と云つては現れて居ない。けれども支那文字の影響を蒙つた東洋の方面では言語學上の問題と相並んで之が特に研究せられなければならない價值を十分有して居ることと信ずる。

今文字上に現れた類推作用に就いて觀察を始める前に、比較の爲め先づ言語上の類推作用に就いてその一斑を窺つて見よう。

一、新舊兩者の意義の上か又は音韻の間に類似聯想(時として反對聯想)が存する場合に起る類推作用。例へば

イ、やぶける(破)。

東京の兒女が裂けるのけるの活用形に類推したもの。

ロ、みぎり(右)。

ひだり(左)のりに類推したもの。

ハ、はばさ(幅)。

ひろさ(廣)ながさ(長)などのさの類推。

ニ、げこ(下戸)。

じやうこ(漏斗)の底なきが如く大飲する人を同音の上戸に通はせて

其の反對に飲まないものを下戸と洒落る。これは反對聯想の現象であつて尙「しらうと(素人)」のしらに對して「黒うと」と云ふ語の生ず

る如き例も亦こゝに致へ合す可きものである。

二、素との古い形の意義が忘れられて新語形を取るもの。例へば

イ、ゑんどうまめ(豌豆)。黒まめ南京まめお多福まめなどのまめと云ふ語の類推によるもの。若し之を漢字に充てて致へ直すならば豌豆豆と云ふ二重語のある

ことを知るのがある。

ロ、一週かんの間(一週間)。三日の間六日の間などの間の類推形で一週間の間の意義が忘れられたものである。今では此の類推形の方が反つて口調よく響くやうになつた。

普通に現れる言語上の類推作用は大體以上のやうな形を取つて起つて來るのである。

次に然らば文字上の場合には此の作用が如何に現れて居るか。之を觀察するには先ず普通に起る場合を大略次の三種に分けて致へることが必要である。即ち

一、形の上の類推作用

二、意義の上の類推作用

三、音の上の類推作用

尤も實際の場合には二種、時としては又三種に跨るやまなものも出て來ることがある。けれども大

體此れ位のところで分けて置いて委しくは各項に就いて述べよう。

一 形の上の類推作用

形の上の類推作用と云ふのは意義又は音の方面に相違を來たさない限りに於いて他の文字の聯想上から字形（書體でなく）を變ずることを云ふのであつて、その起る場合がよほど複雑である。玄かし大體に於いて次の二種に纏めて入れることが出来る。即ち一は文字中に於ける偏旁等の位置的關係を換へるもの即ち内的變化に屬するもの、二は他の文字の影響を受けて其の一部分に變化の生ずるもの即ち外的變化に屬するものとなる。その内的變化の方のものも勿論外的の影響に依つて居るのではあるが、その要素の上に何等の混同増減を來たすことはないのであるから茲には別種として之を致へたのである。

甲、内的變化によるもの

支那文字の構成上から觀た内的關係の内には左右關係、上下關係、内外關係等種種あつて孰れがその最も元始的のものであり、孰れが最も他を引きつける勢力を有して居るかは容易に決しられない。けれども後漢の説文などに見えて居るところを以つて假りにひどく間違つてゐないものと見ると、左右關係のものが最も多く見られるのみならず、當時は未だ左右關係で現はれて居ないものでも後世この關係の構成を取るに至つたものが頗る多い。其の最も普通なものは上下關係のものから發達して來たものであつて、例へば次の如きものが其の好例である。

朥から朥の字が出で

脅から脇の字が出で

棊から棋の字が出で

胷が胸となり

羣が摸となり

關が時として濶に變ずる。

けれども其の間に又自ら意義の分れた文字を發達させて妄りに混同することの許されないものもあるやうである。即ち説文第十卷心の部より考ふるに、忘から忙の字が出でて別の意義を取り怠から怡の字が出でて別の意義を取つた（金文では既に怠怡共に商鐘に見ゆ）如きものもある。無論分出した當時は別の意義ではなく各互に連絡した意味を有して居たものかも知れない。

時代の上から觀ると先づ上下關係であつたものが左右關係に類推せられて上述のやうな形を取つた

ものと見られる。けれども全然之を以て總べてを律することは到底出来ない。現に其逆の場合を見出すことは珍らしくないのである。例へば

松が杳となり又杳となり（説文には、荒りに杳の字あれど疑はし）

嶋が疊となり又普通に島となる（此の場合には省略法が加はる）

崎が岑となり又壺となる、又

町から卑が出で、

略から畧がでる（後者は説文不録の字形也）

此れ等は古形の復活などではなく、寧ろ上下関係からの類推と見る可きか將た文字上の洒落に過ぎないものでもあるか、孰れともきめにくいけれども今日普通に見る左右関係の文字でも例へば洛の字が古文の畧より出で

訓の字が古文の訾より出で又

誇が同じく誇より出で

て居る例などから致へて見ると往々上下関係のものは古形の復活した形として見られないこともあるまい。まかし復活にもせよ、又洒落にもせよ之を起させた原因となるものは兎もかく上下文字の類推の力ではあるまいか。

乙、外的變化によるもの

他の文字の聯想上から字形の一部分を他と混同して、似て非なる新字を拵へ出すことは最も普通に見る現象で、又文字上の類推作用は此の點に於て頗る多く發見せられるのである。又普通に誤字と稱せられて居るものの大部分も、多くは此の部類から生じて居る。左に其の主なるものを擧げる。

少の字から歩の字を誤る。（歩の字の原形は **步** であつて止の字の向きの違つたもの二つから成る。それ故少の字には關係ない。従つて歲なども歩と戌とから成る字であるから、これも少の字とは關係ない。）

求の字から術の字を誤る。（術の音は述などと同じく朮の部の音による。）

土偏から切の字を誤る。（切の音は叱などと同じく七の部の音による。）

林の字から歴の字を誤る。（曆歴などは、秝の部の音に従へり。）此の外巳の字から汜范範卷宛扼などを誤り、

爰から服の字を誤り又段の字を段の字と混同して段（誤字）としたり、

幸の字から勢、達の一部を誤り、

用の字から角の字を誤り、

立の字から奇の字を誤り、

刀の字から幻の字を誤り、
專の字から博の字を誤る。

此れ等の誤謬混同は今日尙其の誤字たることが自覺せられて居る場合のものであるけれども、
又今日誰からも誤字としては見られて居ないものに於いても同様の混同が随分多く窺はれる。
今その普通なものを五つ六つ左に擧げると。

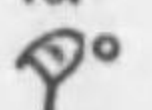
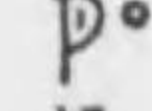
- 且の字から互を亘となし
- 虛の字から戲を戯となし
- 宀の字から牀を床となし
- 示の字から稟を稟となし
- 二水(氷)の偏から決況減を決況減となし
- 灸から久米を彙となし
- 麋などから鹿兒を麋となし、
- 磨などから麻呂を磨となし
- 傷筋の類から場腸を場腸となし、其他、尙、
- 凡の字が丸となり、
- 怪の字が恠となり

器の字が器となり、
併の字が併となり、

弔の字が吊となり、
備の字が備となつた類、

は珍しくない。
甚だしいものに至つては起源を異にする三種の繪文字が今日では全く他の文字に混同せられて遂に同一の形になつてしまつて居るものもある。例へば複合(Compound)文字の場合に於ける月の字の如きものが即ちこれである。

今複合文字の場合に於ける月の字を過去に溯つて其の由來を探つて見ると次ぎのやうになる。

- 一、眞の月の象形に基くもの、
 - 二、肉の象形に基くもの、
 - 三、目の象形に基くもの、皆等しく月の象形に今日では類推せられて居る。
 - 四、舟の象形に基くもの、
- 單獨の場合に於ける肉の象形は  の如き形をして居て自ら月の象形の  に似て居るから楷書體に變化せらるゝ時に既に混同して居たものとも見られる。其の複合の場合に於ける肉の形も亦同様にはゞ月に似て居る。左に肉目舟の各の場合に於ける構成文字の例を擧げる

(一) 肉の象形を含める會意文字としては胃、育、骨、肩、肴、胥、湖、胤等の文字がそれである。そ

のうち始めの胃の字にある月は無論肉の變形であるが田は胃の腑に物の溜つた意を象つたものであると云ふ。次の育の字は从子肉聲と説文にある。果して之が信ぜられるならば月即ち肉は育の字の音符である。「子」は許慎が子の字の轉倒した象形であるなどと云つて居る文字である。

(二)目の象形は素と横なりに人間の目の形を書いて居たものであつて元來は月の形と混同する程似ては居ないけれども複合の場合に限つて往々月の字に誤られて書かれて居ることがある。例へば冒の字、従つて又帽などに見る月の字は素と目の字を月の字に混同したものと思はれる。

(三)舟の象形は素と目と同じく横なりの文字であつて其の直立體となるに至つて最も多く月の字に混同せられるに至つた。前、兪、朝、服、勝、朕、藤、等の月は總べて此の舟の形の脱化した直立體のものを含んでゐるのである。例へばその朕の字の如きは舟と兩手と扈の字との相集まつたもので謂はば詩的な考に基づいた複雑な意味から出來て居る文字のやうに思はれる。後漢以前には肉、目、舟各區別して書かれて居たものが今では全く混同して而かも怪しまれない程になつて來た。他にも又凡の字から別に丸の字を發達させたり、決況などの水偏かさ決況などの二水を混化させて作つて居るやうな事實を總合して致へて見ると今日でこそまだ誤字として目せられて居るやうな類推文字も聽ては生命のある眞の文字となつて一般から認められるやうな時節が來るであらう。字形の上の自然的發達は此の點に於いて決して個人的人爲の爲めに束縛せられるやうなことはないのである。

二 意義の上の類推作用

支那文字は一般に義字と云はれて居る位で、常に形の上に意義が默示せられて居る。けれども意義の内容の推し移ると共に往々字形が之に隨伴して動いて行つて其の結果意義上に關係のなかつた第三者の形までを變ぜしむることがある。又新舊兩語の意義上の聯想に依つて偏旁を巧に組み合せて以て新字を拵へ出すこともある。かくの如き現象は支那文字發達上頗る注目すべき點であつて總べて皆意義の上の類推作用に支配せられて居るのである。

意義上の類推作用が文字上に現れる場合を自分の觀るところでは分つて次の二つとする。一は純粹に意義のみの關係に依つて字形に影響を及ぼすもの即ち内的原因によるものと、二は意義の上に存する聯想關係の外に形の上にも亦一種の類似關係が存して居る場合即ち内外兩作用の結果に依るものである。以下に實例を擧げてその各場合の一斑を述べよう。

甲、内的原因によるもの

時と所のかはるにつれて言語の音の移り行くことは一般に致へられて居るけれども、字形の變り行くことなどはさまで致へられて居ない。まかし文字とても矢張り素とは意義の内容に支配せられて居るものであるから時代思潮に伴ふ字形の上の變化は流石に拒むことは出來ないのである。

今卑近な文字からその例を取つて見ると、

唇の字。

説文に見えて居る篆書は必しも信じられないのであるが、今日書く唇の字は素と从肉辰聲口端也で後漢當時は確かに肉の字を含んで書かれて居た。然るに唇と口との意義上の關係から後世口の字が肉に代るに至つたのである。(尤も説文卷二に唇の字がある。がそは別義である)。

暮の字。

暮の字は素と莫の字丈けで今の日暮の義を現して居た。最初は草木の茂れる曠野に太陽の没する様を書いたものが即ち此の莫の字のもとであつて篆書には艸の象形を上下に二つ書き中央に太陽の没し入るかたちが書かれてある。然るに此の原義が早くも失はれて、一般に物の没して無くなる義を取るに至り、人の没して土中にかくれたるものは之に土の字を加へて墓の字となし巾にかくれるその蔽ひものは幕の字とするやうになつた。その類にならつて最初日の没しかくれることを示した莫の字が更に暮とせられるに至つたのであつて、かやうに文字が再度の發達をなすのも全くこの類推の作用によるのである。此れは云ふ迄もなく人力車と云ふ觀念を表識した類推文字で明治六年日報社の制定に係り。かゝる類推作用から察すると或は近くは人造石を表すに人偏に石の旁を以てするに至るかも知れない。

俸の字。

塩の字。

これは俗字であつて眞の素との文字は監の字の音によつたものである。古くは即ち鹵の字と監の字とに依つて居る。即ち鹹と同種の文字で音は Kan。その鹵の形に就いては高田忠周氏は鹽田なりと云はる。果していかが。今は鹽の字が俗に土偏に書かれて居ることがあるが、此の俗字はむしろ土砂の攷に類推せられて出来たものと見られる。

圀の字。

圀の字は則天武后の新字の一つであつて素との國の字の俗體である。國は干戈の觀念から來て居る文字であるが圀の方は四境八方の攷を明かに表識した文字である。尙國家の攷から王者を主とする時は王の字を容れて國の字が出来、民衆を主とする時は國構へに民の字を容れた俗字が出来て居る。支那文字製作上から觀た義字の變遷はかくの如く明かに示されて居ることもある。

聽の字。

素と聽の字は耳偏の下の壬(壬は別)の部分から音が出て居たものであるけれども普通には耳偏のみが書かれて居る。これは一方に聰明の聰などを聯想し同時に聽の字の意義の考が交りて生じた類推文字かと思はれる。つまり素とは耳偏丈けの文字ではなかつたのである。

辭の字。

辭の字が字義上から舌偏に類推せられることがある。その爲に時としては意義上之と全く無關係の亂の字迄をも此の筆法で舌偏に書くことがある、演説の説を舌と誤るなども

或は普通の作用の外にかゝる意義上の關係でも存して居るのではあるまいか。
素と戰國時代以前或は尙よほど古く支那では玉と貝とを堆く積み重ねてこれで財寶の義
寶の字。



周伯據敦 (周時代の鐘鼎文参照)



楚公鐘

が示されて居たやうである。貝の字の傍にある缶は單に音符なるか又は音義兩方を兼ね
たものか不明。後世では缶が璽の字の略字に混同された爲めか又玨 (和銅開珮の珮も寶
の略字か) の字との混同の爲めか屢寶の字の形を見ることがある。今日では又單に冠
りに玉の字を其の名残りとして書いて而かも尙寶の意義が現はされて居る。

かやうにして支那文字の意義は其の構成する要素の如何で大略察することが出来る。けれども要素
の意義は時代の變遷と共に又往々忘れられて或は全く省かれることもあるし、反つて又新たに他の要
素の附け加へられたることもある。これ等の加減添削は一つに其の時代の思想に依つて支配せられる
のである。又新字製作の場合に於ても同様であつて式亭三馬が其の虚字盡に筆のすさびを戯れ書き
して居るのなども此の間の消息を如何にもよく告げて居るものかと思はれる。

乙、内外兩作用によるもの

意義の上の類似聯想は一方に於いて又形の上の類似關係と互に相俟つて作用し合ふことがある。か
やうな場合になると文字上の混同は更に一層烈しく且つ鞏固に行はれて來ることになる。例へば今日
多く用ひられて居る文字について云へば次の如きものがある。

勇の字。 勇の字に素と涌蛹などの旁フウリを音符 (Phonetical Symbol) に取つて之に力の義を示す力又
は戈の字が加へられたものである。又その本來の音は用の部分から音が出て居たもので
ある。然るに勇は男と意義に於いて頗る相似て居るのみならず形に於ても亦酷似して
居る所から遂に今では部分的混同を生じて而かも怪まれない勇の字が生じた。男の字は
从田从力であつて又其の音も勇とは全く別である。それ故素とは勇と男と關係のなかつ
たものである。

協の字。 立心偏の協の字と意義も形も酷似して而かも一層古いものは十の偏を有する協の字であ
らう。協の字は初め衆人の腕力を合する義から出來て居て其の偏にあたる十の字は素と
交り寄せる義から出たものである。然るに同心之和など云ふ意義から轉じた新奇の意
味を現はす場合の起るに至つて、遂に形の相似寄つた協の字を作るに至つたのである。
而も協の字は既に説文に見ゆる故、今から二千年前の俗字であらう。

館の字の俗字。これは舍の字の意義が館の字のそれと幾分相似て居るところからと、又

その食偏と舍の字との形の上の類似からとて遂に此の新しい類推文字を見るに至つたのである。

嘗の字。

嘗の字の俗字。これは嘗めると云ふ動作が甘いと云ふ味覺と意義の上で混じ合ひ且つ甘と旨とが形の上で類似せるところから茲に生み出された一種の類推文字である。

逃の字。

逃の字の俗字。

恥の字。

恥の字の俗字。

隋の字。

走のない隨の字。これは云ふまでもなく國名の文字である。隋唐の隋に走のないのは隋朝の長久ならんことを祈りて之を省かしめたのであると云ひ傳へられて居る。果していかか。或は別に墮の字などと形の上の關係でも存しては居なかつたか。

三 音の上の類推作用

音の上に行はれて居る類推作用は支那文字をして其の性質の根本たる義字の特色を去つて表音文字の傾向を持たしめて居る。支那に於ける表音文字の傾向は第一、字形の如何を問はず、第二、意義の如何を問はず、時としては音そのものの精密なる一致如何をさへ問はないことがある。殊にその歴史的 (historical or traditional) の音譯に見られる假借の文字の音に至つては随分甚しい不一致を見るこ

とがある。まかしこれは外國音を寫す場合に見る現象であつて獨り支那の文字に限つて然るわけではない。若しそれ支那内部に於ける字音相互の轉用類推の現象などに至つては頗る精密なるものがあることを發見するのである。

例へば最近に於いてよく見る文字であるが次の如きものがある。

浜の字。

濱の字の俗字。濱の音符 (phonetical symbol) は賓であつて其の音は pin である。然るに兵の字の音は兵船 ping chuan などに於ける ping の音であつて之は音聲學上賓の音 pin と頗る相近い。其れ故濱の字の代りに寧ろ字劃の容易な浜の字が出来た譯である。

釈の字。

横浜と書く時の此の俗字は即ちこれである。尙鬢附の鬢にも下部を兵に書くことがある。釋の字の俗字でその旁を尺と改めたものである。之も以前のと同様の理屈に依つて作られたものである。然るにの釋字の旁が尺と變へられるに依り、之と音は違つても形の方で相似た澤譯などの旁をも等しく尺の字に類推して換へることがある。孰れも輕便だからである。

讚の字。

讚の字の俗字。これは讚の字の音が贊と同様であり、旁た其の旁が贊と相似た形を有する所から普通に多く見るところの贊の字を以つて之に置き換へたものである。蓋し贊は云ふ迄もなく「贊」の略字である。

茲に用ひられた兵、尺及び贊の字は其の成り立ちに派つて攷へる時は無論義字で且つ象形たるに相違ない。まかし音の類推からそれぞれ賓、翠、贊に代用せられたと云ふ迄で役目 (function) の方面から言へば少しも義字象形たる色は帯びて居ないのである。寧ろこれは綴音文字に匹敵す可き官能を此の場合に有して居るものと云はなければならぬ。それ故音韻上の類推作用は支那文字をして少くともその半面に於いて表音的文字たらしめて居るとも見られるのである。

結 論

上述の如く支那文字は形の上、意義の上、音の上の三方面から絶えず影響を受け其の間心理作用に基く類推文字を續々拵へ出だして殆んど停止する所を知らない。其の類推文字は自然淘汰の篩にかけられて中には遂に一箇の文字となり得ないで滅び棄てられたものもあるが、併し又一方に於いては嘗て誤謬視せられて居たものでも、次第に一箇の生命ある俗字となることを得て、更に進んでは全くの本文字として感ぜられ遂には之より又更に多くの新類推文字を作り出すものもあつて、絶えず之が循環せられて居ることは争はれぬ。

文字の發達上に類推作用の貢獻するところは斯くの如く大いなるものである。まかし文字の發達は常に必しも心理作用に基く現象のみに依つて起るのではない。雁が厂となり摩が尸となり、雖が虽と

なり醫が医となるが如く部分的省略 (partial omission) の行はれて發達するものがあり、又圓が囙となり當が当となり、假が仮となり屬が属となる如く因果關係よりも寧ろ簡易な形に向つて進むものもある。或は又書體の上又は運筆の上で難を遮けて易に就く傾向を取つて行くものもある。要すに支那文字の發達の上には省略簡易と云ふ有力な機械的 (mechanical) のプリンシプルがあつて之が一方の心理的 (psychological) の作用と兩輪相並んで文字發達の一大潮流を支配する大原動力となつて居るやうに思はれる。時には又一度全く死字となつて居たものが再び復活して現れて來て之に加はるやうなこともある。兎に角文字は世と共に發達し増加して其の間に自ら優勝劣敗の頗る激烈に行はれて居ることが見られるのである。

かくの如き徑路を取つて進んで來た支那文字は然らば大勢の上で如何なる發達の迹を吾人に殘して居るであらうか。最後に歴代の辭典に網羅せられたる字數の一斑を擧げて文字増加の趨勢を示して置かう。固より此れには死字が算入してあるからその積りで觀ていただきたい。

後漢 許慎の説文

九三五三

魏 李登の聲類

一、一五二〇

晉 呂忱の字林

一、二八二四

後魏 楊承慶の字統

一、三七三四

梁	顧野王之玉篇	二、二七二六
唐	廣韻	二、六一九四
宋	集韻	五、三五二五
明	字彙附補彙	四、五五五〇
清	康熙字典附遺備考	五、七二一六

附、西人の編纂した支那語の字引でかの老大なる Giles, H. A. Chinese English Dictionary. 4 to., Shanghai, 1892. にはその字數一萬三千八百四十八を含んで居るものと算せられる。

以上類推文字の研究は文字學上の方面から云つても、固より興味のあることであるが、今日の時勢の必要上、之を實用的の方面から觀て、之が調査を更に擴張し、少くとも現行漢字の四千乃至五千字を逐一類推作用の方面から細大漏さず分類すること。此れは頗る時宜を得た調査であると考え。漢字が實用上將來長く行はれて行く限りは、常にその裏面に類推の作用の伴はないで進みゆくことはないと思ふ。否將來は今迄よりも一層烈しく旺盛を極むる氣運に向ふであらうと思ふ。されば漢字の將來の爲め、今のうちに類推變化の徑路を明かにす可き調査の起ることは贅言を俟たぬことである。嘗に學術上の爲めのみでなく、又又教育上のみの爲めでもない。實に東洋漢字の新調査はかゝる卑近なる實際問題からも這入り得る餘地の大いにあることを指摘しておくわけである。

第六章 漢字新研究の一端

一 漢字は如何にして觀察すべきか

漢字は如何にして觀察す可きか、と云ふ漢字觀察法上の問題は惟ふに是れ從來の所謂漢字問題から、更に一步進めたものであつて、漢字研究の新舞臺は茲に始めて其の序幕を啓くわけである。所謂漢字問題なるものに對して、假令これ迄如何なる意見を抱いて居たものも、漢字の研究に就いては俱々に、今少しく深く觀察を廻らして見る必要がありはしないか。近來此の漢字問題はかの國定教科書に於ける、漢字數の世論に徴して見てもわかる如く、専ら『増加説』の方に翕然歸著して來た。更に實際社會の大勢上から觀ても、日に益漢字の需用は迫られて來て今では中々動かすことの出來ない鞏固な地位を取つて居るのである。

今日漢字の位置は既にかくの如き實狀である。其れ故重ねて茲に漢字の必要を立論するは明かに蛇足である。寧ろ是れからは將來の問題に移つて漢字そのものの本體に就いて及びその取り扱ひ方に就いて切實なる攻究を遂げること勉むべきである。自分が研究の立脚地も實は此の點にあるのである。否、此れは社會が目下の緊急問題として吾人に提供して居る重大なる問題である。然らば此の問題中

に含まれて居る事項は如何なる件々であるかと云ふに、

(一) 漢字が將來社會の趨勢に適合して行く爲めには、豫め之に向つて如何なる方針が必要であるかとの問題。

(二) 現在用ひられて居る漢字は之を如何に整理せられ得可きか、との此れが整理法上の問題。

(三) 此れが教授上の方面は如何に處置す可きか、如何なる根本的改良を之に施さなければならぬかとの教育上の問題。

(四) 漢字の科學的研究は如何になすべきかその學術上の問題。

今後の漢字問題は少くとも以上の如き件々に迄接觸しなければ、眞の解決を告げたものと云ひ難いのである。而して此等は、孰れも將來に重大なる關係を有して居る問題であつて、更に尙此れ等の諸問題を取り纏めて考ふる時は、(四)の學術的問題に對して、(一)(二)(三)は孰れも皆實際問題として總括して考へることが出来る。従つて學理問題と實際問題とは、時として勢ひ其の間に立脚地の違ひの生ず可きことあるは云ふを俟たない。又攻究上より云つても是れ迄少しも手が著けられなかつた漢字の研究の難事業であることは無論であるが、さりとて實際の側の研究とても決して難事業でないこと云へない。寧ろ反つて錯雜した實施上の困難は此の方に多い。それ故つまり今後の漢字問題は、學理實際の兩輪相俟つて互に補ひ合つて行く必要が十分あるのである。若し夫れ此れ等兩面からの攻究にして、幾分

の効果を擧げ得る曉には、漢字の教授法の如きも自ら容易くなる譯である。従つて又、これ迄久しく論争のあつた字數節減問題なども自ら枝葉の問題として、見られるに至る譯である。又兒童教育の方面に於いても、多數の論者が心配して居るやうな腦力妨止の弊害なども自ら薄らいで行く譯になるのであると思はれる。兒童の能力の發展の有様は東西の心理學者の説に據つて見ても、そんなに楯ではかつたやうな切り詰めたものでは勿論ないのであるから。

従來漢字の教授問題と云へば常におきまりの如く單に小兒の方の心配ばかりをして居た。これは確かに従來に於ける弊である。苟も此れが教授上の問題である以上は小兒の側を斟酌する必要があると共に、必ず當局者自分自らの立ち場から漢字そのものに就いて科學的の智識を積む丈けの覺悟が必要であるまいか。當局者自ら漢字に就いて宛然關せず焉の態度を取り、而して獨り被教授者の爲めにとて手前勝手の斟酌をする如きは、今後の漢字問題の眞意を無視したものであると云はなければならぬ。要は教授てふ漢字實際問題の樞機を握れる當局者に於いて、否、博き一般の社會に於いて、今少しく漢字そのものの攻究が重要視せられるに至らなければならぬと思ふ。然るに前にも云ふ通り、漢字そのものの攻究は頗る困難な事業で、容易に、此れが科學的の研鑽を成し遂げるなど云ふことは殆んど今日出来ない事である。けれども少くとも今日のところでは、次ぎに云ふ位のことには認められるであらうかと思はれる。

二 支那文字の構成要素

總べて支那の文字には、其の特色として形と音と意義の三要素の備はつて居ないものはない。漢字にして若し日本の假名、朝鮮の諺文(한글)、歐羅巴の letter (a,b,c) の如き表音的符牒たるに過ぎないものであるならば、漢字は即ち形と音の二要素だけで、出来て居る譯のものである。けれども、元來漢字なるものは、かゝる表音の符牒でないふとは勿論、否更に尙一步を進めた性質を別に有して居る。即ち、形、音二要素の外に尙意義の一要素の加はつたものであつて、嚴密なる意味に於いて文字と云ふ資格を既に完全に具備して居るものである。これ漢字が假名、諺文、letter (a,b,c) などと根本的性質を別にして居る點であつて、強ひて同類を西洋に求むるならば英語に云ふ character (文字) なる語が最も近く之に類似して居るものと思はれる。

かやうに漢語の「字」と英語の letter (a,b,c) とは相異つて居る。それ故支那の漢字は宛かも西洋の a,b,c で綴り上げられた單語の文字 (character) になりと較べらる可きものである。其の綴られた文字がそれごとく其の意味を有することは、漢字の偏旁から成り立つて、其の間に意味を持つて居ると變りはない。つまり共に孰れもその文字たる點に於いては、相違はないのである。併しその文字としての趣きから云ふ時は、少なからぬ相違、否、反對の性質がある。即ち歐洲文字は一目して其の音

の方こそわかり易かれ、意義の方は表面にはわかつて居ない。之に反して支那の文字は、歐洲文字のやうには音は見えて居ないが、意義の方は大抵よくわかり易く仕組まれて居る。少くとも原意を汲むに足りる丈けの手懸りは、大抵形の上に残つて居る。漢字は此の點で歐洲文字と反對の性質を有し、普通又漢字が義字と目せられて居るのも、全く此の爲めなのである。加之從來漢字の特質と云へば、單に必ず此の意義の點のみが眼目とせられて居つた。さうして、他に尙如何なる着眼點のあるかは更らに致へられて居なかつたやうに思はれる。

漢字が義字と呼ばれ、又その實際義字であることに就いては、之に疑問を挟む可き餘地はない。けれども、翻つて考ふるに、漢字の義字てふことは、單に漢字要素中意義の一要素を特に取り出して指したまでに過ぎない。少くとも僅かの象形要素に就いて、云つたものに過ぎないのである。即ち山、川、吉の如き、其他江、貢、功、鴻の如き此れ等は觀方によりてその一として義字たらざるものはない。けれども併し、江貢功鴻が何故に共に同一の音を有するか、更に虹、紅、項、紅、肛、恐、鞏、空の如き尙多くの類例を拉し來つても等しく其の音の一樣にコー、支那原音で kung の音の出で居るのはなぜ故か。云はずして知る、總べてその工なる表音符號に依れる故なることを。尙、山に對しては疇、仙、汕、仙などがあり、川に對しては順、巡、馴、綯などがあり、又、吉に對しては桔、詰、結鬚などの文字が出来て居る。而かもその字音は、明かにそれぞれ、山、川、吉の字の音に依つて出で居る。一

一般の漢字を總べてかくの如き方面から觀察して來る時は、漢字の構成が一般に唯義を表はすことのみを以て全特質として居るのではなく、他の半面に於いて、大いに又、表音的性質をも含んで居ると云ふことが十分察せらるのである。畢竟するに一般の漢字の義字たることを認むるならば、又之と同時に、其の音字たることも是認して考へなければならぬのである。けれどもこれには別に相の字、穿の字、男の字などの如き少數の例外のあることは許容せられなければならぬ。

漢字は之を音字として認め得とは云つても、素とより程度上の云ひかたであつて、歐羅巴などの音字と同一視することは勿論許されない。如何に山、川、吉、工などが表音の要素であると云つても、それは唯文字構成要素の役目の上から云ふまでであつて、歐洲の a, b, c, などと混同することは素とより出來ないのである。何となれば歐洲の a, b, c, は單音を示すものであるが、支那の表音符號は普通複合音なる綴音を表はすものである。のみならず、此の符號が音符であると同時に、又義字たる性質を脱却して居ないのであるから。それ故今其の複合音を現はす方面だけを取つて攻へるならば、宛かも日本のイ、ロ、ハ、(い、ろ、は)の如き假名に比べて見ることが出来るのである。支那の文字は殆んど總べて綴音を現はすことを以つて普通として居るから、音韻上、漢字は總べて一種の綴音字なりと云ひ得ないでもない。而してその漢字の數は如何に多くあらうとも、その含む表音の符號を標準に、分類しまとめて見る時は、案外少數の部類に歸著せしめることが出来るのである。

音韻の方面から漢字を観る時はかやうに漢字は大抵その音符に依つて其の音の出で居ることが見られる。けれども往々にして、其の音符は字形の上に現はれて居ないことがある。さういふ場合には、楷書の字形にのみ執して居ないで、更に古體の字形に遡つて觀察をする必要がある。するとよく其の由つて來た音の出處を發見することが出来るのである。その音の出處を發見する爲めには解剖に解剖を重ねて、極限の處まで分解しなければならぬものもあり、一見又直ちに指摘することの出来るもの例へば上述の功、貢、鴻の如きものもある。兎に角音符の在りかは普通は目あてが附き易く出來て居り、それに由つて其の字音が示されて居るのである。然るに時としては同一の音符を有して居ながら、決して同一の音で呼ばれて居ないことがある。殊に又随分甚しい差のあるものがあつて、殆んどその音符を同する文字なるか、否かすらを疑はしめて居る程のものもある。

羊の音、ヨ一yoに對して詳のシ一shio 羌のキ一kyoの如き音があり、各の音カク kakに對して、洛、烙の音ラク一rakと云ふ現象を見る。併し之を以つて、直ちに詳、羌、洛、烙などが音字でないかの如く考へるのは、皮相の見解である。此れ等は孰れも、別に音聲學上の確かな理由に基づいて、今日かやうな別の音で現れて居るのに過ぎないのであるから。それ故に漢字は假令其の音符が直ぐ見えて居ないからとか、又其の音符の示す音の通りに讀まれて居ないからと云つて、之が音字たる性質を没却し去ることは速断と云ふの外ない。

漢字はかやうに音字たる性質を有して居る。總べての漢字が、悉く残らず、音字ばかりであるとは、無論、云へないけれども、その十中八九迄は此の種のものに屬して居る。従つて漢字は大抵、音、義兩方面からその形が構成せられて居るものと見做すことが出来る。されば漢字の觀察には出來得る限り、その字劃をその構成要素に分解して其の音、其の意義を明確に自覺に入れることが必要である。尙左に今少しく字劃の複雑なるものに就いて例證を擧げて見るならば、

觀、灌、權などの字。此れ等の漢字がそれ〴〵其の特有とする見、シ、木の偏旁は云ふまでもなく其の意義の符牒であるが、其の間に共通して居る輩は即ち音符である。クワン kwān なる音の存するも全く此の音符が物を云つて居るからである。更にその音符の輩が何故にクワン kwān の音を有するかと探つて見るに、更に之が同なる音符を有するからである。かくして此の類に屬する音字は、觀灌權の外に、尙鐘、驩、權、灌、勸、歡。類などたくさん類音文字が發達して出來て居る。

以上は漢字構成の三要素中、從來殆んど顧みられて居なかつた音符に就いて特に述べたのである。其他漢字が尙意義及び形を要素として居ることは、明々白々なことであるから茲にことごとく述べて置く。

三字音の變化

漢字を觀察するには、言語の方面から、取扱つて行くのが最も便利な方法である。それには、漢字の音を第一に注意しなければ無論いけない。然るに漢字には少數の例外こそあれ既に述べて來つた如く、音の要素が存在して居る。此れが此の側の研究に向つて、何よりの手掛りを與へて居る。又此の爲めに音の方面から、漢字を纏め得る見込みも立てられるのである。

けれど漢字には異字同音のものが少なからずあり、又同字異音のものも屢見出す。異字同音のものは、其の意義並びに字音の類同を標準にとりて、蒐集分類する時は、自ら言語上の一致、關係を推測することが出来る。之に反して、同一の文字が其の音を異にして現はれて居る場合には、之に依つて言語上の分岐の一斑を知ることが出来るのである。殊に其の異音が同一の音符に就いて現れて居る場合には、多く其の音符が有する音變化の有様を窺ふことが出来る。無論時として意義の爲めに音韻變化を來たして居ることもあるが、それは比較的稀に見る現象で、大抵は音韻變化の爲めに字音が移り變じて居るのである。

既に述べた『輩』に就いて觀ても一、クワン kwān, 二、ケン ken, 三、ゴン gon, の三種の同類音があり。『山』に就いてはサン san, セン sen の二種類の音があると云ふ風に少しづつ音が轉化して行

く。尙一箇の文字となれるものに就いて觀ても、
 【言論自由】に於ける『言』の音ゲン Gen
 【言語同斷】に於ける『言』の音イン gon
 などとわかる通り一字に一音とは致へず、出來得る限り其の起り得る場合を併せ考ふるの必要があるのである。それ故例へば我日本の音で、

【良】の音符に對しては	カン kan 艱	ガン gan 眼	ゲン gen 限眼
【音】の音符に對しては	ア an 闇	イ in 音	オン on 音
【失】の音符に對しては	テ tet 迭	チ chit 軼	

シッ shit 失
 イッ yit 佚

があり。其の他『者』の音符に對しては普通シャ sha の音であつて、奢、闇は即ち此の同音であるが、著、諸、諸では『者』がショ sho の音となり。都、觀、屠、賭、堵ではト ㄊ として現はれ、緒、猪、儲、著、踏などではチョ cho の音で讀まれ着の字ではチャク (chak) とよまれて居る。かやうに同一の音符に三種乃至四種の音が相並んで現はれ、此の爲めに字音の現象は益複雑を重ねる。現象は複雑になり箇々の場合は繁多に分れて居ても、併し其の變化のうちに、争ふことの出來ない一定の順序があり、規矩があつて濫りにその範圍以外に出ることは少ない。これは漢字の音が、素と言語上の音韻變化の理に基づいて、變じ來たつた所以である。然らばその變化の順序は如何と云ふに、大體に於いて、きつい音から柔らかなる音（西洋の音聲學に云ふ）の方へと進み轉じて居るのである。『失』の音符に對するテッ tet チッ chit シッ shit イッ yit となる順序の如き、『者』がト ㄊ チョ cho シ a sho となるが如きその一例である。これは音のうち consonant に就いて云つのである。母音 vowel の方に就いては聞いた音の方から、漸次狭まる音に移る様であるが、併しこれは一般に必ず然りと斷言は出來ない。支那の本土で、後世のイ又は不明瞭なエの音が、大抵は古代にア又はオの音で現れて居るところから、かやうに憶測せられるのである。けれども少くとも『音』の音イン ㄣ がア

ン an オン on よりも後の音であり、『眼』に於ける良の音 gan ゲン gen が『銀』に於けるギン gin 今の支那音イン yin よりも古い音であることは十分考へられる。尙外の例で『苔』に於ける台の音タイ tai は『答』に於けるチ chi, 怡に於けるイ yi の音を發する台よりも素との古い音であることも察するに難くない。

かやうに觀て來ると同じ音符を有する漢字が別の音を發して居るのは、畢竟、其の音符の音韻變化と云ふことに歸著せられる。俗に字音の變化は漢音、吳音、唐音などの名稱で區別して居るけれども、それは科學的の區別法でない。寧ろ矢張り音聲學上の理由で自然の音韻轉化の一現象と見て置く可きものである。兎もかく例へば『良』の音をコン kon 一つとせず、同時に、カン kan ガン gan ゲン gen キン gin となり得ることを、豫め含み置くとせんか。然る時は後に艱、眼、限、銀の音の異なるのも容易にさとられる譯である。谷のゴク kok に對して俗のシヨク shok があり、欲のヨク yok があり、又區のク ku に對して樞のスー su 歐のユウ yu がある、孰れも皆偶然の現象とは云へない。若し以上述べたやうな字音變化の現象が、單に音符の上の音韻轉化に過ぎないものとするならば、扱その音符によつて、幾何の同類文字が産み出されて居るか。今その一斑を窺ふ爲めに左に二三の場合を擧げよう。

【圭】の音符に依れる文字 (古音 kwai)

跬、街、卦、剗、桂、奎、奎、佳、涯、崖、閏、掛、野、娃、掛、畦、鞋、蛙、窪、畦、隸
 …kwai, kai, gai, ka, kei, wa, a, wi,

【尢】の音符に依れる文字 (古音 chat)

殺、刺、怵、述、術……………sat, sut, set,

【爻】の音符に依れる文字 (古音 chan)

踐、殘、賤、餞、棧、賤、淺、錢、箋、藎……………san, shen, sa,

【尙】の音符に依れる文字 (古音 tang)

棠、堂、黨、當、儻、鎗……………tō, dō,
 嘗、廠、常、賞、償、掌、裳……………shō, zyō,

【干】の音符に依れる文字 (古音 kan)

肝、刊、竿、旱、岸、汗、汗、奸、軒、稗……………kan, gan, ken,

と云ふ風に觀察して行くことが出来る。かやうに音符によつて音の出で居る漢字は之を文字上で諧聲文字一つに又形聲文字とも云ふのである。

今日我が國で普通に書かれ、又讀まれて居る漢字六千字のうちで、此の諧聲文字は如何なを割合を占めて居るかと云ふに自分が此の稿を舐するまでに集め得たものは大凡五千字と算せられる。固より

此れは普通の文字に就いて云ふのである。それ故今後の漢字の研究と云へば、殆んど此の諧聲文字の研究と云つても過言であるまいと思はれる。漢字教授の任にあたるもの、又社會上から漢字を論ずるもの、その他漢字の整理に就いて方法を講ぜんとするものも、等しく皆此の諧聲文字に就いて、ひと先づ觀察をこらすことが必要である。

四 漢字の音符

現今、普通に行はれて居る漢字は、自分の計算では多く見積つて四千乃至五千である。然るに其の九部通り迄は、表音の符號を、其の構成要素中に含んで居る所謂諧聲文字である。漢字が此の諧聲文字であると、否とに依つては、其の字音の覚え方に、餘程の難易の差があるのである。字音教授の方面から觀て、若し凡ての漢字が、此の諧聲の方法で、律して行くことが出来るならば（實際は全體を通じては居ない話であるが）、さぞ、字音の問題などは、容易なことであるであらうと思はれる位である。即ち漢字について、今日やかましい問題の一つとなれる主點は、其の音の點に在るのであるが例へば、

- 一、想、箱、湘、廂、霜、孀の一群の漢字に對して、此れ等が何故にサウ（ツ）の音を發するか。
- 二、俊、峻、授、梭、竣、竣、遂、駿、酸などの多くの漢字が何故シユン又はサンの音を有するか。

三、帳、帳、帳、帳、帳、帳、帳がなぜチャウ（原音 chang）の音を取れるか。

四、奮、奮、潛、蠶にそれぞれ、セン、又はサンの音の共通して居る理由は如何。

などの如き問ひに向つて、直ちに其の譯を答へることが出来る爲めには、如何なることが先づ必要であるかと云へば云ふまでもなく、唯、單に、相、麥、長、既などの音符の音を豫め知つて置くと云ふことに在るのである。

然るに、其れ等の文字の音の出で居る根源たる音符、例へば、相の字の如きものが、何故にサウ（ツ）（原音は sang）で相模の國名に、サガ sang として應用せられて居る）の音を取つて居るのであるかと云ふ、一層深い問題になると、最早や文字の上丈けの觀察では、説きにくいこととなる。此れには、即ち深く言語の方面に迄派つて、觀察しなければならぬことになる。まかし、爰には、言語の方面に迄深く立ち入ることは、暫く措いて、字面の上丈けで云ふと、一體、相の字をサウと讀むとは云つても、全く此れがサウの音の出でさうな音符を含んで居ないのであるから、其のサウと云ふ音の、出どころがわからないと云ふことになる。即ち偏、旁共に、木は nok 目も nok であつて、サウの音とは何等の關係もない。關係のない文字の音をば、一々、それと機械的に覺えて行くことは、字音の上の記憶に聯想がなくて全く、断片的であつて、偶然の現象としか見えないから、或は厄介であるかも知れぬ。併し、實際、此の種のもものが、少なからず現に普通の漢字中に、存して行はれて居る

のである。従来、

- 一、象形文字
- 二、指事文字
- 三、會意文字

と稱して居たものは、皆此の類に屬するものである。尤も、その第三のものには、往々にして、例外を含んで居ることもあるが、概して三者孰れも其の字の音符なるものは、大抵は含んで居ないのが原則である。依つて自分は其の音符の存否如何の標準から、漢字の全體を二大別して、便宜上、

- 一、諧聲文字、
- 二、非諧聲文字、

とすることが出来ると思ふ。その諧聲文字の例については既に屢述べた通りのものであるが、非諧聲文字の方の例に就いて、左に少しく其の普通のを列挙して見る。即ち、

非諧聲文字

目、手、足、木、艸、舟、車、矢、弓、牛、馬、鹿、象、魚、虫、凸、凹、香、相、祝、苗、若、莫、彛、吠、連、退、弄、武、信、鳴、利、旅、穿、塵、屋、

等である。併し、此れ等の音符を有しない文字は、漢字の全總數の上から觀て、極めて少數なのであるから、假令、此れ等の音字を覺えることが、機械的で、厄介であるとしても、大なる重荷にはなる

まいと思はれる。それとも他に言語上などからでも、よき方法が立てば、無論、機械的によらずして、進んで行くことが出来る譯である。

今日の漢字は、かやうに韻の方面から二種類に別けて考へられる。而して直接その音符に依つて、取扱ふことの出来る諧聲文字の方とても、必しも音符の有する現音どほり、總べてを一律に、類推して行くとは、出来ないものである。この事は既に字音變化に就て述べた處で、大要を示して置いた通りである。實に、諧聲文字は其の數に於いて、全漢字を代表し得る程の有勢なものである。従つて、其の内部も、頗る複雑を極めて居て、音聲學上の知識なしに、一寸瞥見した位では、容易に其の音現象中に、秩序系統のあることがわからない。其の同一の音符を有することの明かなものに於いてさへも、其の字の音そのものは、今では明かに別の音となつて居るものが多い。爰に別の音とは、程度上の云ひ方で、如何様にも解釋がつくが先づ普通耳に誰れでも、別の異音として聞える音と云ふ義である。科學上の觀方から、例へば音聲學などの立脚地から云つて、決して珍とするに足りない最も普通の音韻變化であつても、爰では別の音に聞える以上は、別音として呼ぶのである。例へば、音の字、が、オン、インの音であるにも拘らず、闇、暗の時にアンの音になれる場合の如きは、即ち別音の一例である。又山の音はサンであるに、疝、仙、汕、柚、訕などに於いて、孰れも、凡べて、センの音となるものも、是れ亦別音たる一例である。此れ等は、音聲學と云ふ學術上の眼から見れば、互の間に連

絡があつて、全然別音として見る程のものでないかも知れぬが、時としては、同種の諧聲文字であつて、而かも全然性質のちがつた音を、互に有して居るやうなものもあることがある。例へば、各の字音は、云ふまでもなく、カクの音で、閣、格、骼、客などに明かにその音符の音が現れて居る。然るに、各の音符について、洛、烙、略などの音ラクを見るに至つては、單に實際上のみならず、音聲學の上から見ても、全く別音として取扱はなければならぬのである。それ故かかる例の如きは、爰に、全然別音として考へるのである。併し、幸にも此の類のものはあまり多くはない。普通一般のものはいし別音を取つて、分れては居ても、それが或る一定の範圍外に遠く出るやうなことはないのである。これが、字音變化のきまりである。

五 漢字音の歴史的觀察

諧聲文字の音韻變化の現象は、一定の規矩を脱しないとは云ふものの、其の音符に對して、今日變化した音形式を取つて居ることは、事實であり、又實際少なからず、其れが見出される。此れは、他に或る種々の理由の存するものがあつて、其れに依つて支配せられて居るのであるが、其れが爲め、字音現象は、今日非常な變體を呈するに至つた。而して其の今日吾人の見る音變化は、一朝一夕の結果ではなく、其の由來する時代が極めて古いものと思はれる。今日の言葉に於いても、音の變化の著

しい現象のあるのと同じく、古代に於いても、早くから此れが行はれて居たことは察するに難くない。かやうにして古今の時代を通じて、音の變化のあつたことを系統的にしらべて觀るならば、字音の歴史的變遷と沿革の迹を、明かにすることが出来るのである。

字音の歴史的沿革を研究するなどは、漢字の應用的方面には、直接の關係はないかも知れぬ。けれども吾人が今日昔ながらの字音としてのみ考へて居たものが、必ずしも、古代に於いて、其の通りの音で、呼ばれて居なかつたと云ふやうなものが随分ある。今その證據に二三の例を左に擧げて見よう。

一、路の古音ラク。各の字が、カクの外に、ラクの音を有することは、洛の音ラクを見れば直ちにわかるが、其のラクの音の系統を引いたものに路の音ロがある。支那原音で云へば、*lak*に對して *lo* の音が對立して居るわけである。此のラクと、ロとは今日でこそ別音であるが、古代ではさうでなかつたやうに思はれる。と云ふのは、今から丁度二千年程以前、支那の前漢の時代には當時ラク *lak* の音で讀まれて居たらしい形迹がある。今その傍證の一つとして、當時外國の言葉を、支那で音譯したものを擧げて見ると、前漢書に、

徑路 *king-lak—kyngyrak* (匈奴語、大刀の義)……………がある。今も、東トルキスタン

(Turkistan) 地方に、*qinghrak* と云つて、刀のことを呼んで居ると云ふことである。前漢書にある此の音譯に於いて、果して、路がその原語の *lak* をうつして居るものであるならば、路は當時 *lak* の

音であつて、即ち洛、烙、略などと同じく k の入聲音であつたことがわかるのである。依つて、今日の *lo* 路の音は、嘗つて、*lak* の音を有して居たものと推定することが可能である。

二、冒の古音 *pak*。冒なる字は、今日冒頭の冒、即ち、*pa*ウの音であつて、其の諧聲文字としては、幅の字の *pa*ウ、玳瑁の瑁の字に即ち *mai* の音で知られて居る。併し冒の字の構造は、口の中に二があつて、*pa*となり、更に其の下に、目の字の音符があつて、冒の字となり、其音は、明に目の音 *pak*, *mok* の如き、入聲音でなければならぬ筈である。然るに今日は之を *po*ウと讀んで居る。けれども此れは古音に叶はない。今から二千年以前の前漢では之を *duk* (或は *duk* か) の音で、讀まれて居たらしい形迹が窺はれるのである。即ち匈奴の、冒頓單于と云ふ名稱に於いて、

冒頓 *Buk-tun* —— *Baghatur* (匈奴語) …………… 史記、

がある。此の冒が果して真に其の *Bagh* の音をうつしたものであるならば、其の冒の音は又其の音符の目の音、*duk*, *mok* にも頗る近いわけである。それ故決して素とは幅の字の傍の冒の音は、*pa*ウでなくて冒は *pak*、*po*クの音であつたであらうと推測せられるのである。

漢代の音をきめるのに、單に此の音譯もの丈で断定することは、無論出来ないけれども、其の傍證の一つに之れを算入すると云ふことは敢て不可ではない。而して其の音は今日の音とはかやうに別

の姿であつたであらうと云ふことを見るのである。併しながら又文字に依つては今のものと、あまり變らない音を漢代に於いて既に有して居たものである。例へば、

三、甌の古音 *o*ウ、これは區を音符にして居る文字の驅、幅、などから見ると、甌も亦クの音であつたらしく思はれ、又幅の字から見ると、或は當時スウの音でありはしなかつたかなどの推測が立てられるのであるけれども、其の實は毘、毘、諷、鷗、なども同様に、*o*ウの音を漢代に有して居たことは次ぎの例から見られるのである。即ち、

甌脫 *Odai* —— *Oduk* (匈奴語、家の義) …………… 史記、

なほ、ウキグル (*Uigur*) 語に、此の語を發見するといふことである。前漢以前に於いて、甌の字に、*ku*、又は *su* の音の存在せしや、否やは、別問題としても、兎も角、史記の出來た當時に甌の音の既に *k* 又は *s* を失つて居たと云ふ點だけは、察するに難くないのである。

以上は一例にしか過ぎぬが漢字の音は、其の過去の歴史時代に於いて、變遷を経て來て居るが普通であると云ふことの一例證である。若し此れ等を一々、今日の北平官話の音に、比較すると、更らに其の懸隔の差の大なることを知るのである。漢字音の觀察には、かやうにして過去の狀態が如何であつたかといふことを調査することが、漢字新研究中の最も必要なる研究部門となつて居るのである。

過去の歴史をしらすしては、到底今日の音の複雑なる現象を解くことは出來ないのである。徳川時

代以來、本居宣長翁の漢字三音考等を始めてとして、種々の字音の研究がまた出たことは出た。韻鏡の研究も出た。併しながら、孰れも漢字音の變遷沿革については、毫も觸れて居ないやうに思はれる。但し、此の側の研究は支那の古文書なるものが、西洋のそれとは全く違つて、素より純粹の表音式にかゝれて居るものではないから、研究上種々の點に大困難を感じるのである。従つて其の効果も亦中々容易に擧りにくいけれども、これは早晩是非開拓せられなければならぬ未開墾地の如きものであると信するのである。

此の困難なる歴史的觀察について、吾人は或る相當の方法に依れば幾分か容易に手を附けることが出来るのである。それは即ち今日、朝鮮や、安南に傳はれる字音、それから支那本國では、福建、廈門、汕頭、廣東あたり一帶南清の地方に残つて居る字音、その他我が臺灣に行はれて居る支那人の側の言語、これなどを参照して研究して見ると隋唐の音は愚か、兩漢、三國時代、當時の音に匹敵する位の古い音をすらも、屢々得られることがある。或は時としてはそれ以前ものとして推すことの出来るものもあるのである。話しが餘りに學術的の専門に這入り過ぎる虞れがあるから、此の方面の一々の例證を擧げることには爰に割愛して置くことにするが、要するに地理上の方面から見、今日それ等の地方の音がわかりにくい支那の古代の字音觀察の上に、頗る結構な光りある手懸りを、與へて居るものであると云ふことを注意して置く。

畢竟、漢字の古音の研究は、單に古代の音を觀てそれ丈けで能事了れりとはせず、古音そのものの調査と同時に、又他方に於いて、地理上からの穿鑿を忽諸にしてはならぬと云ふことと、又、實際、之を忽諸にしては骨が折れるばかりで、非常な損があると云ふことを述べて置くのである。然るに此の兩方面から取り圍んで古音を研究する時は、字音變遷の大勢が如何なる傾向を取つて進んで居るかと云ふこと、其の他微細な音變化のことまでが大抵のところまでわかるのである。

以上は、總べて漢字を音の方面から觀た大體の自分の考である。從來、漢字の觀察には、此の音の方面が輕んぜられて居たやうであるから、自分は今特に此の方面に力を入れて、第一に述べた譯である。併し、漢字の新研究には、音の側ばかりが能事ではない。尙、此の上は形の方面にも觀察を及ぼして、十分根本的に改良の施されるところは施して見なければならぬのである。

六 漢字の形態

漢字は、其の音の方面に於いて、古今の間に少なからぬ變遷の迹がたどられたが、形の方面に於いても、亦決してそれに劣らぬ變遷が認められる。上述の如く今日の音現象を十分に理解する爲めには、その歴史的の觀察が必要であるのと同じやうに、形の方に於いても、亦其の古い時代から、時代を追ひ追うて其の古體が如何に後世のものに變じ來たつたかをしらべなければならぬ。然らざれば、

今日の漢字の形は、單に唯偶然のものとしか見えないことになのである。

漢字の形の方の研究は、音の如き目に見えないものと違つて、紙上で論ずるに、最も便利で且つわかり易く、従つて興味をも引き易い。その研究に於いても、其の材料にして信を置くに足りるものであるならば、音の方よりも、遙かに容易いことであらうと思ふ。左に普通の漢字について、比較的その觀察のたやすいものを、少しく取り出して之が研究を試みて見たいと思ふ。

漢字の形態に就いて、先づ注意すべきことは、其の點、畫、偏、旁の有様である。漢字に就いて、最も多くの誤りをなすのは此の點である。漢字が書く上に繁雜であると非難されて居るのも、此の點である。それ故此の點に關しては十分精密なる觀察を要するのである。

抑も、漢字の點畫を誤ると云ふは、多く他の文字の類推に歸因して居るものであると思ふ。漫然、何等の關係なくして、誤字を書くが如きことは比較的少いのである。而してその他の類推によると云ふことは、例へば次ぎの如き有様のものを云ふのである。

一、髮、拔、跋、などに於ける友は、元來犬の字と、^{ガッ}ノの音符とにより成り立てるものであるが、その結果が友の字に似て居る爲め、其の形の上の類推からして、いつしか、友の字を代用して而かも怪まれない。否一般には反つて此の類推文字の方が世間に多く用ひられるに至つて居る。

二、奇、崎、倚、欹などに於ける奇の字は、素と大の字と可の音符とから成立して居るにも係らず、

立の字に類推されて立と可とを混じた文字が書かれるに至つて居る。既に學校用の習字手本にまでも此の類推文字が這入り込んで居る。併し敢てそれが今日罪になると云ふのではない。

三、彦、顔、などに於ける彦の字、此れも今日では頭が立の字に類推せられて居るが、素とは、文の字を冠りにして居る文字である。併し、今日は、殆んどそんな事は、忘れられやうとして居る。

此れ等は、孰れも、形の上の類推で、進んで行くものの例であるが、更に又音の方面で移つて行くものもある。例へば、

四、變遷の遷の字。遷の字は、畫が煩はしいと云ふ爲めか、センの音さへ現はせば事足りるとのわけでか、屢々千の字を代用して迂と書くことがある。全く音の上の類推である。尙六三頁にも述べたやうに、

五、濱、鬢の賓の字。これは兵の字とビンの音で似て居る爲め、支那では賓のをかくところへその代りに兵の字を書く。

これ等は、音の上の類推であると同時に、又簡略を便とすると云ふ考へにも依つて居ることと思はれる。更に、又、意味の方の類推によれるものもある。例へば

六、喰の字。口に關係あるものは、口偏を必ず附すると云ふ考から、食の字に口偏を添へて馬喰町

の喰の字が出来て居る。

七、辭の字。これは、物を言ふことで宛かも演説の説の字なども、往々演舌と書かれることのあると云ふやうに、辭の字も亦其れの類推から、舌偏に辛の字を書くことがある。従つて又亂の字の如き舌とは全く縁のない文字にでも、舌偏を代用すると云ふことが生じて居る。

八、學校の學の字。學の字がまゝ文の字の下に子の字の書かれて居ることがある。これも、其の意味の上から來た變化であらうと思はれる。かやうに漢字の上に現れた類推作用は、種々の點に窺ふことが出来るが尙漢字の形は類推作用の外に、省略作用にも支配せられて居るのである。此れは舊の字が旧と書かれ、點の字が呉と書かれ、又前じ文字の二字繰り返される時、例へば教育會々場と云ふやうに々の字が用ひられたり、其の他、摩の字が單に尸に書かれ、雁の字が唯の雁垂れ尸に略される如き類で略推察が出来るであらう。要するに漢字の點劃は、これ等類推と、省略の二大作用によつて、絶えず變化しつゝあるのである。又發生、増加をもなしつゝあるのである。されば決して、吾人は此れを以つて誤字なりとはせず、寧ろ社會に適したる社會上の產物として迎へなければならぬのである。證書の證の字を言偏に正の字に書き、人力車の三字を、俚の一字に書いたからと云つても、今日では決してとがめてはならぬ。要は一般の世間から、十分に認められるに至つてさへ居れば、正しい文字同様に取扱つて差支ないのである。

る。

一體、漢字に誤謬があるとか、ないとか云ふことは、比較的の云ひ方であつて正字必しも、素とをたゞせば嚴密に正しい形でないことがある。今日正字と認められて居るもので、古へは俗字とか誤字とか云はれて居たものも随分あるのである。例へば、添の字の如き、素とは天の音符を明につくりの上部に有して居たのであるが、例の字劃の上の類推からして、天の代りに後には、天の字を書くに至つたやうな現象は、いくらでも見出すことが出来る。唯、今日一般の人々がそこ迄、穿鑿して居ないから、始めから正字の如くに心得て居ると云ふに過ぎないのである。吾人は今日の社會に於いて一般通用力を有する俗字は勿論のこと、時としてそれが誤字であつても、尙許容する丈の度量は有して居る。併しながら今日中學程度の學生などが屢々曖昧のうちに混同したやうな漢字を書くことがある。必しも學生とは云はぬ。立派な方にも時とすると此の怪我がある。それ等は全く漢字に對する無頓着不注意から來るのであるから、遠慮なく矯正しなければならぬ。この場合には必しも、許容するの度量は要らない。左にその混同され易いものの一例を擧げておく。

一、律と俳。 上は律徊の律で、下は俳優の俳。

二、彷彿と仿。 上は彷彿（髣髴）の仿。

三、痲と痲。 上は痲醉の痲で、下は痲毒の痲。棘と林との相違。

- 四、滴と滴。 上は水滴の滴で、下は支那河名。其の旁は商賣の商。
- 五、縁と縁。 上は因縁の縁、下は緑色の縁。
- 六、摸と摸。 上は摸寫の摸(摹)で、下は相模の模。
- 七、快と快。 上は快樂の快で、下は快々の快。
- 八、疆と疆。 上は自疆の疆で、下は封疆(境)の疆。
- 九、段と段。 上は此段の段で、段は假字の旁。
- 十、卿と卿。 上は公卿の卿で、下は郷里の郷。
- 十一、協と脇。 上は協會の協(協でなく)で、下は兩脇の脇(脇でない)。
- 十二、楫と楫。 上は舟楫の楫で、下は揖讓の揖。
- 十三、接と接。 上は接木の接で、下は應接の接。
- 十四、浙と浙。 上は浙米の浙で、下は浙江の浙。
- 十五、刺と刺。 上は名刺の刺で、下は戻の義。
- 十六、灸と灸。 上は灸點の灸で、下は噲灸の灸。
- 十七、賣と賣。 上は買賣の賣で、下は讀贖の旁の賣。
- 十八、犯と己。 犯、範は巳に从ひ、己に从はず。

十九、幼と幻。 上は幼稚の幼で、下は幻燈の幻。

二十、軌と軌。 上は軌轢の軌で、下は軌道の軌。

其の他、松の字の旁の公が、船沿などの昏に混同して、松の形が出来、丁年の丁の字を含んで居る可き筈の成の字が行書體の如く成と書かれる事がある。以上二十有餘のものは、總べて誤まられ易い例であるが、これらは普通のものであるから誤りなく明確に書かれたいものである。その誤りを正字同様に許容するのは、今日は未だ少し早やすぎるやうに思はれる。各自に出来る丈けの注意をするところが先づ必要である。

漢字の形態に就いて次ぎに攻究す可き點は、其の歴史的の變遷の點である。即ち今日の楷書體の漢字が楷書體として、落ち著くまでに至つた前の書體と、今のものとの關係が如何にあつたかと云ふ點である。左に之について少しく述べよう。

七 字體の變遷

支那文字の字體を、歴史的に辿つて、其の起源を調べることは、頗る興味を喚起することゝ漢字の眞の妙味は、此のあたりに潛んで居るやうに思はれる。併し、茲には其の歴史全體にわたつて觀察をすることは困難であるから、唯僅かの適例によつて、其の繪文字と、楷書との關係の一斑を示す丈け

に留め置く。

一、衣の字。衣の字の形は、支那古代の衣服の體裁を象つたもので、其の大略は次ぎの如きものである。



衣の字 鐘鼎古文



衣の字の繪文字原形。これには尙別の様式の考があるが茲に略する。

二、表の字。表の字は素と衣の字のうちに毛の字が含まれて居た文字である。毛ごろもの義でもあつたか。即ち、



表の字の繪文字

此の外、衣の象形を有する文字は襄袞哀袞など澤山ある。

三、鹿の字と鼠の字。共に其の象形であることは、その繪でわかる。

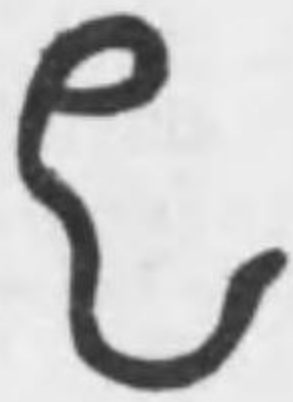


鹿の字の繪文字



鼠の字の繪文字 (古見文)

四、巳の字と貝の字。巳の字が蟲の形であり貝の字が、貝殻の形であることは疑はれぬ。説文には巳は四月陽氣出象云々とある。



巳の字の繪文字



貝の字の繪文字

五、矢の字と射の字。射の字は矢を弓につがへて手に執る形。



矢の字の繪文字



射の字の繪文字

六、戸の字と門の字。門は戸を左右から向け合した形。



戸の象形



門の象形

七、眉の字と車の字。共に素とは、横なりに書かれて居たものが、後に縦書きになつたのである。即ち、



眉の象形



車の象形

以つて、其の今日の漢字の原形を察知することが出来る。無論此の研究には歴史的材料として確實な古器、例へば支那上代に實際作られた鐘とか鼎とか、其の他祭祀用の鑄物の如き古銅器に残つて居る字形、その他石刻に見られる文字などから考證して來なければならぬのである。爰には唯その標本的なものを挙げたまでである。ホンの雛形たるに過ぎぬのである。此れに依つて見ると、以上の外尙頗る面白い例を見出すことがある。例へば、



米の字の原形



禾の字の原形

一は即ち、禾稻を束ねた、たばの象形で、米のことを現はし、二は禾稻の實りて、穂の垂れさがれるを象つたものであるらしい。

かくの如き原形の象形繪文字が、上代に行れて居たことは事實であるが、其れが發達して今日の如き文字となつたのは突然になつたのではない。其の中間的狀態として色々の書體を經過したのである。

其のうち、最も著しい書體を篆書體と云ふ。其の篆書が今の楷書となる間にも、亦種々の小變化があり、又例の類推、混同、省略などの作用が頻りに行はれたものらしい。其の形迹は多くの文字上に窺はれるのである。

例へば省略作用のもので云へば、星の字、及び集の字。星は素と三個の日（星）と生の字から出來て居り、集の字も同様に三個の隹（集まれる小鳥の義）が木の上に居る意味で出來て居ることは次ぎの如くである。即ち、



星の字の篆書



集の字の篆書

然るに楷書では其の頭が一部分省かれて、共に唯一箇宛の名残りを留めて居る形になつたのである。稀には楷書が篆書を経ずして古文から直接に來る事もある。

次ぎには形の混同せられた方の例を舉げて見ると、例へば冠りに於いて奉、奏、春、泰、秦などは楷書のものには、少しも相違の點を見出さないうで、全く同一の夫のみでかゝれて居るけれども、併しその篆書の體の時の形を派つてしらべて見ると、一として此れ等が同形で居たものはなく、それ／＼別の形體を有して居る。此れ等は皆楷書になる時に混じて同一に書かれたものである。即ち篆書に於

いては、



奉の字



奏の字



春の字



秦の字



秦の字

であつて、孰れも皆楷書の夫とは、全く類似を有して居ないものばかりである。其れ故に楷書の夫を以つて何等の深いしらべなしに、古體を揣摩臆測するときは妄斷に陥るの外ないのである。其の外又、句、句、句、句、勿などの文字に通じて居るところの勺に就いて見ても、亦同様のことが云へる。即ち其の各の篆體の形は、次ぎに見られる通りである。



句の字



句の字



勺の字



勿の字此の外に、尙、智の字の古體



などもある。

以つて、如何に其の古形に變化のあつたかと云ふことが察せられる。又吾人の最も普通に見る文字で、例へば男、思、胃などの文字の頭は孰れも凡べて田畑の田の字とばかり考へられて居て、さうでないと思ふものは殆んど少なからう。併しながら其の實眞に田の字であるものは男の一字のみで、餘は皆別字の變形である。即ち思の字の田は、鬼頭に象つたものであつて、胃の字の田は胃の腑に物の溜つて居る形を象つたものであるさうである(説文参照)。即ち、



男の字



思の字



胃の字

と云ふやうに、それぞれ違つた起源から出て居るのである。其れ故に文字の研究に於いて其の形態の類同を求め、又はその歴史的關係より分類しようとする時に單に楷書ばかりを立脚地として居ることは、頗る危険である。康熙字典などが、普通に文字論の時には、オーソリテイになるかの如く多く引き合ひに出されることがあるが、そんなことでは全く不安心である。其の意義をさぐるにしても音の

出どころをさぐるにしても、必ずまづ素との古形に、如何にあつたかを豫めしらべて見てからでなければ駄目である。去からざればキツト苦勞が水泡に歸するのである。

一、莫の字になぜ無の義があるか。莫の造字は、素と艸むらのうちに日（太陽）の没しかくれる形をなして居たものである。即ち之は、隠れてなくなるの義から出て居るのである。暮、墓、幕、なども之に關係がある。それ故に唯、漠然と、莫の字をにらんで居る丈けでは本義も何もわからう筈はないのである。（五八頁参照）



二、奉の字になぜホウの音がある。此の字の作りかたは既にも示した通り其の頭の部分に、邦、逢、蜂などの音符と同様な丰の字が含まれて居る。丰がホウの音である故に奉はそれに依りてホウの音を出して居るのである。然るに今日の楷書ではその音符のある所が全くわからなくなつて居る。（百頁参照）

かくの如き例は求むるに従つていくらでも発見することが出来る。それ故漢字の研究を若し十分に根本的に改めて行かうとするには、其の形の觀察には固より、其の意味の方面を見る時も、又、音の方面をしらべる時も、常に等閑にしてならぬのは、其の楷書以前の古體の調査と云ことである。音の上の變遷に悔るべからざるもの存するが如く又、形の方面にも看過することの出来ない太變遷の潮流が流れて居る。單に楷書の發達して以來ですらも、行書があり、艸書があつて、其間には種々の

混同、類推、省略の現象が行はれて居る。然らば何ぞ、獨りその楷書體以前の狀態に於いて、それ等の現象のなかつたと云ふことが考へられようか。

以上、述べ来たつた諸點を概括して見ると、結局次ぎのやうに觀られる。即ち、

一、支那文字の音研究は、其の文字中に音の符牒が含まれて居て、頗る研究の手懸りを與へて呉れて居る。それ故それをたよりに觀察を進めて行くことが最も便利であると思ふ。併しながら今日の漢字音には非常に音韻上の差別が現れて居つて、容易に其の間の關係を知ることがはむづかしい。宛かも一見偶然の現象の如くに見られるのが一般である。けれども少しく過去の歴史に溯つて其の音の由來するところを調べて見ると、其の變遷の有様がわかつて來て、決して偶然などではないことが判然するのである。その偶然などを見る間は未だ其の研究の至つて居ないものと云つても過言でないのである。

二、字音の研究と相俟つて觀察すべきものは其の形體の方面であるが、漢字の形は音の方と相俵づらない位にやはり變遷を重ねて以つて今日に至つたのである。併し形の方は音とちがひ一々視覺に訴へる事が出来るから、比較的わかり易くしらべることが出来るのである。吾人は其の見分けのえやすいと云ふ點に於いて、字體の相違異同の點を詳細に追究して其の間に存する一定の法則を發見することが出来る。それは即ち類推、省略の兩作用に依つて支配されて居るもの

であつて、所謂、誤字、俗字なども此の作用の産物に過ぎぬ。而して或る程度まではいかに誤字でも一概に誤字として排斥はしないで十分採用する丈けの態度が必要である。何となれば一般の俗字は採用せらるべき運命と勢力を有して居るものであるから。形體上から觀た漢字の研究はかゝる實際の側を見ることと同時に、又過去の歴史時代にも派つて、その字體の變遷、沿革をしらべ以て今日漢字の傾向が如何なる方面に向つて、進みつゝあるかを考察することは、必しも不可能のことでない。吾人は、此れ等の點に於て、支那文字の歴史的研究は、引いて漢字問題の將來に對し、且、又、漢字教授の實際問題に對して、密接なる關係を有して居るものであるまいかと、竊かに考へるのである。

第七章 文字上の傳説

一 緒言

傳説神話の研究が吾人に多大の興味を起さしめることは、東西兩洋を通じて變ることはない。殊に東洋に於ける傳説のうちには此の文字上の傳説に種々の面白い話が胚胎して居ると思ふ。云ふまでもなく傳説と云ふは其の文字なら文字の、出來た當時は正當の理由によりて、又その風俗、習慣、口碑な

どから自然に其の字の構造が生じたものであるのを、後世其の原義が時代の推移と共に忘れられてしまつたり、又必しも忘れられたのでなくとも、他に一層時代思潮に適合した考へが一般に行はれるに至ると、其の方に引きつけられて、原義が曲解され、遂には其の新解釋法の爲めに、舊來の原義が全く蔽はれてしまふことなどがある。或は稀には一時原意の忘れられて居たものが再び或る時代を経て復活されると云ふやうな場合もある。總べてかやうなことから文字構成の上に面白い無邪氣な傳説が生じて來るのである。

傳説は總べて國民心理の暗々に表れて來る一種の反射鏡の如きものである。又さうあるべきものである。併し場合に依つては往々、或る目的の爲めに方便として強ひて得手勝手な解釋の作られることがある。左に以上此等の總べての場合に於ける文字傳説の中比較的人口に膾炙して居る字について實例を擧げて見よう。

一 船の字

船の字は素と从舟各聲から起つて居るものであるが、今では船は大船の場合に用ひ、舟は扁舟などと云つて小舟の義に使ふ。船の字の偏なる舟が素と小舟の義であつたと云ふ點は争はれないけれども、船の字から之に面白い解釋を附けて、船は小舟に八口の義である。即ち茲に口とは人のことで、八口

とはつまり八人の義であるわけであるから、小舟に八人に乗せたるさまの意義が籠つて居ると解き、大古、禹の時の洪水に此の事實があつたのが、正しく文字上に残つたのであると云ひ、更に一步をすすめては耶蘇教布教の爲め、支那に滞在せる宣教師の如きは、頻りに之を例のノア(Noa)の洪水の話に附會して事實でもない勿體さをひねり出さんことに苦心し、漢民族の元始祖先は矢張り西人の方の血を分けたものであるとか、何とか云つて居る。此の説は頑是なき愚民、婦女子などには、單純にも直ちに信仰せられた。嘗に支那ばかりでなく、日本でも三十年前頃此の説は一時少なからぬ信仰者を得て居たことがあつた。

思ふに船の字の構造は元來かやうな宗教臭い文字では無論なく、文字學上で所謂諧聲文字と云ふ部類に屬するものである。もし果して宣教師連の言の如くにこの八口が八人の避難者と云ふ義であらねばならぬとするならば、金偏の場合の『鉛』の字は如何に解釋するつもりであるか。水偏の時の『沿』は何と解釋する。『鉛』、『沿』などの場合は説かず、毫も之を比較することはなく唯『船』の字の一字のみにかゝる獨斷を下す。これは宛ら徳川時代の國學者達が所謂言靈觀にも似て今日の學問からは頗る怪しい譯である。唯併し心理の方面より見て傳說的價值があると云ふに過ぎぬ。船は音センで支那現音は北京で *chuan* 廣東で *shün* である。而して八口は八と口との二字ではなく、玆では一字であつて、其の船と云ふ言葉の音のセンを示せる符號である。つまり音符である。『鉛』の字が音エン支那

北平音 *yan* 廣東音 *yun* なるもつまり、此の八口から音が出て居るのである。センとエンとは語頭の音こそちがへ、素とは何れも八口を音符とせるものである。沿の音エンも亦同理による。故に船の字を舟上の八人と解するのは甚しき牽強の説であると斷定する。因みに近來俗間で『松』の字が往々にして木偏に八口と書かれて居ることがある。これは全く別音の系統に屬するもので松の字の正しき形は飽くまで木偏に公の字を書くが正字である。其の木偏に八口がまゝ書かれて居るのは俗字であるから、之を船、沿、鉛、などと同類に見て論ずることは出來ないのである。

三 笑 の 字

屢話頭に上ることであるが、此の『笑』の字は俗間では竹冠りの下に犬の字を書く可きものと考られて現に雜誌『笑』の表紙にも此の犬の字の方でかゝれて居る。普通には之を竹藪のうちから、犬が笑ひながら出て來たと云ふ故事でもあつたかの如くに云ひ傳へ、何とか云ふ三十一文字の歌さへ出來て居る。併し此の『笑』の字は素と竹冠りの下に犬でもなく、又大でもなく、正しくは『天』の字が書かれる可きものである。妖怪の『妖』の字の音が天の音符に依つて出されて居ると同様に、此の『笑』の字も亦天を音符として居るのである。故に別段天に深い意味の籠つて居るのではないので、唯、音の符牒にしか過ぎぬ。實に此の天の音は笑の時にセウ *shen* 妖の時にエウ *yeu* となる符號であ

る。然るにこれが『笑』の時に限つて『犬』の字に書かれる譯はこの天の字を犬の字に見誤りたる爲めである。尙篆隸のときの竹冠りたる竹を誤つてその最後の處をば間違へて犬字の點と見たのに基づるものかと思ふ。

かゝる字劃の上の誤差は此の傳説を面白く作り出した故であるが、併し尙屢吾人の癖として一般に字を書き了つたあとで一つ點を打つこと。これが何となく氣もちよく感ぜらるゝと云ふ一種の感情が加はつて居る。それで笑の字を書くに竹冠りに大の字をかいてあとで、點をうつのであらう。兎もかく正字は笑である。更に古い時代で周代頃のもので云へば咲の字であつたと云ふ説がある。此の説の眞否は別としても、兎も角其の音符に天の音の存せしことは疑はれない事實である。

四 佛の字

佛の字に就いては価備などの異字もあるが釋迦その人が非常に尊く、古來人間以上のものとしてまで見られて居る點より、佛は人に非ず、飽くまでホトケなりと云ひ、其の人間に非ずとの考へより其の非と云ふ字と同意の弗の字を用ひ、之に人偏を添へて茲に『佛』の字が作られたものであると云ふ。此れは偶々佛の字の構成上より強ひて意味有りげに附會した文字傳説である。もしかやうに釋迦の至尊が『佛』の字に現はれたとするならば、佛の字以外にまた古く韓退之などが浮屠と書けるは如何

に説明するつもりなるか。論者は浮屠は浮圖なり寺のことなりと云はん。併し其の孰れにしても其の原語は正しくサンスクリットの Buddha なる一語の音譯たることは世人の普く知るところ。吾人は是に於て益佛の字に對する曲解の傳説が甚だ面白く出来て居ると云ふことを感ずるのである。

文字構成上の事實より云へば佛の字は元來かゝる勿體なき意味の構造を有せるものとは思はれない。唯その梵語のブダをうつすに佛陀とも佛ともあてて書くに過ぎぬ。弗の字の漢字の音はブツ(Bu)で梵語の原語をうつすに最も適當して居た音字である。故に佛をブツと讀ませて居るのも猶、沸、髒、佛をフツと讀ませて居るのと似たことで別に深い譯があるのではない。若し果して傳説上の俗解が正しいとするならば、沸の字なども亦水に非ざるものと云はなければならぬ理屈になる。されば佛の字のみを人に非ずの義と解するは、既に述べたる船を舟中の八人と解するやうな例で、眞の科學的解釋としては價値のない話である。唯お笑ひぐさとなることはあるも、之を信ずることは出来ない。

五 穴の字

近代人類學、土俗學の普及と共に其の方面に興味を感じた人が、まゝ文字上に其の解釋を試みんとすることがある。未だ確かな傳説となれるわけではないが、一種の面白い文字解をなして、その側の人々には多少信じられて居ることがある。それは即ち『穴』の字の構造上から觀たる上代の住居説で

ある。穴の字は説文に土室也从宀八聲とあり、宀冠りに八の音符で出来て居る。然るに論者は云ふ其の宀は即ち穴の上の蔽ひもので下の八の字は即ち是れ縦穴の象形であると云ふ説である。

穴の字から推定せられたるその穴居のかたちは或は一説としての價值もあらう。併し黄河の上流地方陝西、甘肅方面を旅行した人々の實話によると、その地方一帶の斷岩に掘り込まれたる穴居のあと、其の穴が宛かも此の



の字なりに出来て居ると云ふ。現に河南鄭州にも之を見る。果して、此の實狀から上の云ふ如く所謂タテ穴に象つたものでなく、却つてヨコ穴の側面を寫したものであると云はれる。つまり穴の字は即ち横穴の入り口を示した文字であるらしい。素より後に穴の字はタテ穴の場合にも其の他一般何の穴にも適用されるに至つては居るが、それは皆原義の應用たるに過ぎぬ。素とは上に述べたやうなものとして觀るのが正統であるかと思ふ。

六 嶋 の 字

嶋の字についてはその異字の場合に随分人が理屈を云ふ。例へば鳥と山とを上下に重ねて書くやうな場合に、山の上に鳥を書くことは是認して居りながら、反對に鳥の上に山の字を書くことは誤りなりと云ふ。其の理由に、鳥が山の下側になることは事實上なく、必ずや山の上に在るべきであると云

ふ。故に **山鳥** などと書いては理屈に叶はないが鳥と書くならば理屈に合ふと、かやうに云ふ。

鳥の字を此の場合にあく迄トリと見るからかくの如く理屈つばくなるのである。かゝる論法から行くと鳥の字なども、鳥の頭上に生ぜる草をツタと云ふべきが如きわけでなければならぬ理屈になる。かゝる曲解は明かに誤りであつて、鳥の字の場合の鳥の字はつまり、皆佛の弗、笑の夭と同様に唯その音符と見るべきものである。而してこの嶋の字の異字にかやうに音符の鳥が下部に書かれて居るとは笑の夭、嶺の領などと同じわけであるから、山の字の下に音符として鳥の字が書かれることは決して怪しむに足りない。

七 吉 の 字

吉の字の構成については、口の字の上に土を書くをキチと讀み、口の字の上に土を書けばヨシと訓ず可きものなりと云ふ。然るにキチの音の場合の訓は如何、又反對にヨシの訓の場合の音は如何と云ふ點に就ては更に云ふところがない。此の考へは果して如何であらう。

固より漢字の音には其の書を少々ばかり變化させて殊更其の音讀を違はせて居るものもないではない。例へば者の字を音のしるしとして、其の冠りに艸冠を書き、『著』と書いては之をチヨと讀ませ、而して『着』として之をチャクト讀ませて居る。つまりサとミとの相違のみで音上の區別の立てられ